

び支那より本邦に亘つて居る。食物は前種と同様である。

七三四

[四] 金鳩 *Chalcophaps indica* (Tinn.)

英名を「グリーン・ウイングド・ドブ」(Green-winged Dove) といふ。廣く亞細亞の熱帯地方に産し、我邦にては石垣島、入表島にて得たることがある。雄の背部は、金綠色にして、甚だ美麗であるが、雌はその部は茶褐色である。

[五] 緑鳩 又 尺八鳩 又 山鳩 *Treeron sieboldi* (Temm.)

英名を「ジャバニース・グリーン・ピジョン」(Japanese Green Pigeon) といふ。體の上面は葡萄鼠に、黄綠色を帯び、喉と胸とは黄色より黄綠色である。腹は白く、風切と尾の外側羽とは黒く、雄は翼上に濃栗色の斑紋あれども、雌にはない。この屬のものは、尾は楔状をなし、その中央の羽は、甚だ長からずして、多少尖つて居る。この種は、本邦特有の鳥にして、四時本邦に棲息すれども、北海道には、夏季渡來するのみである。常に海岸近くの樹木ある絶壁を好み、屢々砂岸に下るのである。その鳴聲は長く、續き、且つ變化ありて、恰も尺八を奏するが如しである。その性質は、非常に怯懦にして、野生の櫻實を嗜食するのである。

[六] 鴉鳩 又 うしばん *Carpophaga janthina* (Temm.)

英名を「ジャバニース・フルート・ピジョン」(Japanese Fruit-Pigeon) といふ。大なる鳩にして、翼長は、七寸一分乃至七寸五分である。全身濃褐色にして、頭、頸、背、胸等には、紫色と、綠色との金屬光澤を有する。この種は、本邦の海濱、又は附近の島嶼に産する本邦特有の鳩である。

第五日 鶉鷄類 (Gallinaci)

體は概ね短大にして、羽毛を密生し、頭は小さく、頭上には裸出せる部分がある。嘴は強壯且つ短直にして、鋭るごとく、上嘴の先端は、少しく下方に屈曲して、下嘴を被ひ、種實を碎くに適する。頸は短きか、或は中庸の長さにして、雄にては肉垂がよく發達する。翼は短く、且つ圓るく、永く高所に飛ぶとが出来ない。脚は短く強壯にして、地上を歩行するに適し、中には雷鳥等の如く、迅速に走るものがある。雄に於ては、例外はあるが、通例距がよく發達し、之を用ひて攻撃若くは防禦の器とする。雄の羽毛は、雌よりも美しいのである。尾翹はその數常に十二枚以上ありて、時には十八枚乃至二十枚を有するものがある。翼の中で、手翹は十枚の翹より成り、腕翹は十二枚乃至十八枚である。脚は常

に跗蹠部に至るまで、羽毛を生じ、時には趾に至るまで、羽毛を生ずるものがある。

この類は、大部分は地上に棲息し、森林、耕地、平原、高山、若くは海岸に棲み、常に地を搔撥して、漿果、芽、種子、昆蟲、蠕蟲を食し、地上に拙劣なる巢を造れども、稀れに、高木に巢を造ることがあつて、その産卵数は夥しいのである。雄は多くの雌と交り、時には孵化の勞に服するものがある。雛は生まるゝや否や、通例は直ちに親に従ひて、餌を索めに徘徊するのである。この類には家禽として飼はるゝものも多く、従つて卵及肉は食用となるものが多い。また獵鳥として狩獵家に貴ばれて居る。

第一 禁獵鳥類(無期保護鳥)

(一) 雷鳥

第二 獵期外禁獵鳥類(有期保護鳥)

(一) 鶉

(2) 松鶉

(一) 七面鳥科 (Crecidae)

體は、七面鳥の如く大なるものあれども、また矮鷄位の小さいものもある。嘴は短く、時には強壯にして、屢々額の基部に於て大くなれるものもある。脚の跗蹠部は中庸の

長さにして、後趾はよく發達し、その位置は、低下して居るのである。前向せる三趾は、その基部に於て、膜に因りて連結せられ、爪は皆屈曲するのである。翼は短く、且つ圓い。尾は長く圓るく、且つ扁平なれども、羽毛は稍々水平に彎曲する。また頭には、鷄冠がある。

本科のものは、亞米利加の温暖地方の森林に棲息し、約五十種を有するのである。

(一) 七面鳥又吐綬鷄 *Meleagris gallopavo, L.*

北米のオハイオ、ケンタッキー、イリノイス、インディアナ州の北西部、ミシシッピ河、ミズーリ河、オハイオ河附近の森林地に野生する。而して恐らくは十六世紀に於て、歐羅巴に輸入されたものらしく、その肉は、脂肪及び蛋白質に富み、頗る美味なるを以て、現今は、廣く各國にて飼養せられて居る。

體軀は頗る肥大し、頭は小さく、且つ裸出し、嘴は短く強壯にして、基部は幅廣く、且つ羽毛なき膜にて被はれて居る。野生の雄の羽色は、淡黄褐色である。頸は寧ろ長き方にして、藍色と紫色とを混じ、肉瘤を有し、その前方には、肉垂を有する。これは輝ける赤色にして、自由に膨脹するを得るのみならず、その色も藍色に變化するのである。雄の上胸部よりは、長き剛毛が總狀になりて垂下すれども、これは、雌にては極めて小さく、唯

僅に老ひたる鳥に於てのみ見らるゝのである。

翼は短く、その中央部は凹み、且つ非常に圓味を帯び、野生のものにては、淡褐黄色にして、青色と緑色を交へ、且つ金屬光澤を有する。また蹠の先端は、截り取りたるが如く

なり、黒色にして、天鵝絨様の廣帯を以て、縁取られて居る。腹部と腿とは、褐灰色にして、尾蹠は寧ろ長く、幅廣くして、圓味を帯びたる、十八枚の蹠より成り、動物の意志に従ひ、自由に之を扇狀に擴張することが出来る。

脚は強壯にして太い。野生のものにありては、輝ける淡紫赤色にして、同色の四趾を有する。趾は楕狀をなし、第一趾は小さく、且つその位置は、少しく高い。また第三趾は非常に長い。

前向せる三趾の基部には、膜を具へて居る。爪は褐色、且つ強壯にして、稍壓搾され、また屈曲して居る。



鳥面七ノ生野 圖十百三第
(After Protheroe)

雄は三年に達すれば、略ぼ成熟し、年を経るに従ひ、大きさと體重を増し、體の長さ四

尺餘、翼を擴ぐるときは、五尺五寸餘、胸の肉垂は一尺に達するものありて、體重は二貫二三百匁に達するものもある。尤も或る人の射撃した七面鳥では、臟腑を抜き出した後の體量が、實に三貫三百八十匁許のものもあつたのである。雌は雄よりも小さく、肉垂も亦小さく、又雄の如き燦爛たる彩色なく、體の下面は褐黒色である。その大なるものゝ體重は、一貫五六百匁に達するのである。

一雄は多雌に交はれども、雄は常に雌と離れて徘徊する。而して雌は雛を伴ひて徘徊し、屢々七八十羽の多數を算する所の、他の團體と共に、連れ合ひて徘徊することがある。かゝる多數の團體も皆雄と同伴しないのである。これ雄はよく雛と争闘し、之を殺すことがあるからである。而して成熟せる鳥も、幼鳥も、皆同一の徑路を取りて、諸處に漂遊し、成長せるものでは、よく飛ぶこと能はざれども、その歩行は迅速なるを以て、常に脚に依頼して旅行し、河を横斷するか、若くは犬に追はるゝにあらざれば、翼を用ひて、飛び立つことはしないのである。

雄は、雌の鳴き聲を聞くや否や、直ちにその方に走り行き、雌の姿の見ゆると否とに拘はらず、尾を高く擴げ、頭をば肩の上後方に引き寄せ、絶へず翼を低下して動搖させ、高慢に歩るき、頻りなしに呼氣を吐出し、時々頭を傾け、或は眼を轉して靜止する。斯く

雄が雌に注意を惹かんと努めて居る際、雄と雌との間に激烈なる争闘を惹起し、遂に弱者は、強者の爲めに殺さるゝことがある。

七四〇

蕃殖期は、春にして、四月の中旬頃、雌は乾ける地上の凹所に、柔軟なる草、藓若くは枯草を蒐集して巢を造る。卵は光澤なき乳酪色にして、これには赤點を散布してある。一産に十乃至十五卵を産めども、時には二十個に達することがある。卵の大きさは、長さ二寸四分許、幅は一寸六七分であつて、形状は寧ろ尖つた方である。雌は餌食を索めに、巢を出るときは、その上に、蘆葦其他の枯草を被覆し、以つて敵をして發見し難からしむるのである。また前と同一の徑路を取りて、巢に歸ることはない。これ狐、鳥の爲めに、巢を發見せられて、卵を奪はるゝを恐れるからである。卵は凡そ三十日位で、孵化する。雛は生れて二週間許にして、自身樹上に峙することが出来る。然し大形の鴟鵂が、常に雛を奪はんと窺つて居るのである。雛は生れてより、七ヶ月間、親に因つて養はるゝのである。

七面鳥は、常に草、漿果其他の果實を食ひ、また小麥を食ふことがある。又昆蟲、蛙、蜥蜴を好んで食ふのである。卵及び肉は、食用となる。外體下の側面、及び腿の周圍に生ずる柔軟なる長毛は、インディアンの婦女、及び農家の妻女に因りて、風領を製するに用ひらる。

れ、非常に美しいのである。

(二) チナムー科 (Tinamidae)

英名を「チナムー」(Tinamou)といふ體軀は、雄子大より鵝大である。嘴は短けれども、尙稍々長きものもある。その中央には鼻孔を有し、口角は眼下に達し、舌は甚だ短い。脚の



一ムナチ色褐 圖一十百三第
(Photo by W. P. Dando)
(From Living Animals
of the World)

跗蹠部は、中庸の長さを有し、前向せる三趾は、基部に於て、膜に因りて結合し、後趾は小にして、地に着かない。翼は短く、且つ圓く、尾は小形の柔毛より成り、外部より見へない。頭は小さく、頸は寧ろ長く、體は肥大にして、腿部は突出する。

幼者は、亞米利加駝鳥の幼者によく似て、茸毛状に見ゆる綿毛を以つて被はれ、羽毛の生へ方は、極めて迅速である。雌は別段に巢を造ることなくして、裸出せる地上に數個の卵を産む。卵は三週間後に孵化して、雛となる。而して唯雄に因りてのみ、卵を温めらるゝのである。

この種には、約七十種を有し、皆メキシコ、中央亞米利加、南亞米利加に産し、森地若く

は草原に棲息し、穀粒、草、昆蟲等を食する。常に地上に棲息すれども、夜は樹上に峙する
のである。

七四二

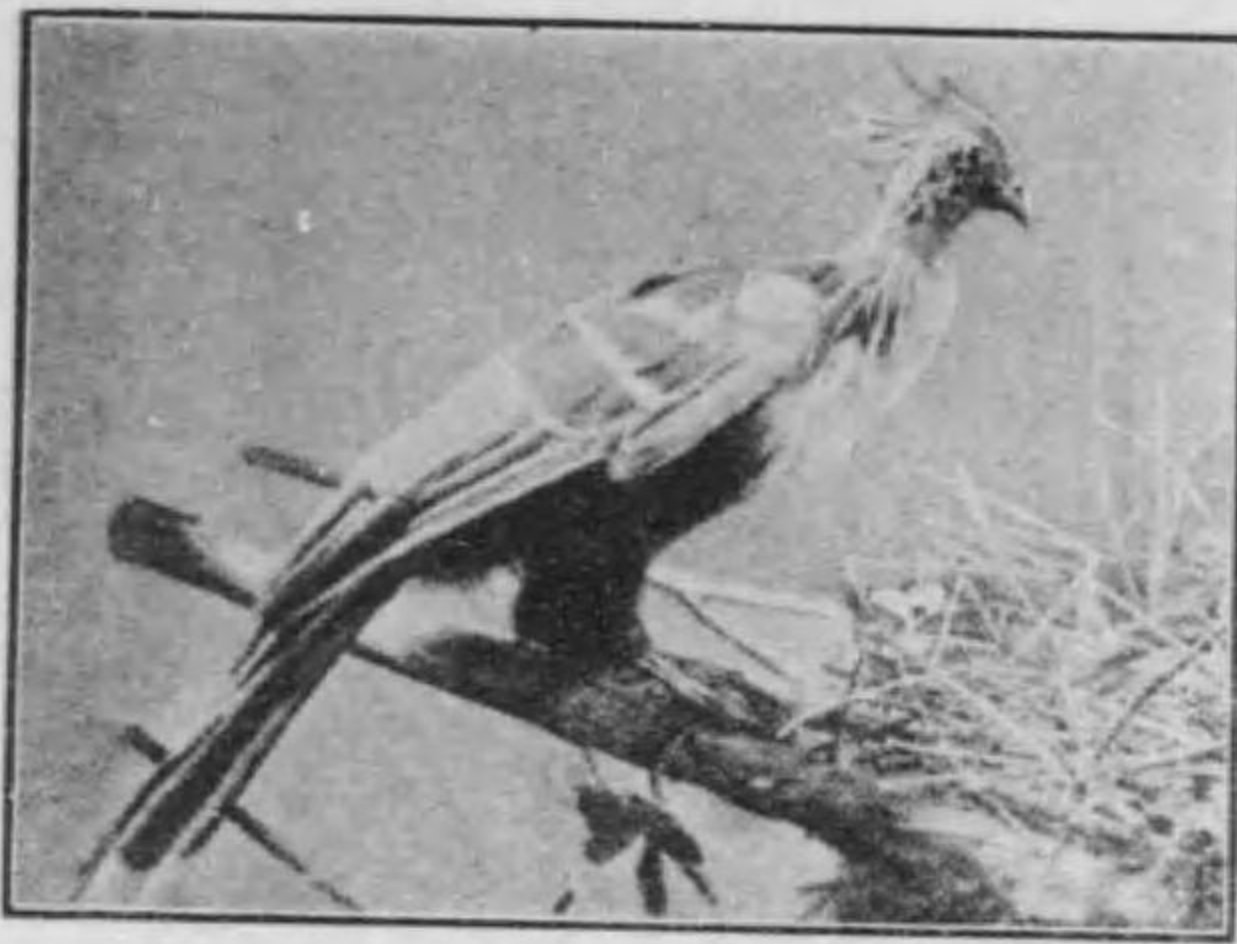
〔一〕 褐色チナムー (Rufous Tinamou) *Rhynehotus rufescens*.

體の大きさは、小なる家鶏位である。嘴は長く、手翼の蹠は肉桂色にして、體の羽毛は黒と焦茶色にして、横に斑紋がある。この鳥の肉は、食用として美味である。

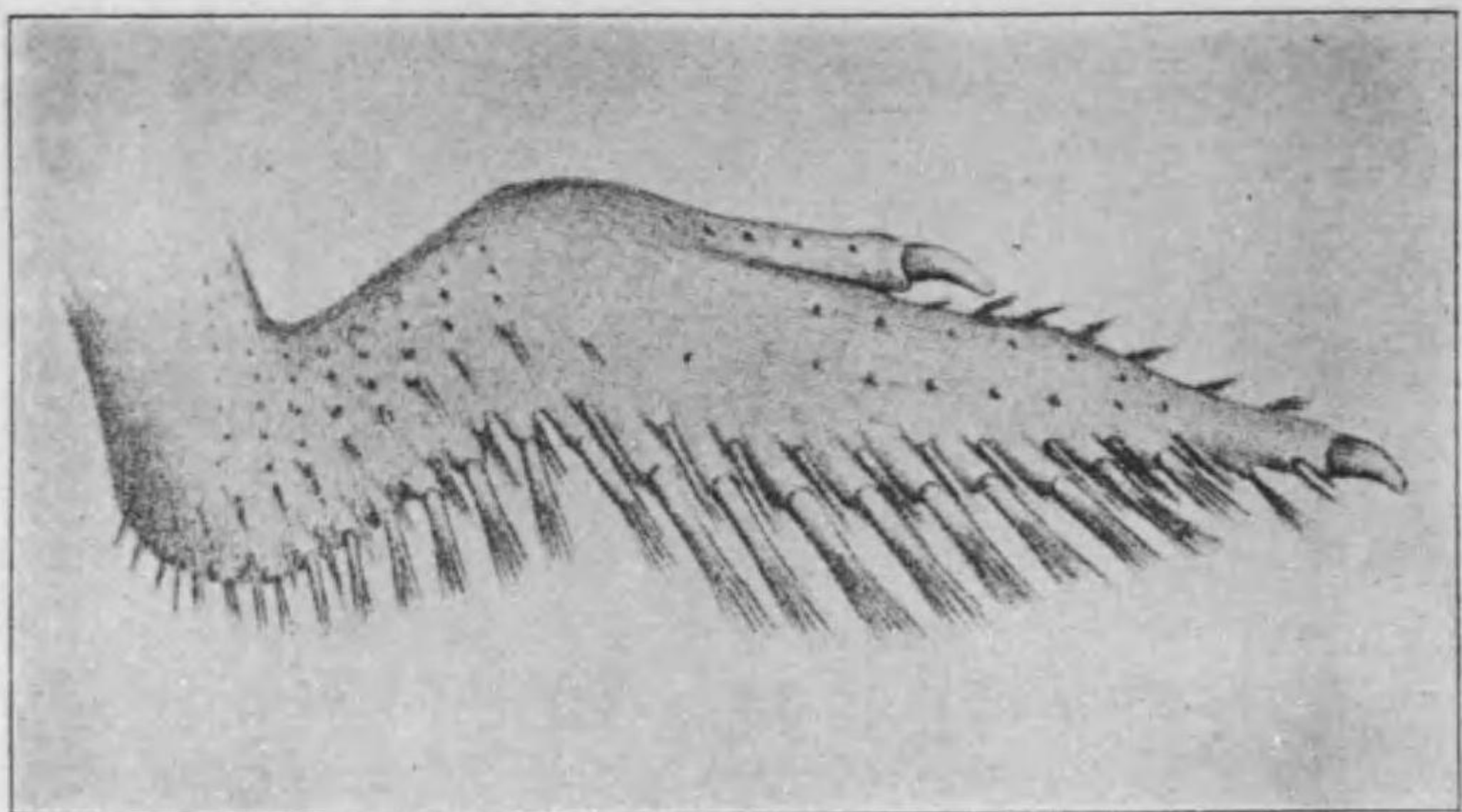
〔三〕 ホートデン科 (Opisthocomidae)

〔一〕 ホートデン *Opisthocomus hoazin*.

南米なる英領グイアナに産する鳥にして、英名を「ホートデン」(Hoatzin) 又「ガバーナー」(Governor Battenberg's Turkey) 又「ハンナ」(Hanna) 又「ステッキンキング」(Stinking Pheasant) といふ。最後の名即ち譯せば「悪臭を有する雉子」といふ名は、その肉に、麝香若くは生の皮の如き、臭氣を有するに因るのである。この鳥の大きさは、雉位にして、嘴は短く、丈夫で、口角は額の下に位置する。脚には四趾を有し、第一指は後向し、前方にある三趾は、その基部は膜に因つて



シナト 1 ホ 圖二百三第
(From the Living Animals of the World)



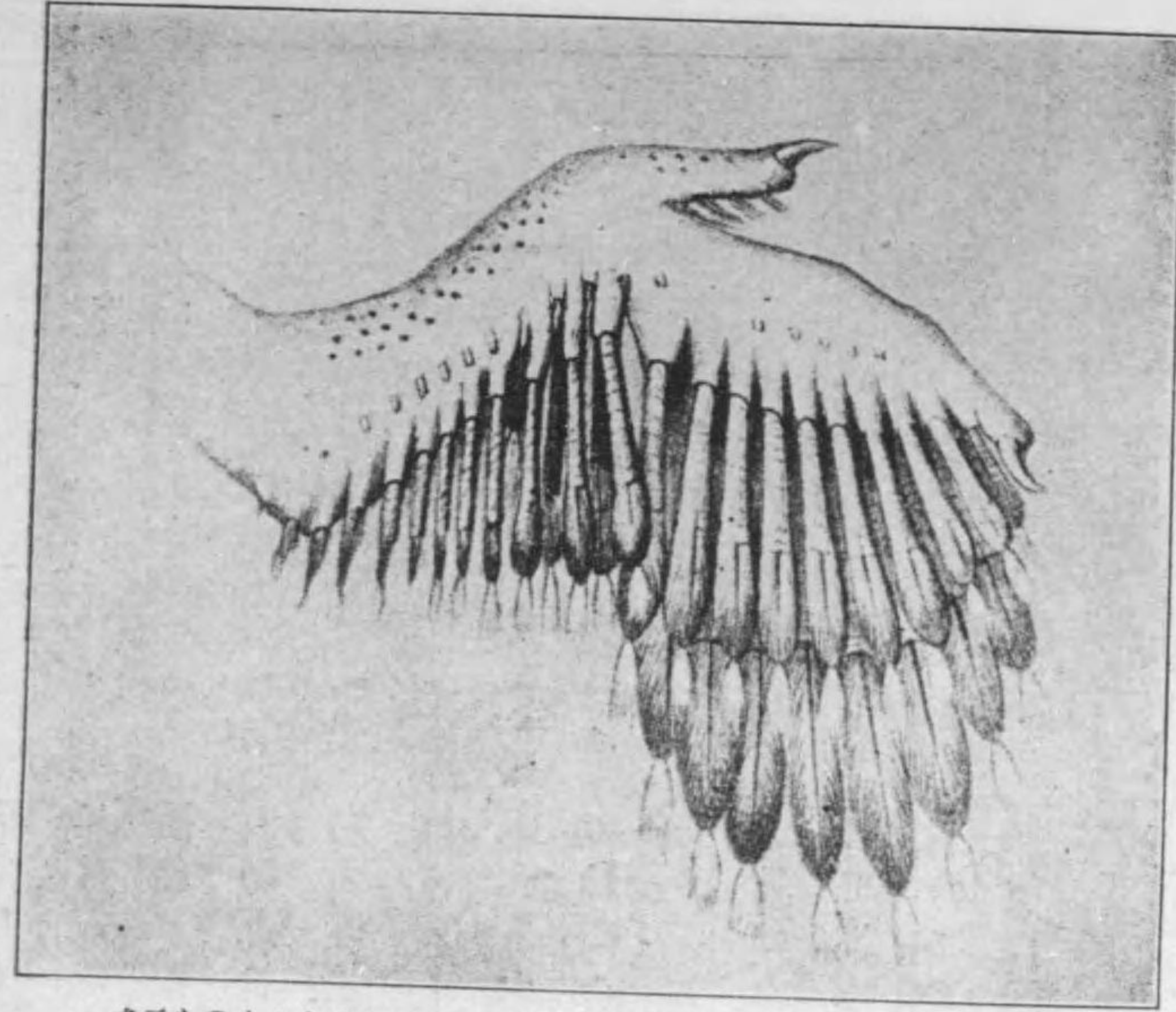
シナト 1 ホ 圖三百三第
(H. Grönvold) (From Marvels of the Universe)

結合して居ない。尾は長く、且つ圓く、頭は小さく、之には冠毛を有する。顔面は裸出し、毛色は淺黄色と褐色と、栗色とを混して居る。常に群をなして、河岸の樹上に棲息し、植物の葉及び漿果を食する。この鳥の嚙嚢は、變化して砂嚢の代用をなし、眞の砂嚢は、その作用を失ひて、ハシバミの果實の大きさに、退化したのである。これが爲めに、胸骨の形状も、他の鳥類の胸骨とは、全く異つた形状になつたのである。

巢は、水面に懸れる樹木の枝上にありて、枝を以つて、編みたる粗糙なる構造である。雛は卵より孵化するや否や、嘴と翼と脚とを用ひて、活潑に、枝より枝に攀縁する。雛の第一指と、第二指とは、長き爪を有し、爪は甚だ屈撓性に富んで居つて、指として、作用するのである。而して雛の手は、非常に長く、



圖五十三百三第
（From Marvels of the Universe）
ホトトギスの木樹が雛のニヤト！ホ



圖四十四百三第
（H. Grönvold）（From Marvels of the Universe）
ホトトギスの雛に翼の雛のニヤト！ホ

飛翔用の羽が充分に發達し來る迄は、爪と相俟つて、樹上の攀縁を助くるのである、且つ先端にある羽の翹は、發達することなくして、以つて、爪で枝を握ることを妨害せぬやうになつて居る。然しながら、翼面が鳥をして、飛翔し得るやうに、充分に大きくなるや否や、今まで發育を止めてあつた翹は、成長し始め、同時に爪は、漸々に退縮し來つて、遂には全く消失するのである。

〔四〕塚造り鳥科
(Megapodidae)

體軀の大きさは、家鶏より雷鳥位

である。嘴は家鶏の嘴に似たれども、鼻孔は圓く開いて居る。脚は強壯且つ長くして、殆んど伸直なる爪を有し、前向せる趾の中で、内方にある二趾は、基部は膜に因りて結合し、後趾は大きく、且つ低く着いて居る。翼は短く且つ圓るく、尾は中庸の長さであるか若くは短いのである。

羽毛は、常に暗色にして、光澤を有することなく、褐色若くは黒色である。頭には多少裸出せる、赤色の皮膚を有することがある。羽毛は雌雄に因りて、相違することなく、且つ季節的變化なく、幼鳥は非常によく成鳥に似て居る。

卵をば、鳥が植物質の塵芥等を用ひて、塚状に造りたるもの、中へ産むか、又は砂中に埋め置くのである。卵は鳥の大きさに比して、甚だ大きく、白色若くは石竹色を帯びて斑紋がない、而して六週間にして孵化すれども、別に親鳥に因りて孵化せらるゝことなく、唯時々、雄が巢に穴を穿ちて、之を閉ぢたりして、温度の加減をするのである。

この科のものは、濠太利亞、サモア、ニコバル、フィリピン諸島に産し、約二十四種ありといふ。

〔一〕 塚造り鳥 *Catheturus lathami*.

英名を、オーストラリアン、ブラッシュ、タキー、(Australian Brush-Turkey)といふ。頭は裸

出し、石竹色をなし、肉垂は輝ける黄色にして、體

の羽毛は、暗色である。濠州の森林中に棲息し、土砂、枝葉、雜草等を用ひて、高さ四五尺もある塚状の巢を造るのである。

〔二〕 ニコバル塚造り鳥 (*Nicobar Mound-BUILDER*) *Megapodius nicobariensis*.

セレベス、モルツカ、及び附近の島嶼に産し、海岸に近き叢林に徘徊し、羽毛は褐色と灰色とを帯びて居る。この鳥の塚は、高さ八尺周圍六丈のものも、發見せられたのである。この中に、雌は二日毎に、卵を産む。

〔五〕 雉科 (*Phasianidae*)

頭の一部分は、羽毛なく、殊に頬の部分に於て、然りである。而して屢々彩色ある鶏冠に因りて、飾られて居るのである。嘴は、中庸の長さを有し、強く屈曲し、上嘴の先端は、下



鳥リ造塚 圖六十百三第 (By H. Grönvold)(From Marvels of the Universe)

方に彎曲して居る。雌雄は著しく羽毛を異にし、雄の羽毛は、美麗なるのみならず、體軀も大きいのである。皆東半球に産するのである。

〔一〕 鷄 *Gallus bankiva*, Temm.

「にはどり」は庭鳥の義なりと、和訓栞に見ゆ。體軀は肥大し、頭には、鷄冠を戴き、雄の鷄冠は、雌のよりも大によく發達し、且つ直立する。鷄冠の形状と大小とは、品種に因りて一様でない。また嘴の下には二個の肉垂を有し、雄にては、よく發達して居る。嘴は短直且つ強壯にして、上嘴の縁邊は下方に彎曲して、下嘴を被ひ、且つ、其先端は鋭いのである。上嘴の基部には、鼻孔を開き、その上縁には、軟骨質の鱗狀瓣を有する。翼は小さけれども、尾翹は擴張して居る。脚は強健にして、地上を歩行するに適する。三趾は前向し、一趾は後向する。爪は大きく且つ鉤狀に曲り、塵芥、土砂を搔撥するに適する。尤も鳥骨鷄にては、趾は五本ありて、三趾は前向し、二趾は後向する。雄にては後趾の上内方に、距を有し、之を用ひて、争闘の具となすのである。

雄は、雌よりも大きく、且つ長き尾翹を有し、羽毛の彩色も美しい。その性、常に争闘を好み、嘴と距とを用ひて戦ひ、多雌を伴ひ、活潑に鳴く、且つ時を告ぐるのである。常に蠕蟲、昆蟲及び其の幼蟲を食し、また穀物、其の他の植物質を食ふのである。

鷄は、古來より各國に飼養せられたるものにして、従つて品種極めて多けれども、其原産地は亞細亞の東南部にして、これより北は支那に、西は波斯に入り、この二國が中心となりて、遂に今日の如く諸國に擴がりたるものである。畔柳都太郎氏の「東西鷄文學」に據れば、支那にては、紀元前千四百年代に、西域より家禽を輸入したといふ傳説がある。また紀元前千二百年から、同じく八百年迄のもの、指定さるゝ「マヌー」の法典の中に、野鷄は食ふことを得べきも、家鷄は食ふことを許さずと、いふ個條がある以上は、その頃既に家鷄として、完全の域に到達したことを、推測するのである云々。

〔一〕 赤色野鷄 *Gallus bankiva*, Temm. = *Gallus gallus* = *Gallus ferrugineus*.

英名を「レッド・ジャングル・フアール」(Red Jungle Fowl) 又「バンキバ・ジャングル・フアール」(*Bankiva Jungle Fowl*) といふ。形貌は本邦舊來の地鷄に似て居つて、家鷄の祖先として、認められて居る。雄は全長二尺四寸三分に達し、頭部より頸部の外面と上尾筒とには、赤黄色の羽毛を被り、胸部は黒色である。嘴と脚は暗色にして、鷄冠は、その外縁鋸齒狀をなし、且つ緋紅色を帯び、耳朶は印度産のものにては、殆んど白く、且つ體の羽毛は赤色が淡く、且つ脚は石板色であるが、バルマ及び馬來半島産のものは、耳朶と鷄冠と肉

垂とは深紅色にして、脚は稍黄色である。野鶏の尾は黒くして、十四枚の長き尾より成り、且つ水平に垂れて居る。雌は全長一尺三寸八分に達し、羽毛はカシハ色である。

この種は、北部印度即ちシンドよりバルマに至るまで、及び交趾支那よりマレイ半島及びチモルに至る多くの島嶼、及びフィリッピン諸島に産し、ヒマラヤ山にては、海面上四千尺の高地に棲む。西部印度に於ける南方の限界は、ヂェルドン氏 (Jerdon) に據れば、ネルブツダ (Nerbuda) の南に達する。而して東方の限界は、ゴダバリの左岸 にまで、及んで居る。マレイ産 のものは、高木鬱蒼として茂れる森林、又は普通の竹林ある藪地に棲み、雌は一月乃至七月に産卵すれども、その期節は、地方に因つて、異つて居る。而して一産に、八乃至十二個の乳白色の卵を産むのである。

【一】 灰色野鶏 *Gallus sonnerati*.

英名を「グレー」ジャングル、フワール (Gray Jungle Fowl) 又「ソネラット」ジャングル、フワール (Sonnerat Jungle Fowl) といふ。印度の南方に産するものである。

【二】 錫蘭野鶏 *Gallus stanleyi* = *G. lafaytii*.

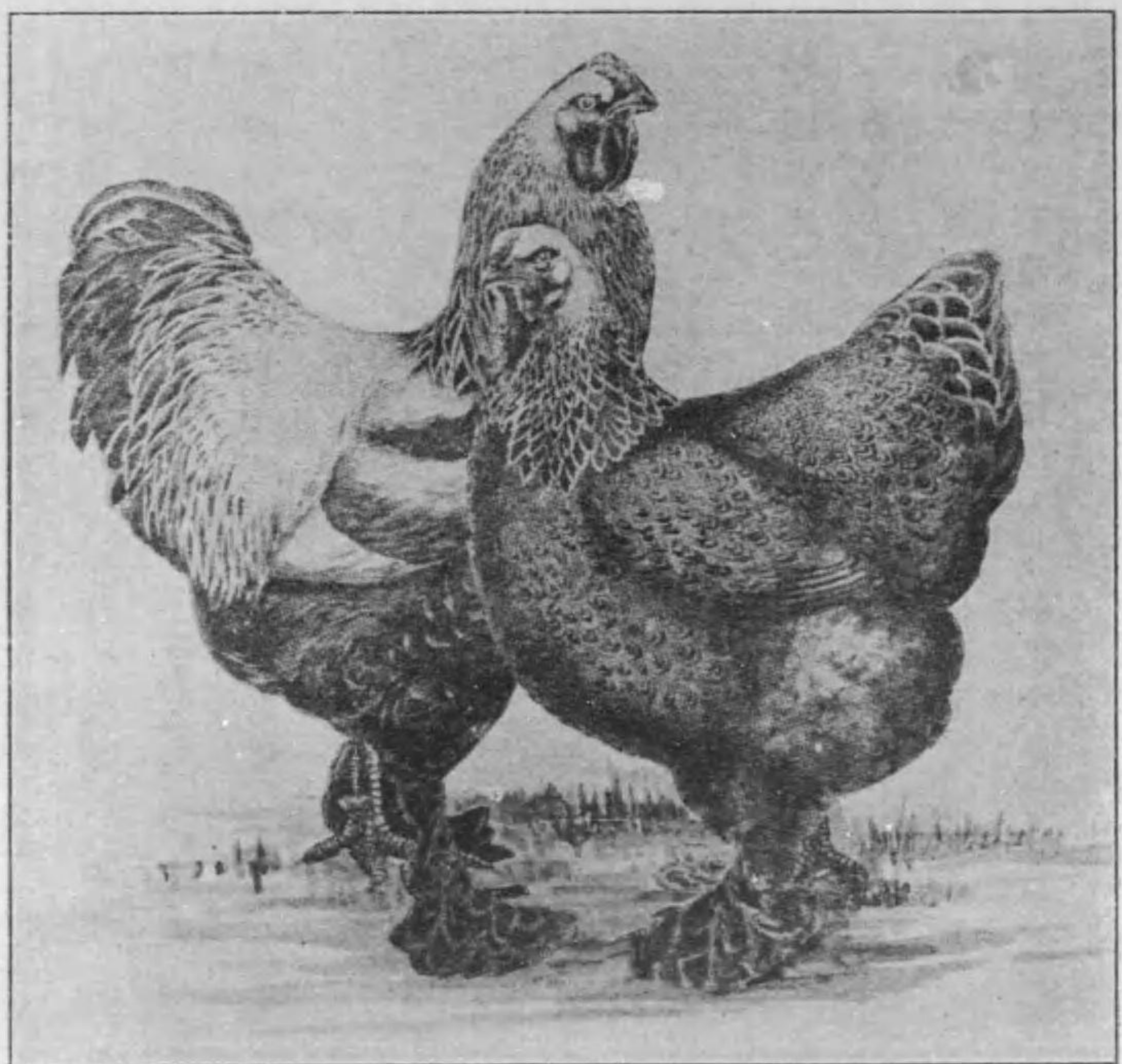
英名を「シンガリース」ジャングル、フワール (Cingalese Jungle Fowl) 又「セイロン」ジャングル、フワール (Ceylon Jungle Fowl) といひ、錫蘭島に産する野鶏である。雄は體の下部

は赤く、鶏冠は、その縁邊赤色にして、その他の部分は、黄色である。頬は紫赤色にして、肉垂も亦紫赤色である。

【四】 叉尾野鶏

Gallus varius = *G. furcatus*

英名を「フォークド」テイル (Forked-tailed Jungle Fowl) 又「瓜哇島」より東は、フロレス 島に至るまでの島嶼に産する。鶏冠は、赤と藍色とを帯び、その縁邊は、鋸齒状をなすこ



第三百七十七圖

七五二
とはない、而して願の下には唯一個の肉垂を有する。また羽毛には緑色が優つて居る。
この種と前記二種とは、今日の家鶏の祖先にあらざるものと認められて居る。

【五】 ブラマ (Brahma)

印度の原産にして、米國にて改良せられたるものである。體は肥大し、且つ強壯にして、よく氣候の變化に堪へ、性質温和にして、争闘を好まず、容易に肥大するを以て、食肉用として賞用せられて居る。またよく産卵し、冬季と雖も、産卵を休むことなく、平均一年百三四十個の卵を産むといふ。鶏冠は三枚冠にして、顔面、耳朶、肉垂共に紅色を呈し、脚は黄色にして、多く毛を生じ、尾は短くして黒色である。羽毛の色に因り、淡色ブラマ (Light Brahma) 暗色ブラマ (Dark Brahma) に別れて居る。

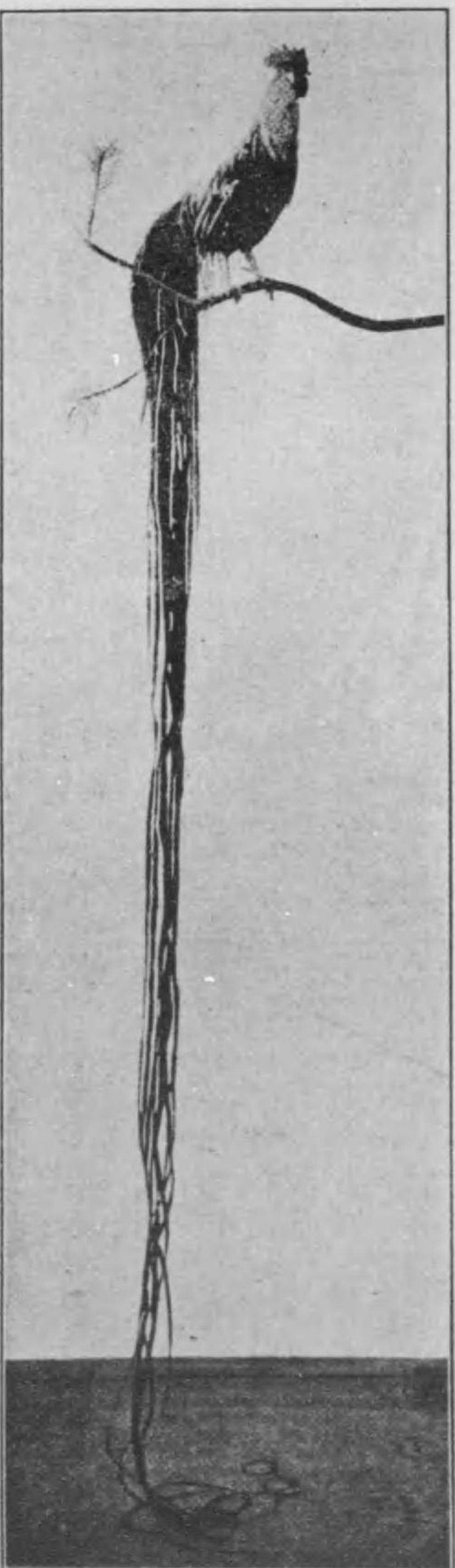
【六】 コーチン (Cochin)

清國の北部及び中部の原産にして、俗に「クキン」と稱するのである。體は偉大且つ強壯である。よく成長せるものは、一貫五六百匁に達する。鶏冠は單一にして、體には羽毛を粗生し、尾は極めて短く、脚には毛を密生する。この種は肉用として賞用せられて居る。而して羽毛の色に因りて、眞黒交趾 (Black Cochin) 淡黄色交趾 (Buff Cochin) 油羽交趾 (Partridge Cochin) 赤交趾 (Red Cochin) ヌーロンブ油羽交趾 (Pencomb Partridge Cochin) 純白交趾 (White Cochin) 等に區別せられて居る。

【七】 烏骨鶏

俗に「オケコ」といふ。本邦及び清國に産し、羽毛は極めて柔軟にして、細裂し、その状、恰も絹絲や獸毛を着けたるが如くに見ゆる。鶏冠は圓形にして、放散状をなし、鶏冠と顔

第三百二十圖 長尾鶏 (From Marvels of the Universe)



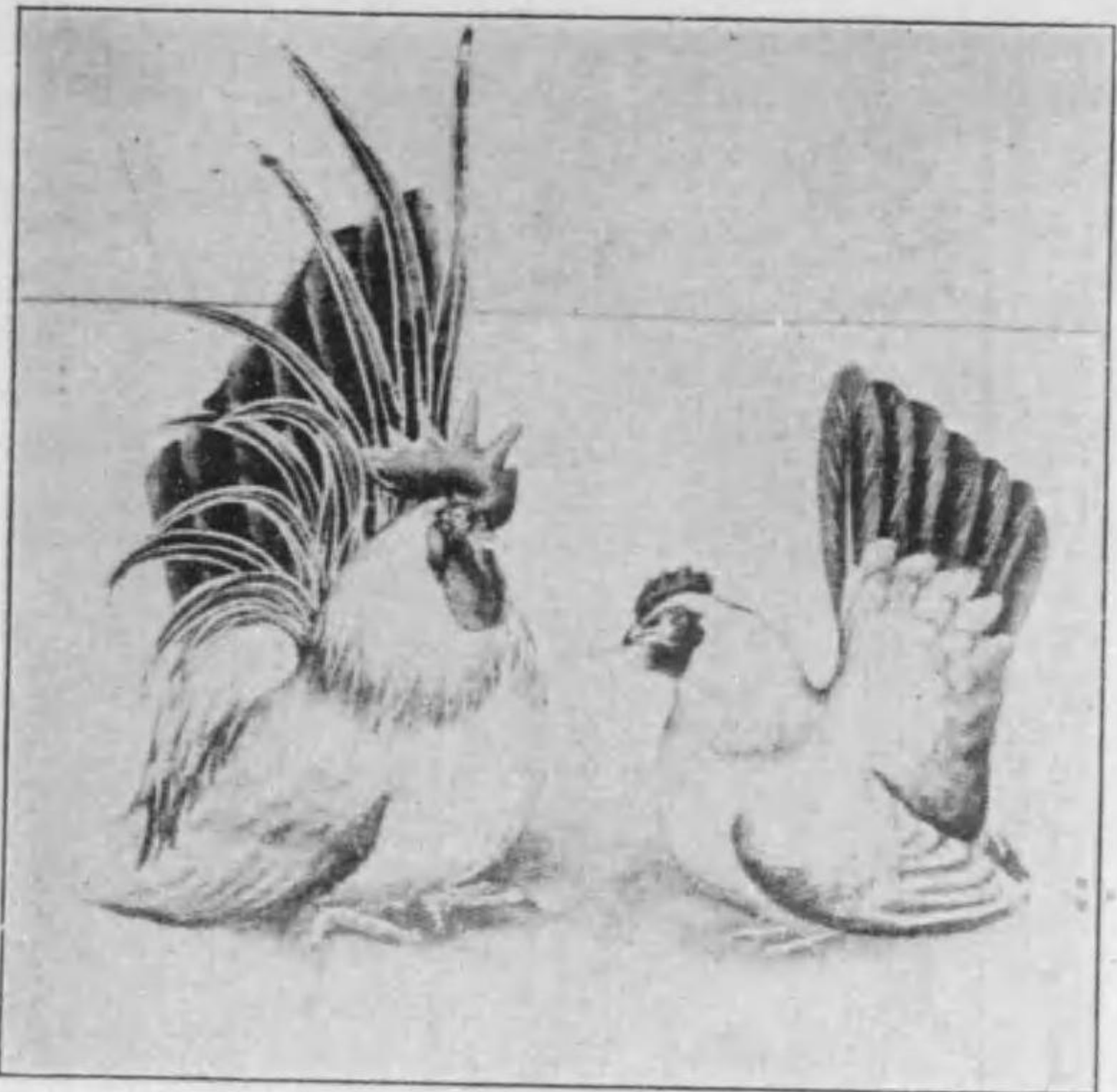
と、嘴とは、皆藍色にして、體色は白色なるのが、普通である。この種は、抱卵用に適するものである。

【八】 長尾鶏

内外普通動物誌

英名をロング、テイルド、フワール (Long-tailed Fowl) 又トサ、フワール (Tosa Fowl) といふ。

七五四



図一十二百三第 (桂 柳)

この鳥は我邦の特産種にして、高知縣長岡郡、後免町附近なる篠原といふ所が、著名なる産地である。尾の長は、通常一丈六七尺より、最も長きは二丈四尺に及ぶのがある。體の模様は、地鶏の如くにして、簀羽はよく發達し、長きものは、七八尺に及ぶ。此鳥の雛は、大概二十一日目にて孵化する。斯く尾を長くせしむるは、一種特別に飼育法を取るものにして、常に地上より高く、留木を作りて静止せしめ、鶏が自由散歩のときは、飼育者は、この尾を、直徑五六寸位の圓き輪に束ね、紙にて數ヶ所をば結びて、鶏丈けを放ちて、散歩をなさしむるか、または、特に雨天の時、

などは、飼育者は、雞をば函より出し、長き尾を捧げて、雞の行く儘に従ひ、行く位である。現今この鳥の種類として、擧げらるゝものには、次の種類がある。

- (一) はく又はくのをひき
- (二) しらふじ又しのはらごう



圖二十二百三第

Bantam)といふ體軀は矮小にして、尾は長く、且つ上前方より、後下方に彎曲する。脚は短く、爲めに翼は殆んど地に達する。主として愛翫用である。

内外普通動物誌

七五五

英名を「バンタム」

【九】矮雞

のなり (動物學雜誌第百號、田子勝彌氏、四國探勝旅行日記に據る所多し)

- (三) 東天紅又あかのをひき
- (四) うづらばのをひき

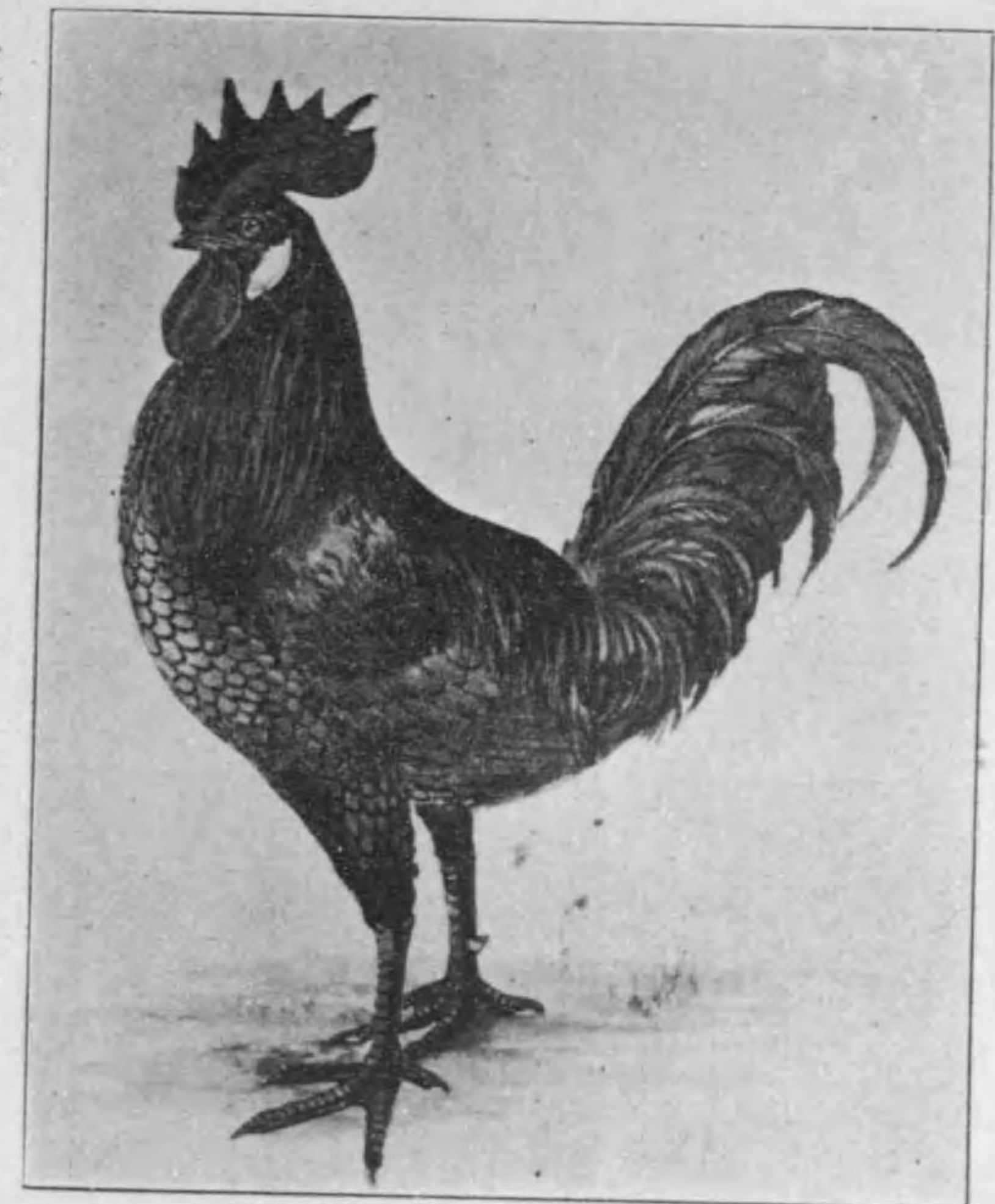
尾は圓くして、簀毛のみ長くなるものなり

【一〇】軍鶏又闘鶏 (Game) (Malay Breed)

この種は元來シヤム國の原産である頸長く體軀は大きく且つ強壯にして性質猛

く争闘を好むのである肉味は最も佳良である。

【一一】ハンバーク (Hamburg)

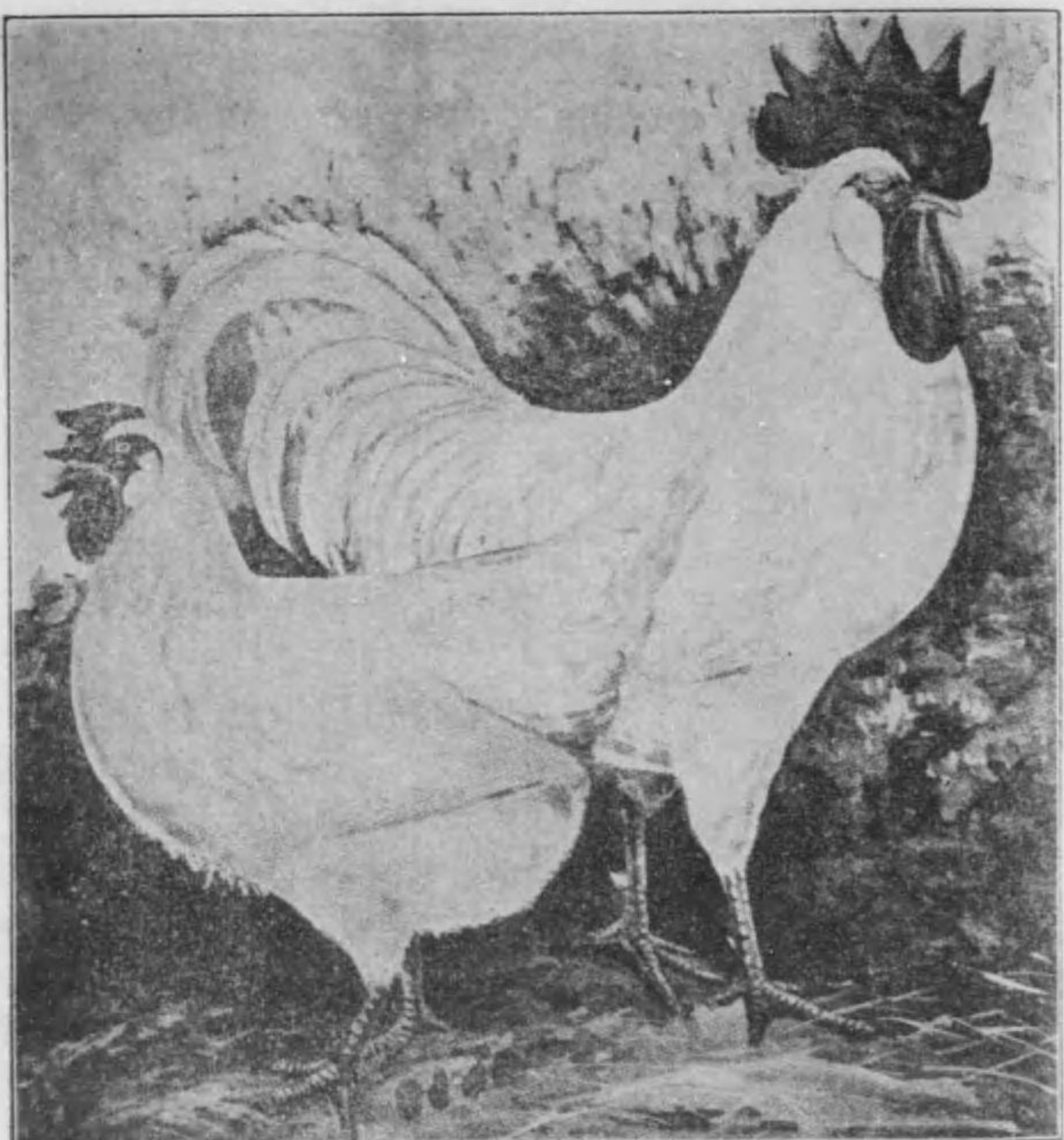


圖三十二百三第

ンヤシルダンア
(る藍色)

この種は英國にて改良せられたるものにして體軀は甚だ強健にして且つ産卵すること極めて多い鶏冠は蓄薇色にして赤く耳朶は圓味を帯び且つ純白である顔面と肉垂とは共に紅色である羽毛の色によ

り、銀色基石ハンバーク (Silver Spangled Hamburg) 銀色ペンシルドハンバーク (Silver Pencilled Hamburg) 金色ペンシルドハンバーク (Golden Pencilled Hamburg) 眞黒ハンバーク (Black Hamburg) 純白ハンバーク (White Hamburg) 等の別がある。



圖四十二百三第

ン | ホ | ケ | レ | 白

【一二】ミノルカ (Minorca)

西班牙の原産にして頭には大なる單冠の鶏冠を戴き顔は赤く耳朶のみ白く脚には毛なく姿は頗る優美である賞翫用に供するのみならずまた産卵用として飼長せられて居るこれには、黒色種及び白色種がある。

【一三】アングダルシ

ヤン (Andalusian)

西班牙の原産にして、黒色ミノルカと白色ミノルカとの雜種なりといふ産卵用と

して甚だ著名にして、卵は一個二十枚位の大形である。

【一四】 レグホン (Leghorn)

伊太利の原産にして、産卵数が多い。顔面と垂肉とは、紅色にして、耳朶は白く、形状は長圓である。嘴と脚とは共に黄色にして、脚には毛なく、鶏冠には、單冠と薔薇冠との別がある。米國では、白色レグホン種をば、産卵の器械と迄賞賛して居る。

【一五】 プリマウス、ロツク (Plymouth Rock)

米國の産にして、氣候の變化に堪へ、體質強健である。顔面と耳朶とは、共に紅色を呈し、鶏冠は稍大きく、且つ單冠である。

家鶏の肉は、廣く食用に供せられ、又骨も叩きてスープとして使用する。本邦産の鶏肉は、水分七六、五六、蛋白質二〇、九八、灰分二、四六を含有し、脂肪は微量である。鶏卵の内容物中、卵白は無色透明の半流動體にして、八割五分以上の水分と、一割二三分の蛋白質とを含有する。卵黄は黄色にして、卵白よりも蛋白質に富み、二割八九分乃至三割一分以上の脂肪を含有し、頗る滋養の効がある。また鶏の砂囊は、盛んに支那に輸出せられて居る。糞は肥料となり、羽毛は塵拂を製し、また寝具等に入れて、保温用とする。鶏の

品種の中で、形姿の優美なるものは、受胎用となる。また鶏は、土砂塵芥を搔搔して、蠕蟲類、昆蟲類を食ひ、農業上害虫を驅除する効あれども、作物の幼芽、葉などを啄むが如き、害をなす場合もある。

鶏卵の卵殻は、卵全量の一割を占め、卵白は五割五分、卵黄は三割五分の比である。卵の發育を検するに、葡萄狀をなせる卵巢中に於て、卵が発生する。この際は、唯卵黄のみである。斯くして、細長なる輸卵管を通過する間に、輸卵管よりは、少し宛卵白を分泌し、この際、卵白の兩端には、紐狀に振れたる「カラザ」なる部分を生ずるのである。斯くて一晝夜位にして、卵が輸卵管の開口に出で、永き間此處に留り、こゝにて卵殻を受け、遂に産卵するのである。卵殻は普通は白色にして、主に炭酸石灰より成り、その表面には、無數の細孔を有し、よく空氣を流通し、胚の發育する際、の呼吸作用を、營ましむるのである。殻の内面には、卵殻膜あり、又その廣端には、空氣を含める氣室を有する。卵黄は最内部にありて、卵黄膜に因りて被包せられ、その表面には、小なる圓形白色の板狀部がある。俗に目といふものにして、これのみが發育して、雛となるものなれば、之を胚盤とひふ「カラザ」は卵白の凝固したるものにして、その用は、卵黄の位置を固定するにあるのである。卵黄及び卵白は、胚盤の發育中に、その養分となるものである。卵が温めらる

ゝときは、胚盤は漸々大きく發育し、二日位経つと、殆んど卵黄の全部を占るに至るのである。斯くして、漸々發達し、細胞分裂をなすに従ひ、哺乳類の如く羊膜を生じ、また尿膜も生ずるのである。尿膜は、體腔の續きと考ふべきものにして、直ちに卵殼の内面に開通して、これには毛細管を分布し、卵殼の微孔より出入する空氣に觸れて、酸素を取り、炭酸瓦斯を吐出するのであるから、尿膜は、鳥の胚の發生中の呼吸器である。然のみならず、この外に尿酸の結晶を含有するを以て、老廢物を集める作用も兼ねて居る。偕愈々雛が孵化せんとする時は、この膜に來る血液は減少し、孵化する頃には、この膜は羊膜と同様に萎縮し、且つ消失するのである。鶏卵の孵化に要する時日は、三週間内外である。

(一) 雉 *Phasianus versicolor*, Vieill.

英名を「ジャバニース、グリーン、フェザント」(Japanese Green Pheasant) といふ。その大さは略ぼ鶏位である。雄は雌に比して稍大きく、頭部、胸部及び腹部は綠色にして、金屬光澤を有し、甚だ美麗である。頭頂には肉冠を戴き、雄の頬部は裸出して紅色を呈し、頗る美しいのである。雌は體の上部は茶褐色にして、黑色及び赤褐色の斑紋がある。尾羽は暗赤褐色にして、多く黑色の斑紋を有する。體の割合に、翼は短きを以つて、飛翔力は強

からずして、多くは一直線に低く飛ぶに過ぎずと雖も、脚は強健なるを以つて、地上を走ることは、頗る迅速である。後趾は、前趾よりも高く位し、雄には、長さ三分許の距がある。地上に棲息するを以つて、體色は藪叢の色と一致し、所謂保護色をなすのである。

この種は、本州に多く棲息すれども、未だ之を北海道に發見しないのである。常に草原雑林に棲息し、晝は地上に於て、食餌を探れども、夜は樹上に峙する。その食物は、雑食にして、蠶、蝶、蝗、バッタ、蟋蟀、鳥、蠍、蜻蛉、蟻、蝶、蛾、蠕蟲、蝸牛類を食するは有益なれども、稻、麥、粟、黍の如き穀類を啄み、大豆、小豆、アブラナ等の嫩草を食ひ、又播種せる種子を、撥堀することは、有害である。その他、雉の食する植物には、ハコベ、クサボケの嫩葉、椎の實などがある。

五六月頃、枯草を集めて、粗糙なる巢を造り、十個以上の卵を産み、雌のみ孵化の勞に任ずるのである。蛇は好んで雉の卵を食ひ、其他狐などの如き食肉獸は、雉の敵である。肉は美味にして、卵も亦食ふべきである。その羽毛は、羽箒拂子等に使用し、尾翹は裝飾用に供するのである。

(二) 高麗雉 *Phasianus torquatus*, Gmelin.

英名を「チャイニース、リング、ネック、フェザント」(Chinese Ring-necked Pheasant) とし

ふ頸の周囲には、白環を有し、胸腹は頗る光澤ある銅赤色にして、腹の中央は黒い。肩は黄色にして黒き斑點を有し、脊は銅赤色にして、且つ白斑がある。この種は、支那及び朝鮮に産し、我が對馬にも産するのである。

〔四〕 鶴雉 *Phasianus scintillans*, Gould.

英名を「ホンド、コツバー、フエザント」(Hondo Copper Pheasant)といふ。外貌は殆んど雉と同じけれども、體は幾分か雉よりも大きい。雄は全身赤黄色にして、少しく赤黒色の斑紋を有し、金屬光澤を有する。其尾は長くして三尺に達するものがある。雌の羽色は、暗色にして、光澤なく、尾は短く、尾翹は主として焦茶色にして、次に黒色部を有し、末端は白色である。

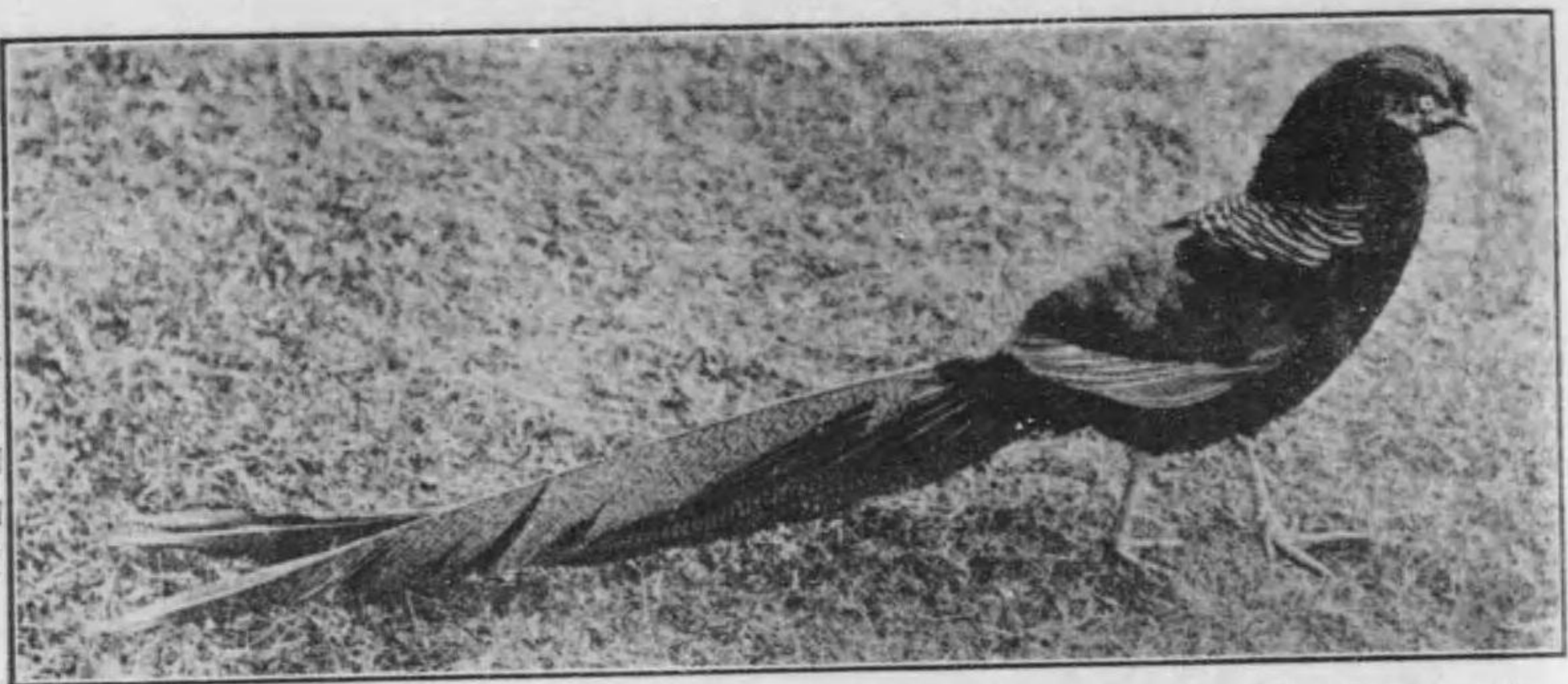
この種は、本州に産すれども、北海道には、未だ發見せられて居ないのである。常に人家遠き谿間に棲息し、殊に椎檜、其他の樹木の繁茂する所を好むのである。その食物は、雉と同じく雑食にして、椎、小檜、檜の實、雜草の實、豆類、其他植物の嫩葉を食ひ、また昆蟲及び蠕蟲を食ふのである。その蕃殖期は、五六月頃にして、淡黄褐色の卵をば、十乃至十二個を産み、雌のみ抱卵する。この種の肉味は、雉に勝つて居る。

〔五〕 赤鶴雉 *Phasianus saemmeringi*, Temm.

英名を「コツバー、フエザント」(Copper Pheasant)といふ。形状と大さとは、通常の鶴雉と同じけれども、雄は羽色一層濃赤色にして、極めて美麗である。また背部と腹部とは、白色の斑點を有するのではない。小川三紀氏の目録には、九州、伊豆に産する旨記されてある。而して伊勢附近に産するものは、多くはこの種なるが如くに思はる。

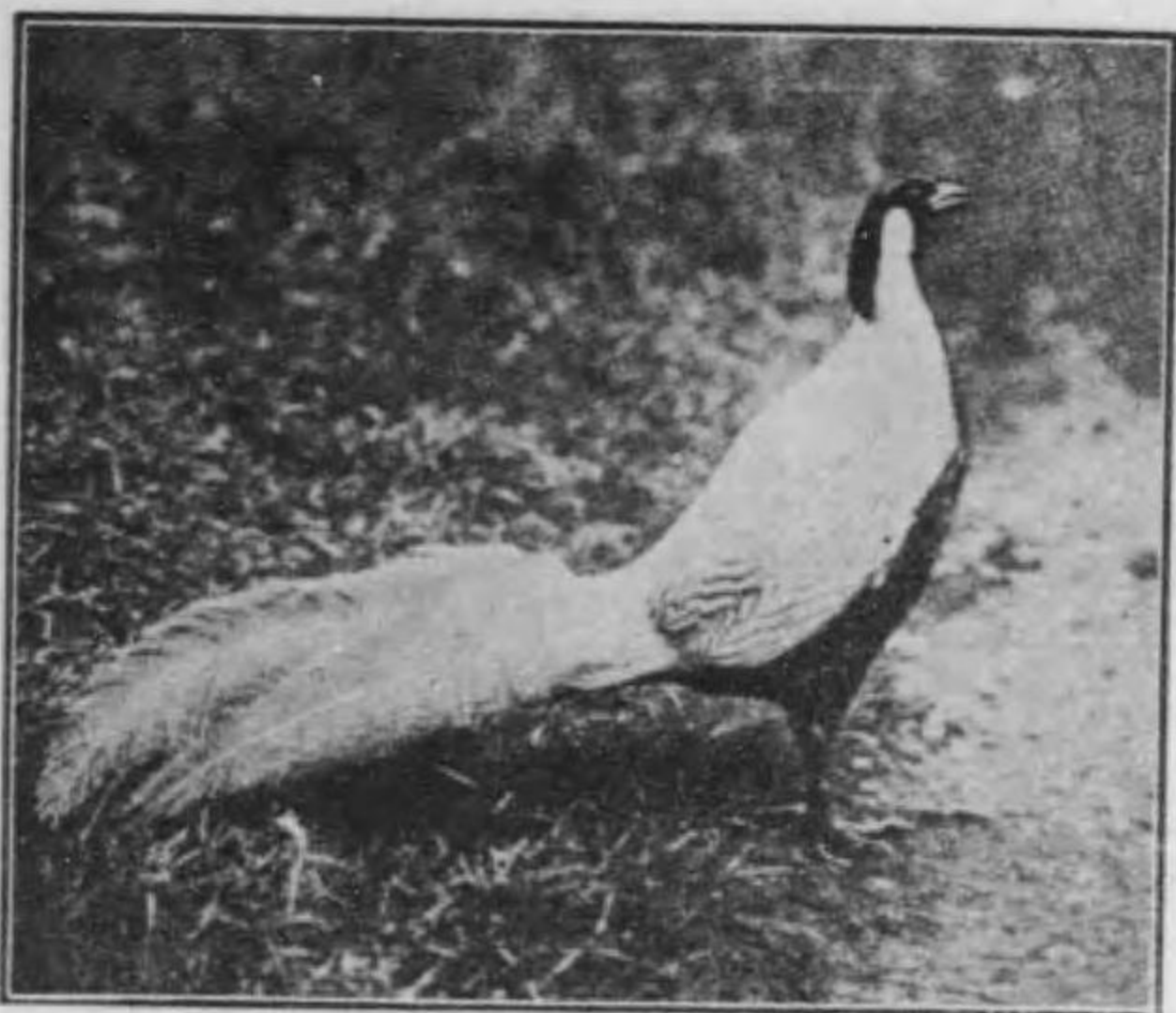
〔六〕 錦鶏 又慶雉 又をながきじ 又にしきじり 又あかきじ *Phasianus pictus*, L.

英名を「ゴールデン、フエザント」(Golden Pheasant)といふ。支那西部の山地より、湖南、湖北等の山地に産する美麗なる雉である。雄は鶏冠は、立派なる琥珀黄色にして、背部は濃色であつて、上尾筒も亦背と同色なれども、これには、深紅色の部分がある。その他の毛色は、栗色、黒色、藍色及び緑色を以つて、美しく排列して居る。雌は、錆色を帯びたる褐色にして、暗色の斑紋を有する。雄の尾は長けれども、雌の尾



(Photo by C. Reid) (From Living Animals of the World)

は短いのである。先頃東京上野帝室博物館に陳列せられたるものは、湖南省岳州東陵産のものにして、雄の全長は五尺四寸五分で、尾の長さは實に四尺三寸に及んだ、美事なる標本である。



白 鷓 圖六十二百三第
(Photo by W. P. Dando)
(From Living Animals of the World)

英名を「シルバーフェザント」(Silver Pheasant)といふ。南部支那に産し、鶏冠は黒く、體の上部と長い尾の中で、中央なる尾羽は純白なるが、その外側のものには、許多の黒き斜條がある。

〔七〕 白鷓 *Phasianus nycthemerus*, L.

〔八〕 珠鷄 *Numida melagris*, L.

英名を「ギネア、フロール」(Guinea-Fowl)といふ。頭には、角状の大なる鶏冠を有し、眼の周圍に、裸出せるは、角状の大なる鶏冠を有し、眼の周圍に、裸出せる皮膚は、左右各一本の肉垂となりて、喉下に垂れて居る。體の肥大せる割合には、翼は短きを以つて、唯翼をばたくと打つ外、充分に飛翔することは出来ない。之に反して、脚の方は、よく發達する。羽毛は密生し、石板色の地に、白斑を有し、尾翹は割合に長いのである。

ある。

この種は、北亞弗利加に産し、概ね大群をなして棲息し、穀粒及び昆蟲類を食ふので

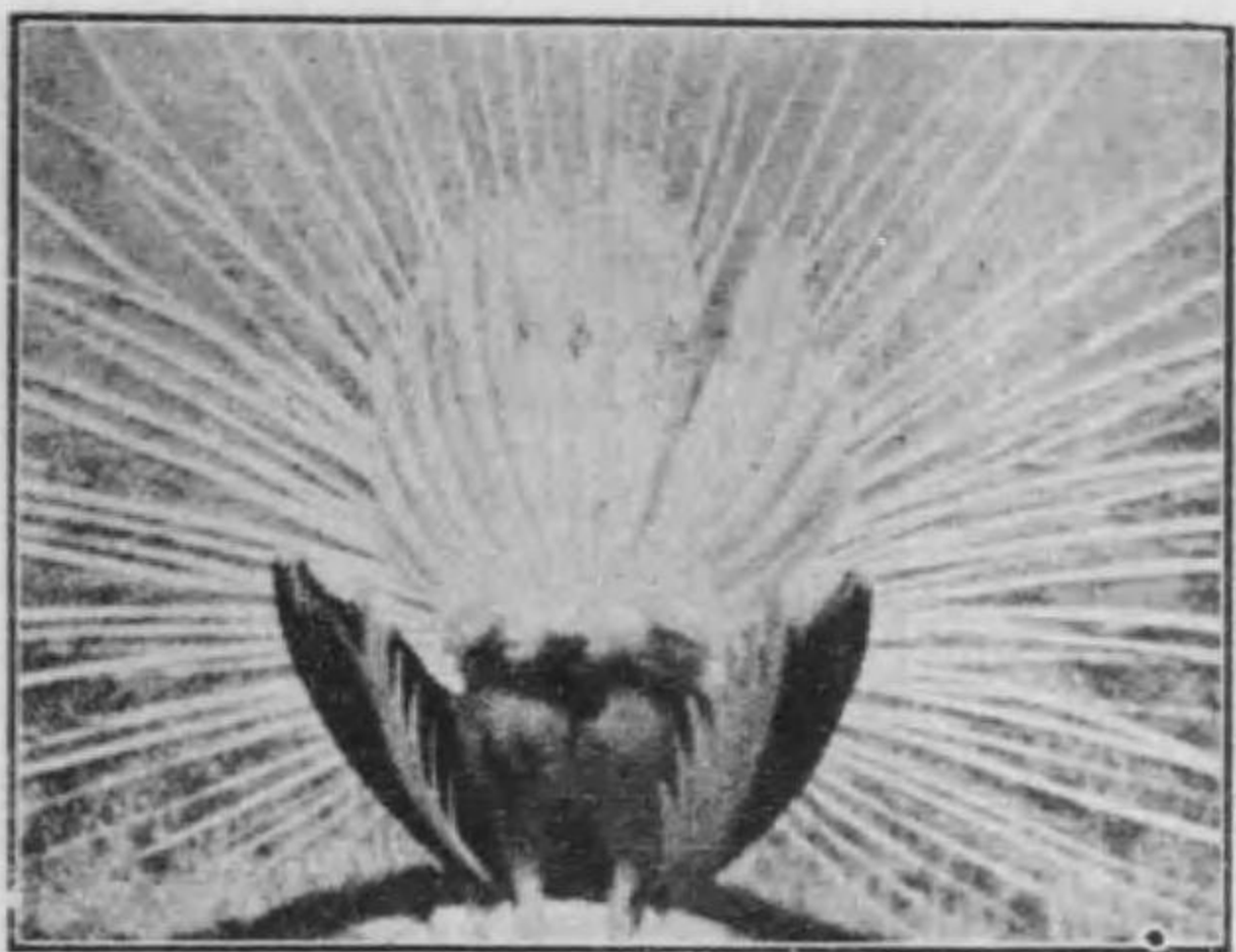


うてゐほるほ 圖七十二百三第

ある。一たび之を歐洲に輸入し飼養して以來、今日に於ては、世界の諸國に飼養せられ、卵と肉とは美味にして、食用に供せられて居る。

〔九〕 孔雀 *Pavo Cristatus*, L.

英名を「ピーコック」(Peacock) 又「ピーフロ」(Peafowl)といふ。この種は印度アサム、セイロンに産する。俗に尾と稱する部分は、實は尾にあらずして、上尾筒の諸羽が、甚だ長く伸長したものである。而して、これらの各羽は、圓るき羽子板状の翹より成り、緑柱石のやうな綠色と、濃い堇菜色と、帶緑青銅色と、黄金色と、藍色とが、相交りて眼状紋をなし、實に美觀である。雄は時々これを擴げて濶歩し、如何にも誇り顔であることは、吾人が*



孔雀の背面圖(眞の尾) 第三百二十八圖

(是は是な夫の如き眼を呈する)

(Photo by L. Medland)(From Living Animals)

動物園などに於て、常見慣れ
て居る所であるが、野生の状態
に於ても、蕃殖期になると、此部
の美を示さんが爲めに、所謂尾
を擴げ、傲然として歩み、以つて
雌の歡心をば、得んと努むるのである。



孔雀 (After Protheroe) 第三百二十九圖

である。尾尾は短く、硬直にして、所謂尾を擴げる際の、
丈へなる作用がある。
常に山地及び森林に於て、群をなして徘徊し、昆蟲、
蠕蟲、蛇、種子等を食ひ、
四五羽の雌雄は共に
集りて、夜間は喬木の
低き枝上に於て、峙す
るのである。一夫多妻
にして、雌は四月乃至
十月頃に、卵をば草叢
の地上に産み、一産に
十二個位を産み、雌は
この上に坐して、常に
之を温めるのである。
卵は二十七日乃至三

十日にして、孵化して雛となるのである。

孔雀は、時には、千二百乃至千五百羽の群をなすことあれども、通例は三四十羽より
成れる群をなして、耕地を徘徊し、作物に大損害を與ふるものなれども、印度の或る地
方にては、非常にこの鳥を尊崇して、殺すことを禁じて居る。この肉は美味であるとい
はれて居る。

〔一〇〕 爪哇孔雀 (Javan peacock) *Pavo muticus*, L.

この種は、インド、シナ、諸國、マレイ半島及び爪哇に産する孔雀である。前種では、頭上
の冠羽は、末端に於てのみ、枝毛を生ずれども、本種にては、冠羽はその全長に亘りて、枝
毛を列生する。又この種の冠羽より頸は、美なる綠色にして、胸部は帶青綠色で、この部
には、金色の縁がある。また背は銅色にして、きら／＼と輝いて居る。

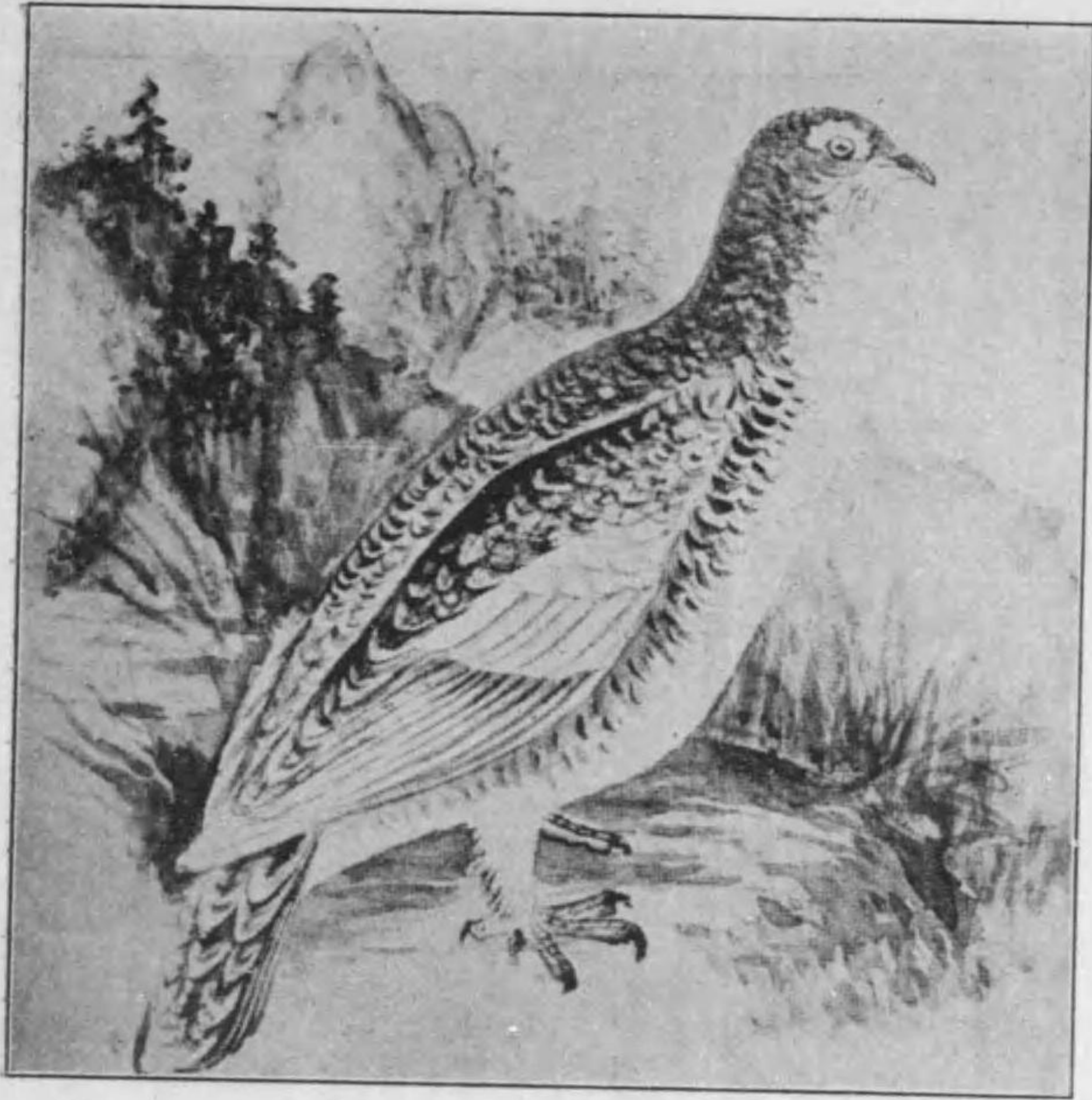
〔六〕 雷鳥科 (Tetraonidae)

體は肥大し、頸は短く、頭は小さく、且つ羽毛を生じ、唯僅に眼上に、小形の肉冠を有す
るに過ぎない。脚は短く、趾に至るまで羽毛を生ずるのである。この科のもので、鶉は廣
く東半球の各地に棲息し、移住をなせども、その他のものは、北地に棲息するのである。

〔一〕 雷鳥 *Tetrao mutus*, Montin.

英名を「ターミガン」(Tarmigan)といふ。夏季の羽毛と、冬季の羽毛とは、大に異つて居る。

七六八



第三百三十三圖 いらてう

夏羽は茶褐色の地に、黒色の斑紋を有し、雌は雄に比すれば茶色に富んで居る。此色は高山の岩石等に附着せる地衣類の色と一致せる保護色である。嘴は短く且つ黒色にして、頭には小なる肉冠を戴き、朱色をなし、翼の風切は、雌雄共に純白にして、尾は中央の二枚を除き、他は黒色である。雄には距なく、又趾に至るまで、羽毛を生ずるは、防寒具となる譯である。秋に至れば、雌雄共に、尾の外側の羽が、黒き外、全身は純白色となるが、雄にては、眼前は黒色である。これ其棲める地方が、氷雪に埋めらるゝを以つて、敵の襲撃を避くる保護色の例である。

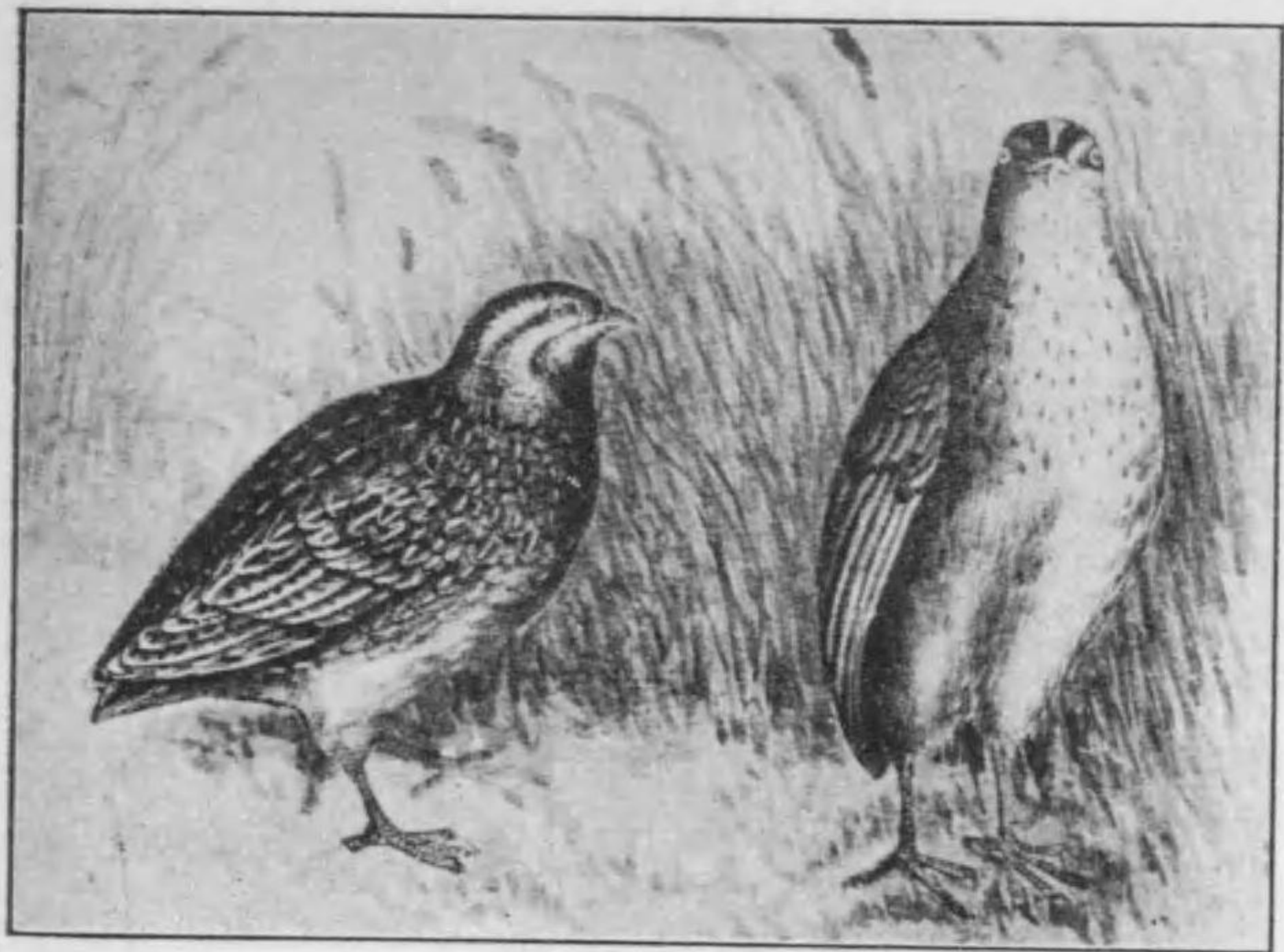
この種は、歐洲大陸、英國の諸山脈より、亞細亞の極地及び本邦に産する。本邦に於ては、北海道、千島に産し、本州に於ては、加賀の白山、越中の立山、信州の八ヶ岳、駒ヶ岳、御嶽、乗鞍岳、穂高嶽、槍ヶ岳、白馬岳の如き、信越、信越界の諸高山に産し、はひまつた偃松帯に棲む。常に岩高蘭の嫩芽、はいまつた偃松の果實、草本、灌木の芽、花、其他昆蟲類を食し、山林には有益ならざれども、所謂保護色の例として、學術上著名なるにも拘はらず、其の蕃殖區域は甚だ狭く、且つ性質魯鈍にして、採集家の爲めに、濫獲せらるゝ恐れあるを以つて、その捕獲を禁止せられたのである。尤もこの鳥の天然の敵には、鷲鷹の如き猛禽類がある。

〔二〕 Tetrao bonasia 松鷄 又るぞらいてう Tetrao bonasia, Linn.

英名を「ヘーゼルグロウス」(Hazel-Grouse)といふ。雷鳥と同大にして、翼長は五寸六分乃至六寸四分である。頭より背部は茶、黒、白、及び灰褐色を交へたる斑紋を有し、風切は茶褐色にして、その外翹は白色を帯んで居る。雄は頤部黒色なれども、雌にては、この黒色部を有せざるのである。跗蹠部は、淡褐色を帯びたる白色の羽毛を有すれども、趾には羽毛はなく、又季節によりて羽色を變化することはない。眼上の肉冠は、雌にては極めて小形にして、雄は距を有せざるのである。

この種は、本邦にては北海道のみに産し、その蕃殖區域は、北海道より西比利亞歐洲を横りて、ピレネー山脈に達するのである。

1170



鶉 圖一十三百三第

英名を「コモンクウエール」(Common Quail) といふ。體は小さく球形にして、丈は低い。全身は黄褐色にして、黒白の斑紋を有する。嘴は短く、且つ後趾も亦短く、寧ろ高位置に位する。脚には角質の塊状をなせる距を有し、尾は名のみにして、殆んど無きが如しである。

常に草原に棲息し、泥土中に搔撥し、轉々するを好む。種子及び昆蟲を食し、多くは夜間出で、食を索むるのである。巢は多く草叢中にありて、十個乃至十數個の卵を産み、その産卵期は初夏である。然しながら、歐洲産のものは、年に二回産卵し、一回は歐洲大陸に、一回は亞

弗利加大陸に於てし、毎年春季には大群をなして、亞弗利加より地中海を超えて、歐洲に渡り來り、九月に於て、再び亞弗利加に去るのである。

元來、鶉は氣候的變化をなす者にして、南亞弗利加及び支那に棲息するものは、温帶地方の者より、比較的に小さい。而して印度及び南支那産のものは、咽喉部は青白色にして、冬季に於て、西比利亞より本邦に渡來するのである。又咽喉部の赤色のものは、四時本邦に棲息するのである。

〔七〕 沙鷄科 (Pteroclidæ)



圖二十三百三第
(鷄沙腹黒)種一の科鷄沙
(By L. Medland)(From the Living Animals of the World)

この科のものは、英に「サンドグロース」(Sand Grouse)といふ。普通の家鷄大にして、嘴は小さく、家鷄の嘴に似て居る。脚の跗蹠部は短く、且つ毛を有し、三趾は前向し、後趾は小さくして用をなさない。また時には、後趾を缺くものがある。翼は長く、且つ尖つて居る。尾は圓きか、或は尖りて、寧ろ短くあるが、時としては、中央の尾翹は長くして尖れるものがある。頭は小さく、體はムツクろと肥へ、且つ蹲踞し、背は甚だ扁平である。體には羽毛を密生し、羽色は主に砂色、灰色、及び黒色にし

て、腹は全く黒いものがある。雌雄に因つて、毛色を異にすること無く、雛の毛色も、老ひたる雌の毛色と、同じである。

七七二

別に巢を造ることなくして、地上を搔撥せる所に、産卵する。卵は常に三個である。形状は卵形にして、斑紋を有し、晝間は雌に、夜間は雄に因りて抱かれ、二十四日にして、孵化して雛となる。常に種子、草本を食し、また少しく昆蟲を食ひ、地上を歩るか、若くは駆けるのである。

本科のものは、東半球の乾燥せる地方の、廣潤なる地に棲息して、約十七種を含んで居る。而してその肉は食用として美味である。

〔一〕 沙鷄又鷄鳩又突厥雀又冠雉 (Möllenendorff氏) 又毛腿鷄

(桑野久任氏) (動物學雜誌第二百八十號飯塚啓氏) 又毛腿鷄
paradoxus, Pallas.

英名を「Pallas's, スリー・トード・サンド・グロース」(Pallas's three-toed Sand-grouse)といひ、又略して「Pallas's, サンド・グロース」(Pallas's Sand-grouse)といふ。キルギス草原に産する外、これより中央亞細亞を通りて、蒙古、北支那、及び北はバイカル湖に、南はトルキスタンにまで廣く分布するのである。嘴は小さく、背部は暗褐色にして、多くの黒條を有す

る。頭部は灰褐色に、少しく黄味あり。咽喉は暗赤褐色で、胸は灰黑色に、腹部の上方は、灰白色なれども、下腹部は黑色にして、少しく淡桃色を帯び、胸腹の境には、灰白色と黒色の、多くの横條がある。

第六目 涉禽類 (Grallatores)

この類の鳥は、湖河、海岸、沼澤等の濕地に棲息し、泥濘を恐れずに、淺水を涉るを以つて、多くは脚は甚だ細長にして、脛骨の中央以下は、裸出するのである。又甚だ長き跗蹠部は、屢々鱗片を以つて被はれて居る。ノガン屬(Oie)のものは、飛方は至つて拙劣であるが、これと反對に、脚で歩く方は、鷄類の如く、達者にして、頗る迅速に走ることが出来る。秧鷄(くわ)の如きは、脚は短く、趾は細くして、飛力は至つて緩慢で、且つ高く空中に上ることとは出来なないが、地上を走ることとは、極めて迅速である。田鷄(か)はよく水中に潜没し、且つ水を泳ぎ渡り、忽ちにして二三間も先きの所に、出るのである。

以上述べたるが如く、涉禽類の脚の構造及び長さ、從つて行歩は、種屬に因つて異れども、之を概括して述べれば、この類の脚は、極めて細長である。されば、食物を搜索する

便利上、頸の長さも脚の長さも相俟つて、頗る長いのである。實に脚と頸との兩者は、相俟つて、涉禽類の生活上に、必要な器官となつて居る。彼の「フレイミング」(Flamingo)では、脚も非常に細長であるが、頸の長いことに至つては、實に涉禽類中に、群を抜いて居るのである。(「フレイミング」の分類上の位置に就いては、或は水禽類に、或は獨立の目とする。深き學術上の議論に就いては、編者は固より知る所はない。)

嘴の形状と大きさは、涉禽類の種屬に因り、それらに習性に應化するやうになつて居る。例へば泥濘地を徘徊して、蠕蟲、昆蟲の幼蟲、軟體動物などを食するもの、嘴は、長けれども、その質は割合に軟弱にして、且つその尖端は觸覺に富んで居る。之に反して、魚類、蛙、若くは小獸を餌とするものにおいては、嘴は甚だ強壯にして、且つ先端は尖銳である。また雜食する種類では、嘴は短く且つ強壯であることは、恰も鶏の嘴の如きものである。

翼は、常に中庸大にして、尾は短い。飛翔の際には、兩脚をば遙かに、體の後方に挺出して、體の平均を取るを助くるのである。涉禽類の多數のものは、所謂「渡り」をなすものにして、常に雌雄雙棲し、水邊の地上、樹上等に、巢を構へて雛を育つるのである。涉禽類の中の禁獵鳥類には左の種類がある。

- (1) 鶴 (2) 鶴
- (3) 朱鷺 (4) 篋鷺
- また獵期外禁獵鳥類には左の種類がある。
- (1) 猩々鷺 (2) 小鷺 (3) 中鷺 (4) 大鷺 (5) 鷓鴣
- (6) 鶺鴒 (7) 秧鷄

〔一〕 千鳥科 (Charadriidae)

體軀は、雉大より雀位の大きさである。嘴は額と同高の位置に着き、長さは短くして、鳩の嘴の如きものあり。又時には長くして、著しく彎曲するものある等種屬に因りて、一様にあらざれども、その質が非常に強壯であるものはないのである。また口角は、遙かに前方に位するのである。脚は、その跗蹠部は、常に長くして、その部の上方は、裸出して居る。三趾は前向し、後趾は常に小形にして、地に着かず、又之を缺くものがある。翼は中庸にして、尖れるか、又は圓る、臂蹠の長いものがある。尾は短い。頭はムナグロ、シロチドリ等の類では、大きい、其他のものにては、小さいのである。

雌雄の羽毛は、稀に相違するものがある。而して季節に因りて、多少羽毛を異にするのである。雌は、時には、雄よりは、輝ける羽毛を有し、又屢々、雄よりは、大きいものがある。幼鳥は、常に親と異なる羽毛を有すれども、非常に著しく異なるものではない。

本科のものは、その種類多くして、約二百種を含み、個體の數も多くして、常に群居し、多くは渡鳥である。大多數のものは、地を掻きて、穴となし、これに卵を産む。卵は鳥の大きさに比して、大きく、稍々西洋梨子の形に似て、その數は通例四個である。色は帶黃灰色若くは橄欖色の地に、暗色の斑點を有する。多くの場合に於て、雌雄のみ孵化の勞を取り、卵子は三四週間に於て、孵化するのである。雛は孵化するや否や、直ちに食を索め、甚だ活潑である。綿毛は、體の上部に生ずるものは、條紋あるか、若くは胡椒色にして、體の下面は白色である。而して長嘴を有する種類にありても、雛のときには短嘴を有するのである。雛は充分に大きく成長するに至つて、始めて飛翔するのである。本科のものは、昆蟲、軟體動物、蠕蟲を殺す利益がある。外肉と卵とは、食用として、賞味せらるゝものが多い。

本邦に産する千鳥科のものは、故醫學士小川三紀氏著、本邦産鳥類目錄に據れば、十五種ある。其の中千鳥亞科(Charadriinae)に屬するものが十三種で、鶉亞科(Tringinae)に屬するものが三十三種で、田鶉亞科(Scolopacinae)に屬するものが九種である。よく波に配合させて、書かれてある千鳥は、千鳥亞科に屬するコバスタドリ、コチドリ、イカルチドリ、メダイチドリ、シロチドリ等(Charradrius 屬のもので、その種類は少いのであるが、獵師

の千鳥と稱するものは、その種類を含むこと頗る廣く、千鳥亞科のものは、申す迄もなく、鶉亞科のものも含まれて居る。千鳥の類のものは、他の種類と異つて、嘴は割合に短く、その末端は堅く膨味があるが、他の鶉の類では、嘴は細長く、且つ先端には、觸覺鋭敏なる皮があつて、柔軟である。

獸醫學士、内田清之助氏の「日本産鶉類索引表」(動物學雜誌第二百七十一號)といふ論文より、千鳥科の三亞科の索引を示せば、左の如しである。

■ 嘴は末端に、多少の膨れを有し、若し然らざるも、鼻溝の全長は、嘴峰の長さの半ばに達せず。……………千鳥亞科 (Charadriinae)

■ 鼻溝の延長は、上嘴全長の大部を占む。

▲ 眼は、頭の後方に位置し、耳孔は、眼直後の垂直線上に開孔す。……………田鶉亞科 (Scolopacinae)

……………鶉亞科 (Tringinae)

〔一〕 千鳥亞科 (Charadriinae)

〔二〕 京女鶉 *Streptopelia interpres* (Linn)

英名を「ターンストーン」(Turnstone)と稱する。鵜大の鳥で、脚は山鶉や田鶉などのやうで

ある。嘴は長くなく、且つ頭の形状は、千鳥に似て居る。そこで京女千鳥とも呼ばれるのである。頭、腰、尾、手翹は、黒と白とを混じ、上體は、黒と赤茶とを交へ、胸は黒く、腹は白く、脚は橙赤色であつて、後趾は内方に向つて居る。冬季の羽毛は、灰色と白色とが、主なる羽色である。兩半球の極地にて繁殖し、冬季、本邦の海濱に來遊するのである。

〔二〕 だいせん *Squatarola helvetica* (Linn.)

英名を「グレイ・プレーバー」(*Grey Plover*)といふ。尾翹は横條を有し、脚には後趾を有する。而して腋下は黒い。この種は、兩半球の極地にて繁殖し、春と秋との移住の際、大群をなして、本州、千島及び琉球を通過する。

〔三〕 むなぐろ又あゐぐろ又ちやぢり *Charadrius fulvus*, Gmelin.

英名を「アジアチック・ゴールドン・プレーバー」(*Asiatic Golden Plover*)といふ。尾翹には横條を有し、腋下は灰色である。咽喉部と胸部とは黒い。本屬のものは、嘴はタゲリによく似る。然し脚には、後趾なく、唯三趾あるのみである。常に群をなして、沼地に棲み、蠕蟲を食し、一夫多妻にして、殊に羽毛を奇麗に保つに、注意する性あることが、著しいといふことである。本種は、東部西比利亞にて蕃殖し、春と秋との移住の際、群をなして、千島、本

州及び琉球等を通過する。嘴は強壯なるを以つて、直ちに地面より食物を啄みて取り、之をば土中に挿入することはない。

〔四〕 こばすぢり *Charadrius morinellus*, Linn.

英名を「コンモン・ドットレル」(*Common Dotterel*)といふ。嘴は短く、嘴峰の長さは、中趾の爪端に至る全長よりは短い。また脛部は、跗骨の關節部に至るまで、羽毛を生ずる。夏羽にては、腋下は灰色で、腹は黒く、翼面は栗色である。

この種の蕃殖區域は、西比利亞より、北歐羅巴を経て、英國に亘れるが、移住の際、本邦に渡來するは、稀れである。

〔五〕 小千鳥又こぢゆん *Charadrius minor* Wolf & Meyer.

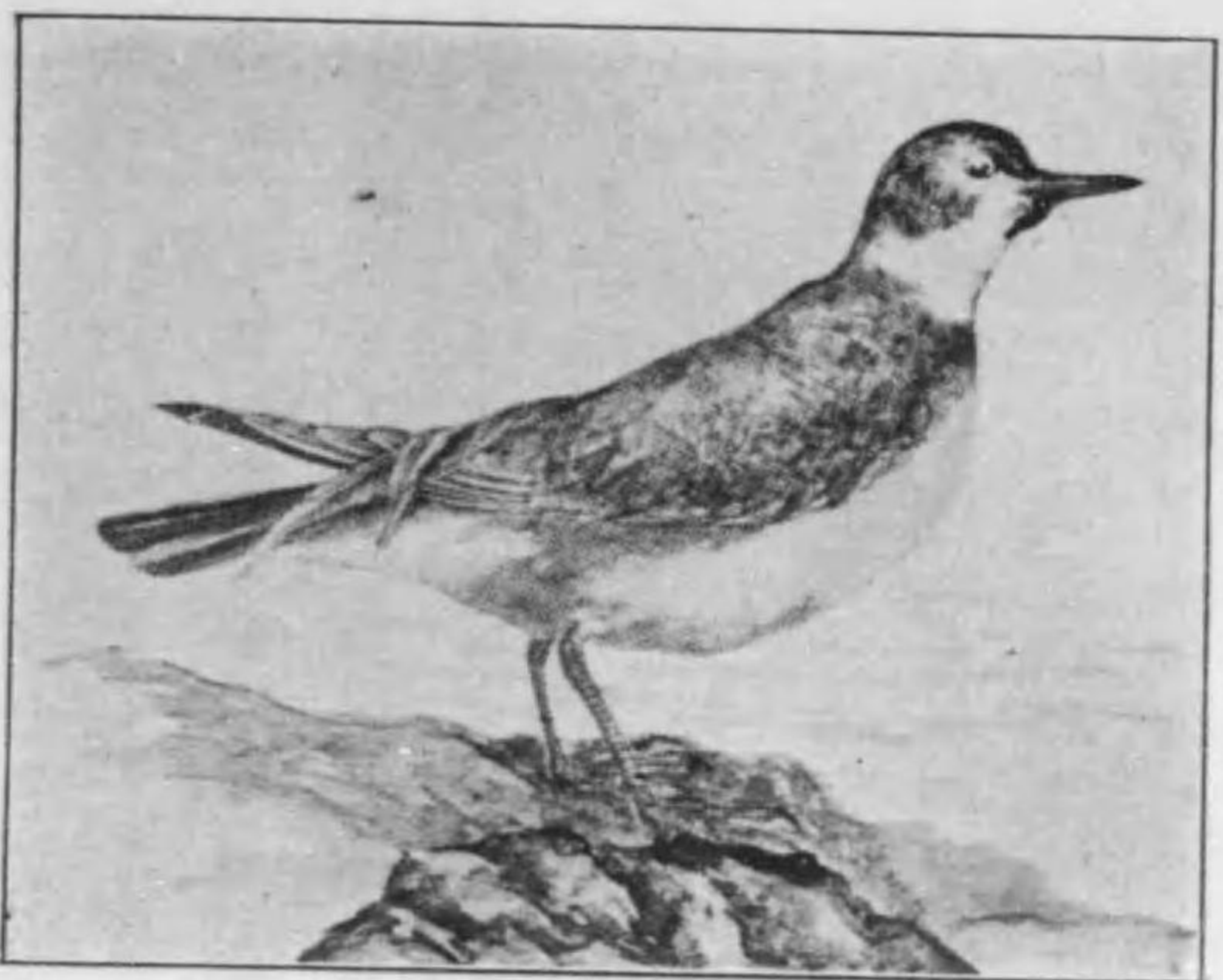
英名を「リットル・リングド・プレーバー」(*Little Ringed Plover*)といふ。小形の鳥にして、翼長は三寸八分位である。腋下、及び腹部は白く、尾の末端に近く、暗色横帶がある。また頸の前面には、黒色帯を有する。

常に本邦の南部に棲息し、本邦にて蕃殖する外、東部西比利亞より、西部歐羅巴に互れる各地に蕃殖するが、英國に渡來するのは、稀れである。

〔六〕 いかるちぢり又おほぢゆん又くびたまちぢり

Charadrius placidus, Gray.

七八〇



第三百三十三圖 かいちるごり

英名を「ホツドグソンス、リングド、ブローバー」(Hodgson's Ringed Plover)といふ。前種同様に頸の前面には、黒色帯がある。體はそれよりも大きく、翼長は四寸二分乃至四寸六分位である。

この種は、冬季本邦の南部に渡來するが、折々は、秋季、川邊の乾燥地及び湖畔に出現することがある。その分布は、本邦より中央支那を経て、ヒマラヤ山に及ぶのである。

〔七〕 めだいちごり Charadrius mongolicus, Pallas.

英名を「モンゴリアン、サンド、ブローバー」(Mongolian Sand-plover)といふ。翼長は四寸二分乃至四寸四分位である。最内部の手翹の外翹の基部は白く、尾の末端に近き部には、暗色横帯がなく、また頸の前面にも黒色帯がない。

この種の蕃殖區域は、東部トルキスタンより黒龍江の溪谷にして、春と秋との移

住の際、本邦の海岸に沿ふて、大群をなして通過するのである。千鳥の中でこの種の肉は、その味大に美である。

〔八〕 しろちごり Charadrius cantianus, Latham.

英名を「ケンチツシユ、ブローバー」(Kentish Plover)といふ。翼長は三寸四分乃至三寸八分位であつて、前種同様に、頸の前面には、黒色帯がない。北海道には夏季に於て來遊すれども、本州には常に棲息する。また臺灣、南支那及びハイナンにも産するのである。

〔九〕 おほめだいちごり Charadrius geoffroyi, Wagl.

英名を「ゲヲフロイス、サンド、ブローバー」(Geoffroy's Sand Plover)といふ。嘴は長く厚く、嘴峰の長さは、中趾の爪を入れたる長さと同しい。翼長は四寸四分乃至四寸八分位である。

この種は、熱帯の鳥にして、臺灣及びハネナンにて蕃殖し、本邦には、甚だ稀れに渡來するのである。

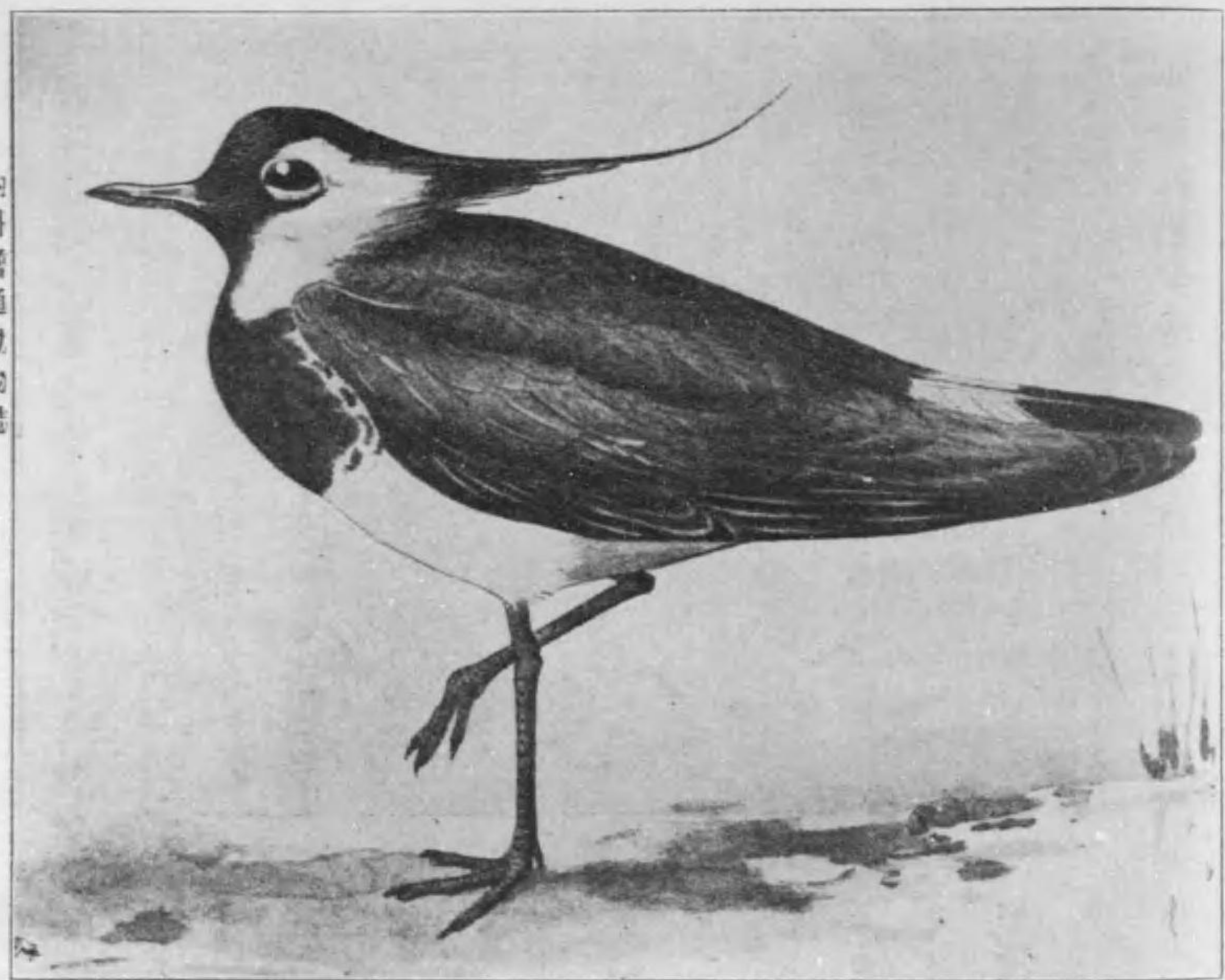
〔一〇〕 計里 Lobivanellus cinereus (Blyth.)

英名を「グレー、ヘツデッド、ワットル、ド、ラツプ、ウイング」(Grey-headed Wattle Lapwing)といふ。嘴は頸の長さよりは短く、嘴端は稍壓搾せられて居る。嘴と眼との間には、小さき

肉垂を有する。頸は短く、腕蹠は白く、脚は延長せるも、趾は短く、後趾あれども短小である。また趾間には連膜がある。四時本邦に棲息し、冬季は往々群をなして水田に下り、飛揚するときは「ケリ、ケリ」と鳴くのである。四月に、稻田の畦畔に生せる草中に、四卵を産む。雄は甚だ警戒性に富み、雄が坐せる處に徘徊し、一たび敵の近くあれば、鷹でも鳶でも、一向恐れずに、之を追ひ駆けながら、高く空中に上り、聲高き叫聲を發して、飛ぶのである。其の繁殖區域は、本邦より北支那を経て、蒙古の南東部まで擴がるが、西比利亞と北海道とは、産せないものである。

〔一一〕 たげり又なべけり *Vanellus vulgaris*, Bechst.

英名を「コンモン、ラップウイング」(Common Lapwing) といふ。鳩位の鳥である。頭には長い尖つた鶏冠を有し、そは後方に擴り、先端は稍上方に曲つて居て、色は黒い。額、咽喉、胸は黒く、體下は白い。上下の尾筒部は、栗色を帯びた淺黄色である。又尾端には、一個の幅廣き黒縁がある。背は金屬光澤を帯びたる黒色で、脚は赤い。後趾はあるが、極めて短小である。眼は褐色にして輝き、嘴は太き突錐狀をなして居る。雌と雄の羽毛は、雄のよりは彩文がなく、單調であつて、且つ鶏冠も小さい。本邦には四時棲息すれども、北海道には甚だ稀れである。此種の分布は、本邦より南部西比利亞を経て、歐洲大陸を横ざり、



内外普通動物誌

第三百三十四圖 たげり (From Birds Useful and Harmful)

英國に迄及んで居る。常に沼澤湖畔の濕地、蘆葦の生ずる地に棲息し、速に地上を走ることが出来る。其食物を採す際には、脚で地を打つ。然るときは、地中にある蠕蟲は、ムグラモチが地下から襲來したかと思つて、之を避けて、地の表面に來るから、容易に鳥の捕獲する所となるのである。また餌食を啄んだ後には、嘴を洗ふて、其の汚れたのを、淨めるといふことである。其他蝸牛、ナメクジ、バッタ、甲蟲鱗翅類の幼蟲をも食ふのである。卵を産む數は四個で、そは蘆葦の生へて居る地に、産むのである。卵は

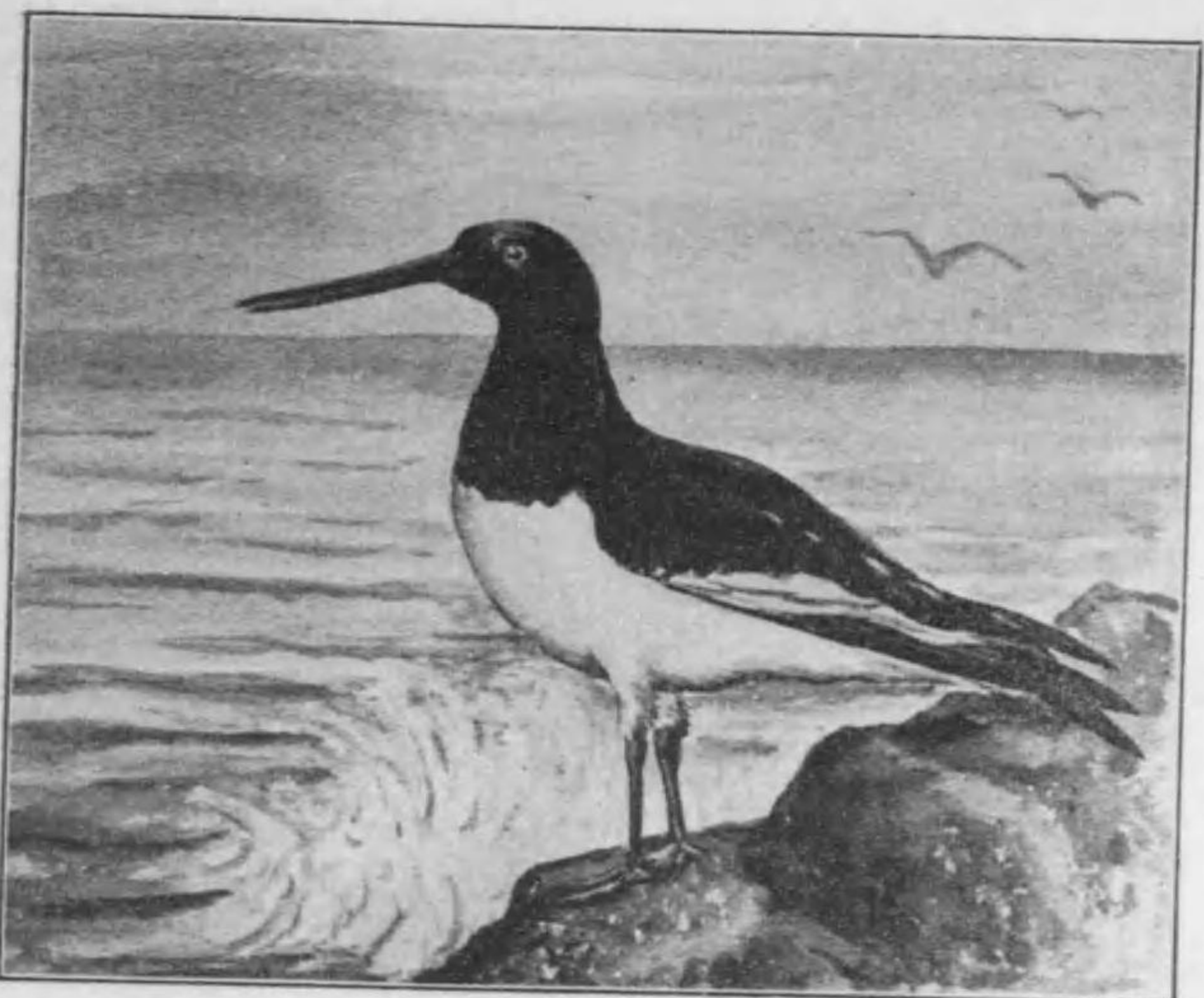
非常に香氣に富み、ホーランドでは、多く賣買せらるゝのであるが、肉は不味にして、唯

七八四

ある時期に限り、食ふべしといふ。

〔一一一〕 みやこどり又みやこ

こ Haematopus osculans,
Swinhoe.



第三百三十五圖

みやこどり

英名を「ジャバニース、オイスタ、キャッチャー」(Japanese Oyster-Catcher)といふ。これは「日本の蠣喰ひ」といふ義である。上體部は黒くして、腹は白い。長い尖つた強壯な嘴は、美紅色である。之を用ひて退潮のとき、海岸にあるカキの如き二枚貝類を開く爲めに、ピンセットの如くに使用するのである。この種が、波と共に進み、波と共に退きながら、退潮を超へて徘徊する姿は、誠に優美である。脚も亦美紅色であつて、趾はその基部に膜を有するが、これは游泳に使用しないで、退き

行く所の波に遭遇せる際、それに打ち勝つて、よく體をば、水上に静止せしめるに用ゆるのである。此鳥は亦よく飛び、又容易に走り得べく、群居して鋭るぞい叫聲を發するのである。本邦の海岸には、常に棲息するが、現時は少くなつたといふことである。其の産地は、北カムチャツカ、西は黒龍江の下流、南は支那の東海岸にまで、及んで居る。

〔一一二〕 くろみやこどり Haematopus
niger, Pallas.



第三百三十六圖

英名を「アメリカンブラック、ブラック、オイスター、キャッチャー」(American Black Oyster-Catcher)といふ。體は一樣に黒味が懸つた褐色で、嘴と脚とは、前種の如く赤いのである。千島には普通見らるゝものであつて、其の繁殖區域は、アラスカ南方の海岸に沿ふて、南は上部カリフォルニアの海岸に互るのである。而して下部カリフォルニアの海岸で、冬を越すのである。

〔一一三〕 鶉亞科 (Tinginae)
〔一一四〕 はいいろひれあごしぎ Phalaropus fulicarius (Linn.)

内外普通動物誌

七八五

英名を「グレイ、フアラロープ」(Grey Phalarope)といふ。嘴は短く扁平で、其の先端は稍幅
広い。趾には、葉状の蹼がある。此の種は、冬季千島に渡來し、兩大陸の極地にて繁殖する
のである。

七八六

〔二〕 あかえりひれあしこぎ Phalaropus hyperboreus (Tinn.)

英名を「レッド、ネックド、フアラロープ」(Red-necked Phalarope)といふ。前種と同じく、趾
には葉状の蹼があるが、嘴は細く短くして、先端に至るに従ひ、漸々尖つて居る。其の繁
殖地は、兩大陸の極地及びスコットランドであつて、冬季本邦に渡來する。

〔三〕 だいしやくしこぎ Numenius arquatus lineatus (Cuv.)

英名を「コンモン、カールウ」(Common Curlew)といふ。大なる鳥にして、體長は二尺位で
ある。嘴は長くして、四寸六分乃至六寸七分である。而して其の形は、鎌状をなして居る。
頸も長く、脚も亦長い。羽毛には、麻の種子状の斑點がある。下背部と腰とは白く、下背部
と、腋下の羽毛とは暗色の斑紋がない。肩と上背部の羽毛とは、白色を有する。尾は白
く、稍褐色を交ゆる。また冬の羽毛には、褐色の横條がある。この種は、本邦の南部海岸に
は、常に棲息するやうであるが、その産地は、本邦より南部西比利亞を経て、歐洲大陸よ
り、英國に迄擴がつて居る。常に海岸、石礫多き河岸、沼地、其他低地に徘徊し、嘴を地中に



内外普通動物誌

第三百三十七圖 だしいしやくしこぎ (From Birds Useful and Harmful)

挿入し、蠕蟲を探り出す
のである。その他、バッタ、
コホロギ、甲蟲の多數を
食し、又水棲昆蟲、蝸牛、蟹
類を食ひ、時としては、蛙
も食ふのである。其の性
質、臆病であるが、走るこ
とは迅速で、又永い間、飛
ぶことが出来る。沼地の
地上に造巢し、西洋梨子
状の四卵を産むのであ
る。常に群居するが、繁殖
時には、單獨に棲むとい
ふことである。

〔四〕 ほうろく

七八七

しぎ Numenius cyanopus, Vieillot.

七八八

英名を「オーストラリアン、カールウ」(Australian Curlew)といふ。前種と同様に、嘴は頗る長い。翼は中庸大で、尾は短い。大きい鳥で、跗蹠部は二寸五分より長い。下背部と腰とは褐色で、上背部と同色の黒斑がある。この種は、東部西比利亞にて繁殖し、夏季本邦に渡來し、冬を濠太利亞に越すのである。

〔五〕 ちゆうしぎやくしぎ Numenius phaeopus variegatus (Scop.)

英名を「コンモン、ウインブレ」(Common Whimbrel)といふ。小形の鳥であつて、跗蹠部は長さ二寸許である。下背部は、上背部よりは、褐色が勝つた條線を、多く散布するが、上背部よりは、非常に淡色である。此の種は、舊世界の極地にて繁殖し、春と秋との渡りの際、本邦の海岸を通過するのである。

〔六〕 こしやくしぎ又ちゆうしぎばしやく Numenius minutus, Gould

英名を「リースト、ウインブレ」(Least Whimbrel)といふ。前三種の跗蹠部の鱗片は、前面は屋瓦狀に排列し、後面は網目狀であるが、本種のは、前後面共に、屋瓦狀に排列する。また手蹠と腕蹠の内羽にある淡色の横條は、不明である。この種は東部西比利亞にて蕃

殖し、移住の際、本邦に來るのは、甚だ稀れである。

〔七〕 つるしぎ Totanus fuscus (Linn.)

英名を「ダスキ、レッドシャンク」(Dusky Redshank)といふ。この屬のものは、中趾と内趾とに蹠があつて、後趾は短く、その先端のみ地に着く。この種の羽色は、下背部と腰とは白く、且つ條がない。腕蹠は白く、これには灰色の横斑がある。

この種は、ラブランドよりペーリング海峡に互れる、舊世界の凍野にて蕃殖し、冬季本邦の海岸に渡來するのである。

〔八〕 あかがねしぎ又あかあししぎ Totanus calidris (Linn.)

英名を「コンモン、レッドシャンク」(Common Redshank)又「プール、スニーン」(Pool Snipe)又「テウク」(Tonke)又「トーク」(Touk)又「サンド、コック」(Sandcock)又「レッド、レッグ」(Red Leg)又「レッド、ホースマン」(Redlegged-Horseman)といふ。體長は九寸二分である。嘴は長く、脚も亦長くして、輝ける橙黄赤色である。前種同様に、趾の間には蹠がある。その性よく走り、又よく水を涉り、更らに必要なる場合には、泳ぐことが出来る。下背部と腰とは白く、腕蹠は殆んど一様に白くして、横斑はない。尾は白く、且つ暗色斑を有する。

この種の飛翔するや、長脚をば伸出し、翼をば擴げ出し、如何にも美觀である。常に沼



(From Birds Useful and Harmful) ぎしれがかあ 圖八十三百三第

七九〇

地を徘徊し、凡ての渉水鳥の如く甚だ貪食にして、甲蟲、バツタ、及び蝸牛の多量を食するのである。巢は沼澤地にあつて、枯草間に置かる。その蕃殖地は、英國南部西比利亞、オコック海であつて、また北海道にも蕃殖するならんといふ。而して、冬をマレイ群島にて越すのである。

〔九〕 あをあしし

ぎ又をじろし

ぎ又あをあし

ちどり Totanus

glottis (Linn.)

英名を「グリーン・マンク」(Greenshank)といふ。下背部と腰とは白く、腕蹼は殆んど一様に灰色で、翼は五寸八九分の長さがある。此種の蕃殖地はスコットランドよりラブレランド及びシベリアを横りて、カムチャツカに亘れる極地である。春と秋とに、本邦の海岸に渡來するのである。

〔一〇〕 こあをあしし Totanus stagnatilis, Bechst.

英名を「マーシユ・サンド・パイパー」(Marsh Sandpiper)といふ。前種よりは小さく、翼長は四寸六分位である。此の種の蕃殖區域は、歐洲及び南部西比利亞であつて、移住の際、稀れに本邦に渡來するのである。

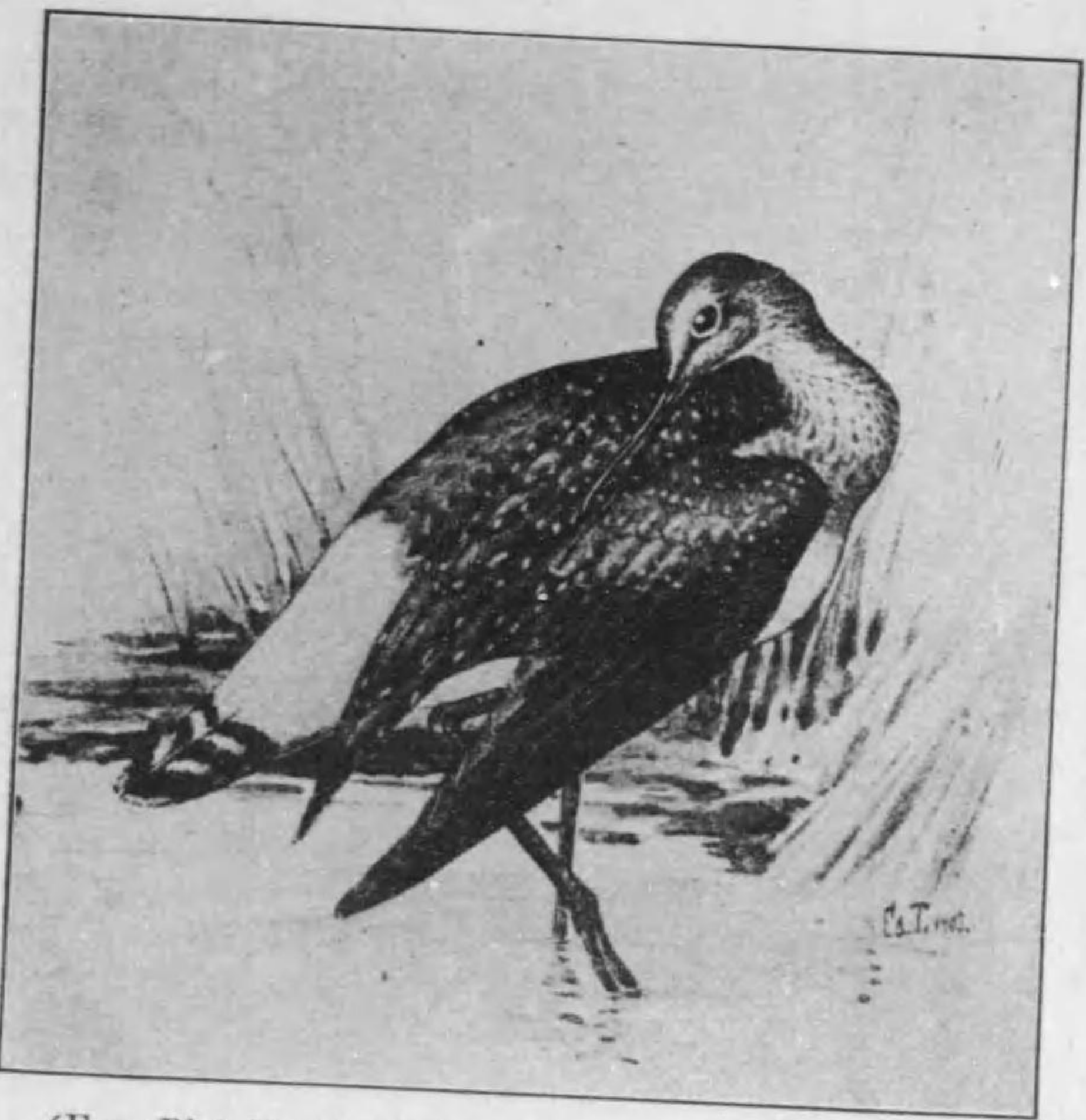
〔一一〕 たかぶし Totanus glareola (Linn.)

英名を「ウッド・サンド・パイパー」(Wood sandpiper)といふ。小形の鳥で、翼長は四寸二分位である。下背部は肩腰の上方の羽毛と殆んど同色を呈する。上尾筒、腋下、下覆翼蹼は、白色部が著しく目立つのである。此の種は、歐洲西比利亞の極地及び其の附近に於て蕃殖し、春と秋との移住の際、本邦の海岸を通過するのである。

〔一二〕 くさし Totanus ochropus (Linn.)

英名は「グリーン、サンドパイパー」(Green Sandpiper)

七九二



(From Birds Useful and Harmful) ぎしきく 圖九十三百三第

體の上部は、一體に暗褐色で、白斑がある。腰は純白で、尾翹の中で、二枚の外側にあるものは白いが、中央の翹は、其の末端に、幅廣き黒帯がある。體下は白く、頬と胸の邊には、暗色點を散布する。飛力は甚だ速かで、飛翔せる時には、黒と白とで、彩り分けた鳥の様に見へる。嘴は緑褐色で、脚は帯緑灰色である。其の食物は、主に昆蟲より成り、又小さな蚯蚓や、モノアラガヒの類なども、食ふのである。肉は泥臭くして、食ふに堪へずと云はれて居る。又他の鳥の舊巢にも、産

る。この種は、地上若くは蘚苔で被はれたる切株上に、造巢する。

卵する。其の蕃殖地は、舊世界の極地に近き所であつて、冬季本邦に渡來するのである。

〔一三〕 きあししぎ又うすずみしぎ *Totanus incanus* (Gmelin.)

英名は「ウランダリング、タツター」(Wandering Tattler)といふ。中庸大の鶉で、下背部、腰、上尾筒、腋下は、一様に灰色である。嘴は伸直で、翼長は五寸以上あつて、脚は黄い。西比利亞の東部で蕃殖し、秋と春とに、我邦に渡來するのである。

〔一四〕 そりはししぎ *Totanus terekinus* (Lath.)

英名は「テレク、サンドパイパー」(Terek Sandpiper)といふ。嘴はアヲアシシギの如く上方に彎曲する。手翹尾筒部には白色部がない。腕翹の大部分は白く、腋下も白い。この種はアルチャングルよりカムチャツカに亘れる極地にて繁殖し、春と秋との移住の際、本邦に渡來するのであらう。尤も未だ北海道にては、發見せられないのである。

〔一五〕 いそしぎ *Totanus hypoleucus* (Linn.)

英名は「コンモン、サンドパイパー」(Common Sandpiper)といふ。腋下は白く、手翹や腕翹の大部分には、大なる白色の斑紋があるが、腰や上尾筒には無い。其の蕃殖區域は、本邦より西比利亞、歐洲大陸及び英國に亘り、本邦の南部には常に棲息するのである。

〔一六〕 ゑりまきしぎ *Totanus pugnax* (Linn.)

英名は「ラッフ(Ruff)」といふ。腋下は白く、手翹と腕翹とは、白色部がない。また上尾筒の中央部にも、白色部を有しない。雄の頸部には、襟卷の如く見ゆる、顯著なる羽毛があるが、雌のは著しくはない。この種の蕃殖区域は、歐州、西比利亚を横りて、カムチャツカに及んで居るが、移住の際稀に本邦に渡來するのである。

〔一七〕 おほそりはししぎ *Limosa rufa uropygialis* (Gould.)

英名は「バー、テイルド、ゴールドウイット」(Bar-tailed Goldwit)といふ。この属のものは、美しき羽毛を有し、體は細く、脚は長い。且つ大さは山鳴よりも大いのである。嘴は長く、頭長の二倍もありて、その先端に至るに従ひ、漸々細くなり、その先端は、稍上方に彎曲する。尾には、黒色と白色とが、規則正しく横斑となつて居る。また趾には、之を連結する膜はない。

ラブランド及び西比利亚の凍野にて蕃殖し、移住の際、本邦の海岸に渡來する。その肉は美味である。

〔一八〕 をぐるしぎ *Limosa melanura melanuroides* (Gould.)

英名は「ブラック、テイルド、ゴッドウイット」(Black-tailed Godwit)といふ。尾の基部に近き半部は、純白であるが、末端は黒色である。この種は、西比利亚及び極地に近き、歐州諸

國に於て蕃殖し、春と秋との移住の際、本邦に渡來するのである。

〔一九〕 をばしぎ *Tringa crassirostris*, Temm. & Schl.

英名は「ジャパニース、ノット」(Japanese Knot)といふ。この属のものは、嘴は頭位長く、伸直にして、長さは一寸三分位もある。趾には、蹼なくして分離し、後趾は短く、翼は尖り、體軀は肥大にして圓い。又上尾筒は白色である。この種の蕃殖地は、多分、東部西比利亚ならんと云はれて居る。而して春と秋との渡りの時、本邦に渡來するのである。

〔二〇〕 こをばしぎ *Tringa canutus*, Temm.

英名を「ノット(Knot)」といふ。前種に似て、小形である。この種の蕃殖地は、極地であつて春と秋との移住の際、本邦の海岸を通過するのである。

〔二一〕 はましぎ又はしなが *Tringa alpina pacifica* (Cones.)

英名を「ダンリン(Dunlin)」といふ。第七乃至第九の腕翹の大部分は白いが、上尾筒の中央部は少しく白いか、若くは全然白くはない。且つ尾端は尖りて、脚は黒いのである。この種は極地にて蕃殖し、春と秋との移住の際、本邦に渡來するのである。

〔二二〕 むらさきしぎ *Tringa striata*, Linn.

英名を「パーブル、サンド、パイパー」(Purple Sand Sandpiper)といふ。腰と上尾筒とは、殆ん

ど黒く、第七乃至第九の腕蹼は殆んど全部白いのである。この種は、極地に産する鳥にして、冬季稀れに千島に渡來するのである。

〔二二三〕 三趾鳴 *Tringa arenaria*, Linn.

英名を「サンダーリング(Sanderling)」といふ。この種は、後趾を缺いて居る。極地に産する鳥にして、本邦には、稀に渡來するのである。

〔二二四〕 ごうねん *Tringa ruficollis*, Pallas.

英名を「リットルスチント」(Little Stint)といふ。翼長は三寸四分に足らないのである。嘴は狭く、その基部は、最も幅廣いのである。脚は黒い。夏羽では、咽喉部と上胸部とは、栗色である。故にまた「レッド、スローテッド、スチント」(Red Throated Stint)の名がある。

この種は、ラブランド及び西比利亞の凍野にて蕃殖し、秋と春との移住の際、本邦に渡來し、普通に見る種である。

〔二二五〕 ひばりこ *Tringa damacensis*, Horsf.

英名は「ミツデンドルフス、スチント」(Middendorff's Stint)といふ。小形の鳥にして、翼長は三寸四分に足りない。脚と趾とは、橄欖褐色で、尾蹼の外側は灰色である。東部西比利亞にて蕃殖し、移住の際、本邦に渡來し、冬をマレイ群島に越すのである。

〔二二六〕 へらしぎ *Tringa pygmaea* (Linn.)

英名を「スプーン、ビルド、サンド、バイバー」(Spoon-billed Sandpiper)といふ。嘴は扁平で且つ杓子状である。大き及び羽色は、トウチンに似て居る。ベーリング海峡の北の地方にて蕃殖し、冬季時々本邦の海岸に渡來するのである。

〔二二七〕 うづらしぎ又さるこ *Tringa acuminata* (Horsf.)

英名を「シベリアン、ペクトラル、サンド、バイバー」(Siberian Pectoral Sandpiper)といふ。翼長は四寸以上である。脚は青白く、中央の上尾筒は暗色で、腕蹼には白色部を有せざるか、若くは僅少の白色部を有するのである。

この種の蕃殖地は、極地にして、春と秋との移住の際、本邦に渡來するのである。

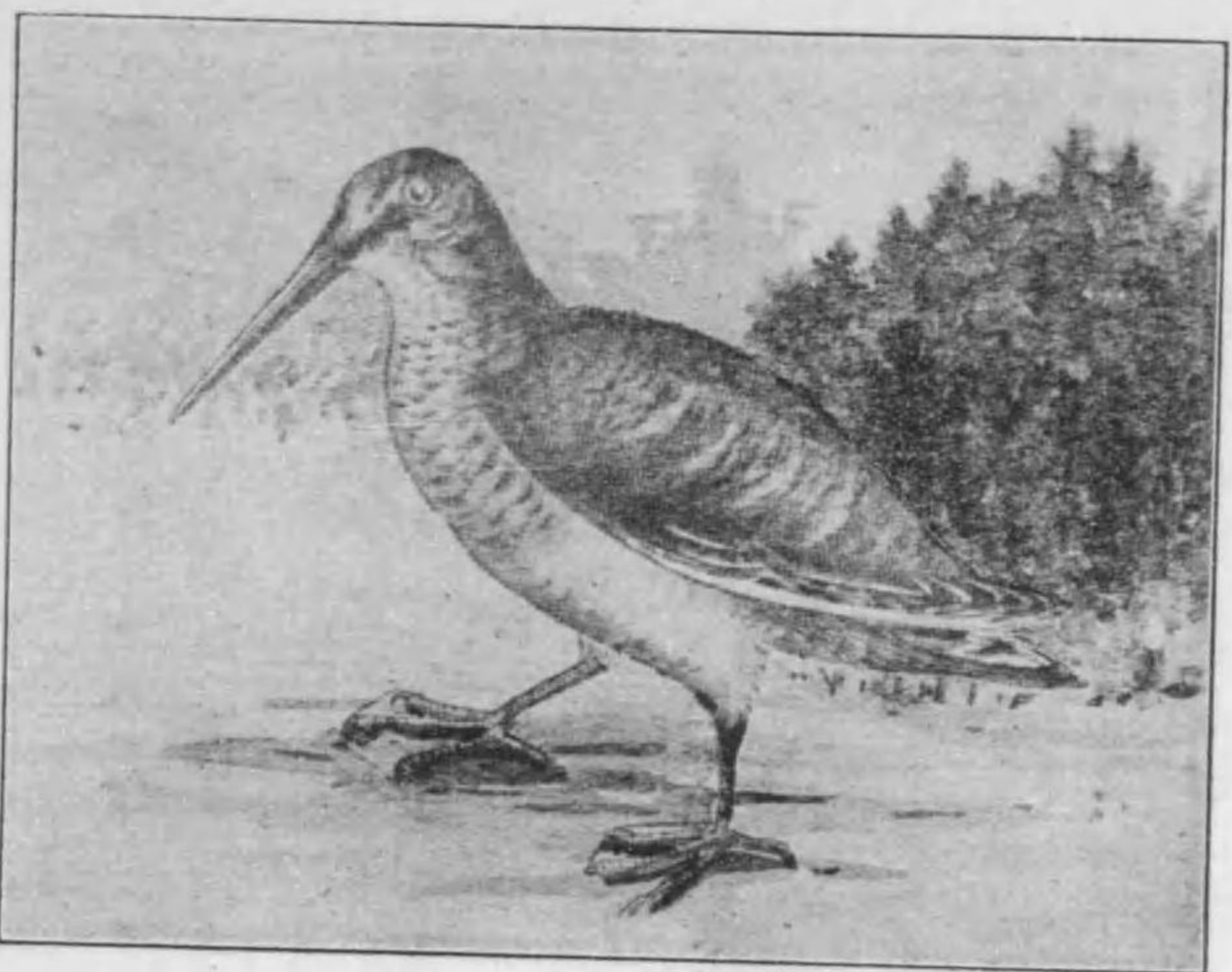
〔二二八〕 きりあい *Limicola sibirica* Dresser.

英名を「ブロード、ビルド、サンド、バイバー」(Broad-billed Sandpiper)といふ。小形の鳥にして、嘴は黒く、幅廣く扁平にして、長さ一寸許である。腕蹼と上尾筒とは、少しく白色部あるか、又は全くないものがある。

其の蕃殖區域は、大西洋より太平洋に擴がり、冬季、稀れに本邦の海岸に、渡來するのである。

(二) 田鵲亞科 (Scolopacinae)

七九八



ぎしまや 圖四百三第

(一) やまこぎ又ぼこぎ
Scolopax rusticola, Linn.

英名は「ウッドコック」(Woodcock)といふこの亞科の中で最大のもので、大きさは鳩よりは稍大きい。體の上部は褐色に、灰黒と白とを混じ、尾翹の下面には、銀白色の先端を有し、胸の羽毛には横條があつて、よく棲處の四周の色と一致するのである。其の性質は臆病であつて、日中は最も閑靜な林地に隠くれ、夜は出で、耕地、沼澤地、河畔に徘徊し、食を索むるのである。親鳥はよく其の雛鳥を愛撫する。自分が往來する場所を好み、再び舊處に歸る癖がある。常に草又は根を以て巢を造り、之を樹木の幹に近き地上に置くのである。其の肉は他の鵲と同じく、頗る

美味である。この種は亞細亞、歐洲の山地、森林に棲息するものにして、秋季本邦を通過するものは、北海道、千島、カムチャツカ、東部西比利亞より來るものであつて、一部は本邦に止り、一部は琉球、臺灣より、遠くは支那、フィリッピン群島、印度に渡りて避寒するのである。然し翌年の春になると、北行するを以つて、この際、本邦にも、夥しく渡來するのである。尤も少數のものは、本邦に止まり、北海道及び本州の南部に於て、夏季蕃殖するといふことである。余は川越の南一里、福原村の一狩獵家が、此種の雛を伴ひて、徘徊せるを見たといふ談を聞いたことがある。

(二) たしぎ又ぢしぎ又まこぎ *Gallinago caelestris* (Frenzel)

英名は「コンモンズニープ」(Common Snipe)といふ。山鵲よりは割合に大なる嘴がある。腹は白く、頭、頸、肩は稍黒く、胸は白く、一體に黄色を帯びて、枯草の色と一致する保護色である。翼長は四寸三分で、尾翹の總数は、十四枚で、其中、最も幅廣いものでも、三分五厘を越へないのである。この種は、歐洲及び亞細亞に産し、八月末及び九月初旬より、本邦に渡來し、十月頃最も多く、翌年初夏まで、水田、沼澤に棲んで居て、蠕蟲等を食するが、時には水生植物をも食ふのである。

(三) おほぢしぎ *Gallinago australis* (Lath.)

英名は「ラサムス、スニープ」(Latham's Snipe)といふ。前種よりも大きく、翼長は五寸乃至五寸四五分である。尾翹の總数は十八枚、稀に十六枚を有する。その中、最も外方の二枚は幅狭く、二分五厘を越へない。この種は夏季に、本邦南部の山地にて蕃殖し、恐らくは北海道に於ても蕃殖するやうであるが、秋季にはフイリボン諸島及び支那の海岸を通過し、冬季を濠太利亞に越すのである。

[四] あをしぎ Gallinago solitaria, Hodgson.

英名を「ジャバニース、ソリタリー、スニープ」(Japanese Solitary Snipe)といふ。大きさは中庸大で、翼長は略、大地鵝と同じである。體の下面は、咽喉の邊は、白めきて、淡き灰茶色の斑点を有し、胸も亦灰茶色で極く薄い暗條がある。腹部は、白めきたる色なるも、灰茶色の横條を密生する。體の上面は、黒、茶、白を混じり、翼は黒く、その末端には、白色の縁がある。この種は、冬季本邦に渡來し、山中溪流の岸、及び森林中の濕地に棲息し、水田には棲息しないのである。常に獨棲をなせども、時には雌雄雙棲することが、あるといふことである。

[五] ハしぎ Gallinago gallinula (Linn.)

英名を「ジャック、スニープ」(Jack Snipe)といふ。田鵝に似て小さい、翼長は三寸四分乃至三寸六分である。肩の内側の羽は、金屬綠色を呈し、背には紫色の光澤がある。この種は、舊世界の極地にて蕃殖し、春と秋との移住の際、本邦の海岸に渡來するが、稀に見る鳥である。

[六] ちゆうしぎ Gallinago megala, Swinhoe.

英名は「スウインホース、スニープ」(Swinhoe's Snipe)といふ。翼長は四寸三分乃至四寸七分である。尾翹は二十枚ありて、その兩側にある六枚宛のものは、幅が狭い。この種は、西比利亞の南東部にて蕃殖し、春と秋との移住の際、本邦に渡來し、冬をマレイ群島に越すのである。

[七] はりをしぎ Gallinago stenura (Kuhl)

英名は「ビンテイル、スニープ」(Pintail Snipe)といふ。翼長は四寸一分乃至四寸四五分である。尾翹は二十六枚ありて、その中、兩側にある八枚宛は甚だ狭く、幅は八分三四厘を越ゆることはない。この種は、東部西比利亞にて蕃殖し、冬をマレイ群島に越すのであるが、本邦にても、嘗つて捕獲したことがある。

[八] たましぎ Rostratula capensis (Linn.)

英名は「ペインテッド、スニープ」(Painted Snipe)といふ。嘴は彎曲し、其長さ一寸五分許

あつて、跗蹠部の長さよりは、あまり長くはない。また跗蹠部は爪を合せたる中趾の長さと同長である。頭上の中央線にかけて黄色の一條を有し、胸の周圍より、後方にかけても黄色で、肩より胸にかけては黄色の一條がある。上體は金屬光澤を帯びたる黒色で、翼と尾とには、略圓形をなせる暗黄色の斑紋がある。胸部は黒灰色の羽毛を交へ、腹面は白いのである。

この種は、本邦の南部には、常に棲息する。その蕃殖地は、支那、印度、南亞弗利加であつて、元來が熱帶種であるが、本邦に於ても、蕃殖するのである。

(一) 秧鷄科 (Rallidae)

體軀の大きさは、大なる家鷄位より、小なるは雀大である。嘴は、種類に因りて、長さ及び厚さを異にすれども、側方は平坦である。鼻孔は嘴の基部の前面に位し、口角は、額下若くは眼に至る半途に位する。脚には、趾の間に蹠なく、前趾は常に長く、後趾は短かけれども、地に着いて居る。翼は短く、殊に上腕と前腕とは、短いのである。尾も亦短く、頭は小さく、體の側面は平坦である。

稀に雌雄に因りて羽毛を異にし、また稀に季節的變化を有するものである。而して幼鳥の羽毛は、親鳥と異つて居る。雛は孵化した後、唯僅少の間のみ、親鳥に因りて養は

れるのである。而して綿毛は、一様に黒色なるか、若くは暗褐色であつて、甚だ活潑であるが、充分に成長する迄は、飛翔することが、出来ないのである。

常に、巢をば蘆葦地、若くは藪叢中の地上に置き、蘆葦、草等の塊を以つて、巢を造り、斑點ある數個の卵を産む。卵は凡そ三週間に於て、孵化するのである。

本科には、約二百種ありて、地球上到る處に産する。而して多くは渡鳥である。總てのものは、昆蟲其他小形の有害動物を殺す利益あれども、僅少のものは、收穫物を害し、また他鳥の卵を奪ふものがある。

(一) 姬秧鷄 *Porzana pusilla* (Pallas.)

英名を「バラス、クレーク」(*Pallas' Crane*) 又「バイロンス、クレーク」(*Baillon's Crane*) といふ。小鳥にして、翼長は三寸位である。第一手翬の外翬は白く、下尾筒は白くして、黒條を有し、喉又は胸の兩側には、斑紋がない。充分に成長せる雌雄は、その色は同様に於て、頭の兩側は、石板灰色にして、幅廣き一本の褐色帯に因りて、中斷せられる。この褐色帯は、嘴の基部に始り、眼前を通りて、眼の後方より、頸背にまで達するのである。

この種は、本邦到る處に棲息し、その蕃殖區域は、西比利亞の南東部、印度、バルマ、支那及び本州にして、冬は、アイリピン諸島、ボルネオ、アンダマン島に渡るのである。

小川三紀氏に據れば、静岡地方にては、八月中旬より九月上旬に亘りて、稻の水田内に在りて、一株又は二株の根基に近く、稻の枯葉又は枯莖を以つて、組み合せたる巢を營む。この巢の地上よりの高さは、約二寸乃至六寸で、巢の底部は、殆んど水に接觸せんとするのである。而して、一産に五乃至八卵を産むのである。

〔一〕 しまくひな又すゞめくひな(静岡) ひめくひな(静岡)

Porzana exquisita, Swinhoe.

英名を「スウインホースクレーク」(*Swinhoe's Crake*) 又「バットンクレーク」(*Button Crake*)

といふ。甚だ小なる鳥にして、翼長は二寸五分である。腕蹼の大部分には、白色部が多い。この種は、本邦到る處に棲息し、恐らくは、四時棲息するものであらう。その分布は本邦西比利亚の南東部及び支那の北東部にまで、擴つて居る。

〔三〕 緋秧ひくひな 又なつくひな又くひな(静岡) 又きゆうーな(上總長生郡)

Porzana fusca (Linn.)

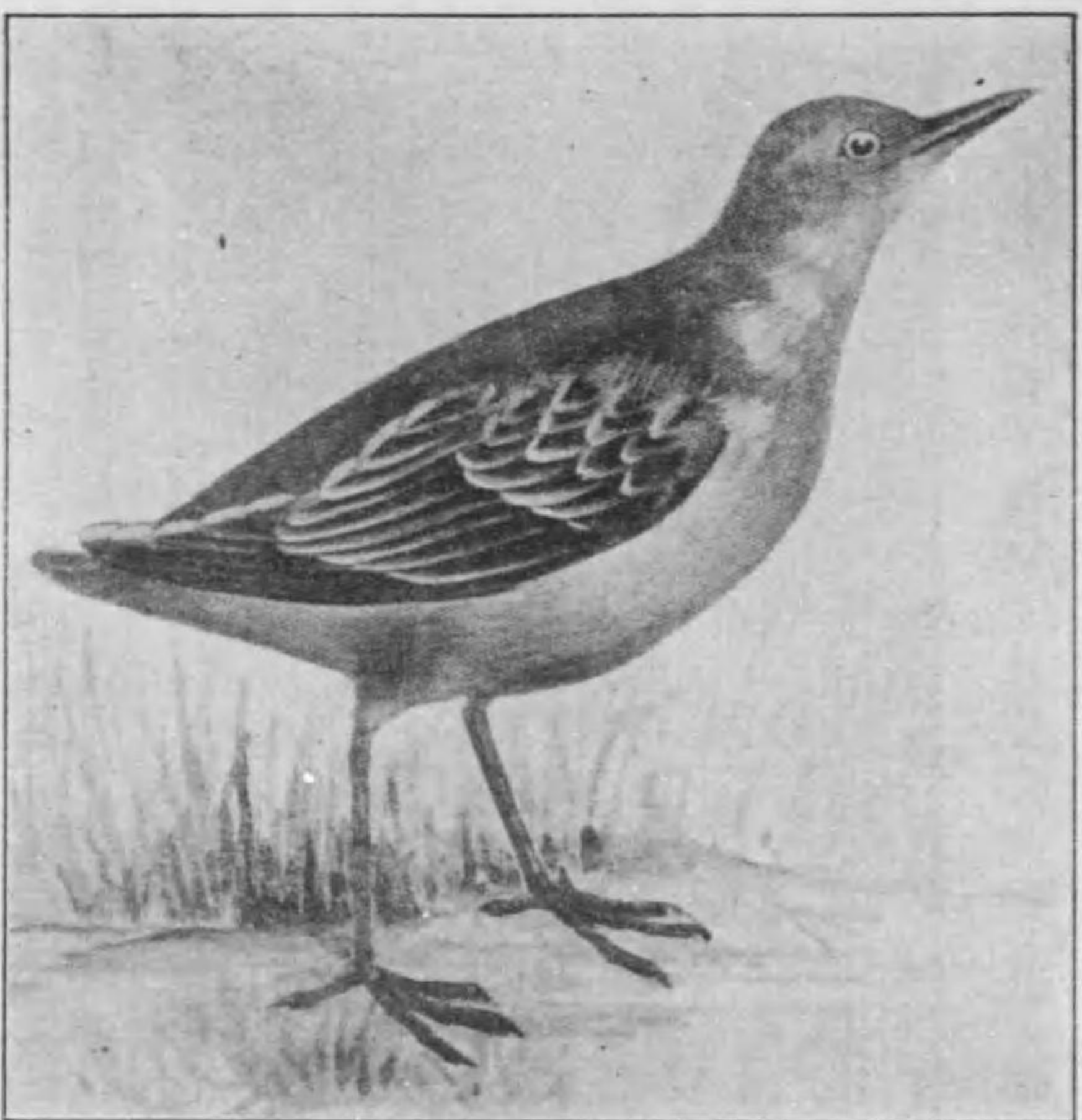
英名を「シベリアンラッヂイクレーク」(*Siberian Ruddy Crake*) 又「ラッドプレスレッド、レーク」(*Red-breasted Rail*) といふ。小鳥にして、翼長は三寸乃至三寸八分である。體の上部は橄欖褐色にして、胸部は葡萄酒色の栗色である。而して、手蹼と腕蹼とは、白色部が

ないが、析々は第一手蹼の外羽に、一個又は二個の斑紋を有することがある。

この種は、本邦到る處に棲息し、恐らくは、夏季に北海道に行くのであらう。而して本邦の南部にては、四時棲息するものにして、本邦及びアムールの下流にて、蕃殖するのである。

第三百四十一圖
小川三紀氏に據れば、静岡地方に於ては、八月中旬より八月下旬に産卵し、稻の水田内に在りて、一株又は二株の根基に近く、地上、水を通じて、四寸乃至一尺の所に、稻の枯葉及び枯莖を以て巢を構へる。而して一産の卵数は、三乃至八個である。

〔四〕 秧くひな 又ばんくひな 又ふゆくひな又たし



ぎ(青森縣) 又かはらけ(米澤) 又(米澤) *Rallus aquaticus indicus* (Blyth.)

英名を、イースターン、ウヲター、レイル [Eastern Water-rail] 又「インデアン、ウヲター、レイル」 [Indian Water-rail] といふ。體は中庸大にして、翼長は四寸三分乃至四寸六分である。體の上部の羽毛は、淺黄色を帯びたる褐色にして、その中央部は、殆んど黒い眼前は暗褐色にして、その部は眼の前方と後方とに擴り、下尾筒は黒條を有する。

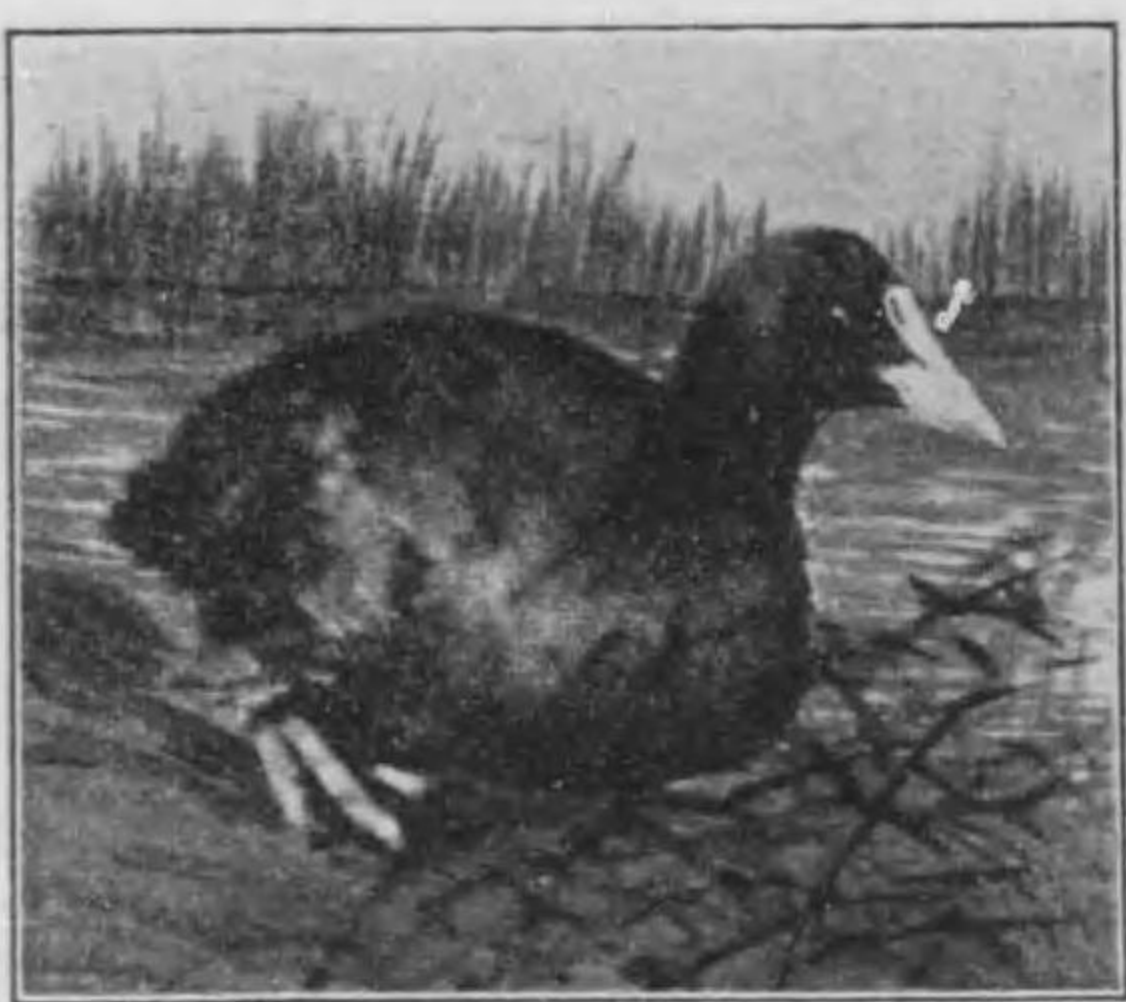
この種は、本邦到る處に棲息し、その蕃殖區域は、本邦より支那、東部西比利亞、バルマ、印度、歐羅巴、英國に迄擴がつて居る。常に沼地及び水邊に徘徊し、蠕蟲、軟體動物及び水生植物を食ふのである。よく走行すれども、あまり飛び立つことはない。また水に入るるとき、敵に襲はるゝときは、水下に沈み、遙か彼方へ、浮び出すのである。巢は粗糲なる草、蘆葦等より成り、蘆葦地附近に置くのである。卵は黄色味を帯びたる地に、赤褐色及び灰色の斑點がある。

[五] せいけい Gallinix cinereus (Gmelin.)

英名を「ウヲター、コック」 [Water Cock] といふ。翼長は五寸九分乃至七寸一分である。雄の下尾筒部は、白く、雌にては淺黄色にして、雌雄共に暗褐色の條斑を有する。この種は、本邦の南部に棲むのであらうと云はれて居る。

[六] 骨頂 Fulica atra, Linn.

英名を「コンモン、クート」 [Common Coot] 又「ボールド、クート」 [Bald Coot] といふ。大なる鳥にして、翼長は六寸五分乃至七寸である。體の上部は、灰黑色にして、體下は帶藍灰色である。また下尾筒は、總べて黒色である。脚は短きも、趾は、長く、厚く、且つ裂片狀をなすのである。

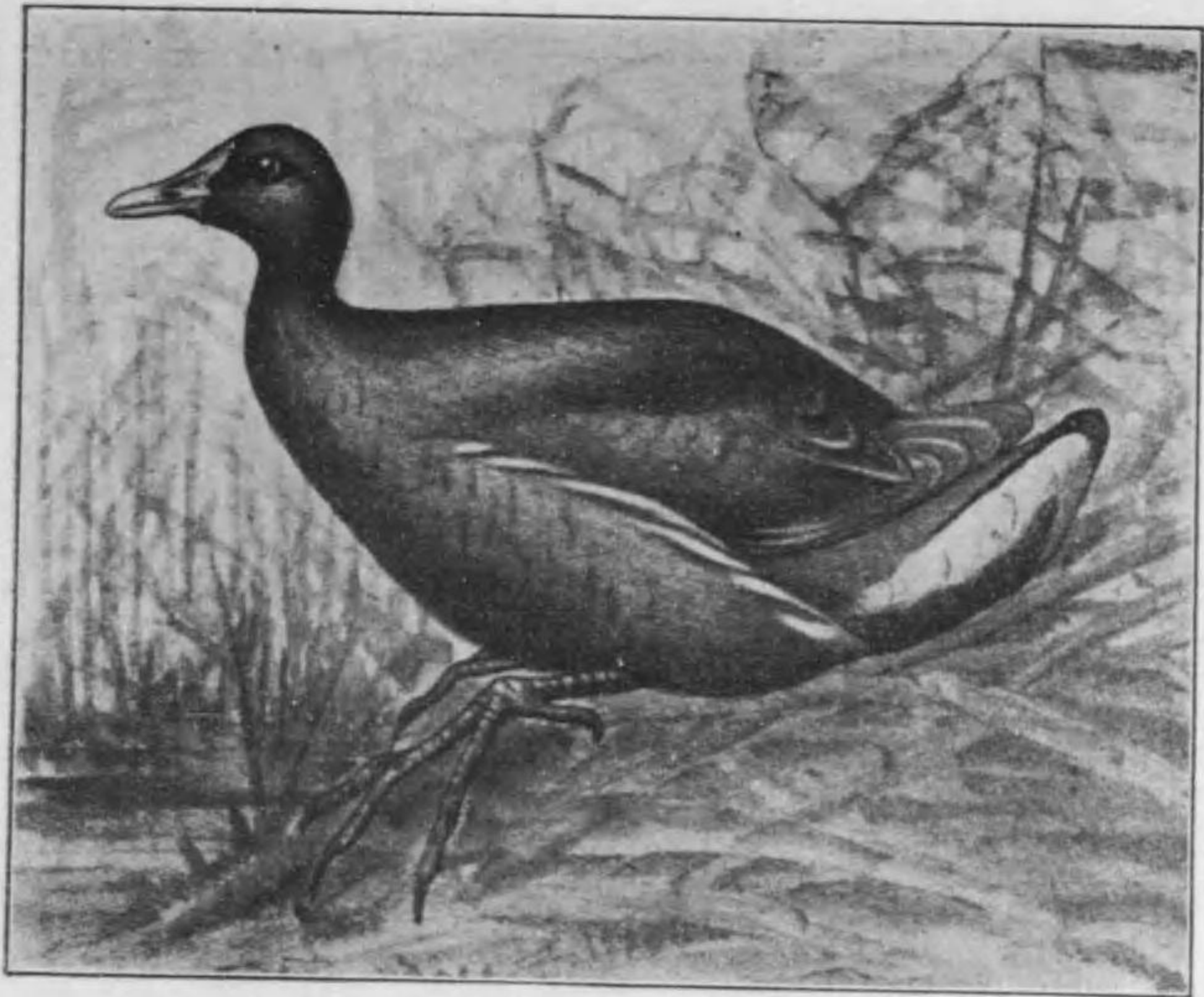


第三四二二圖 おぼはん

この種は、本邦到る處に棲息し、その蕃殖區域は、本邦より、南部西比利亞、歐洲大陸及び英國に擴がつて居る。その習性は、田鶏に似て居る。巢は常に乾燥せる、蘆葦及び水草より成り、殆んど水を以て被はれたる、小丘の頂上に置くのである。されば、出水あるときも、損害を受くるとなくして、雌は巢が、水の爲めに浮き出して、附近の岸に浮着するまで、驚くことなく、靜坐するのである。卵は、八乃至十四卵にして、卵殻は石と同色にして、暗褐色の斑點を有するのである。

[七] 田鶏 又こぼん Gallinula chloropus (Linn.)

英名を「ムーアヘン」 [Moorhen] 又「ウヲター、ヘン」 [Waterhen] といふ。前種よりも小さく、翼長は五寸乃至五寸六分許である。體の上部は濃橄欖褐色である。體の下面は、石板灰色に



第三十四百三圖

して横腹には白色部がある。下尾筒の中央の羽は黒く、その側方の翹は、白いのである。

この種は、本邦到る處に棲息し、元來極地の鳥にして英國にては、甚だ普通である。物に驚くときは、忽ち水中に潜入し、浮漂せる雜草の下に隠くれ、その鼻孔のみを、水面に出すのである。巢は枝、乾燥せる蘆葦、葉、禾本より成り、一産に十卵以上を産む。卵は淺黄色にして、橙黄褐色の斑紋を有する。雛は生まるゝや否や、直ちに水を泳ぐことが出来るのである。

〔三〕 野雁科 (Orididae)

體軀の大きさは、雉位のものより、大なるは、鶴よりも大きい。嘴は短く、形狀は稍家鷄若くは鳩の嘴に似て居る。而して口角は、眼下に位するのである。脚の跗蹠部は、中庸の長さあるか、若くは長くして、後趾を缺

いて居る。前趾は甚だ短く、その基部に於て、少しく蹠を有する。翼は大きく、且つ幅廣いのである。尾は短く、屢々普通の家鷄に見るが如く、脚の上方に位する。頭は小さく、頸は長い。體は幅廣く、且つ重々しく見へ、背は甚だしく平坦にして、水平になつて居る。

本科のものは、約三十種を含み、東半球の温帯及び暖帶地方に産し、常に乾燥せる廣濶なる地方に棲んで居る。而して大多數のものは、亞弗利加に産するのである。別に巢を造らずして、裸出せる地に卵を産み、一産に二乃至五卵を産み、卵は緑を帯びたる地か、若くは褐色を帯びたる地に、斑紋を有するのである。雛は綿毛を有し、その性活潑である。常に雜草及び昆蟲等を食すれども、水を飲むことが稀れである。

〔一〕 野雁 *Os dybowskii*, Tacz.

英名を「イースタングレート・グレート・マスタード」(Eastern Great Bustard) といふ。嘴は稍長く、且つ細い。頭は淡色にして、大雨覆、中雨覆及び小雨覆は、灰色にして、背部も亦灰色である。その蕃殖區域は、恐らくは、東部西比利亞を横りて、本邦に及ぶものならんといふ。

〔二〕 大野雁(假稱) *Os tarda*, L.

英名を「グレート・バスタード」(Great Bustard) といふ。この種は、西部歐羅巴に於ては、少

しく産するのみなれども、西比利亞の南東部と南部とは、大に群居するのである。雄は約四尺の高さに達し、體重は三貫六百三十匁許に達する。頭は灰白色にして、頤の兩側には、白色の毛總が垂下して居る。翼は淡栗色に、黒條を有するのである。尾は翼と同色にして、その先端は白いのである。また體の下部は、白味を帯びて居る。



雁野大 圖四十四百三第

(三) 鶴科 (Gruidae)

飛力は有力且つ迅速なれども、敵に追はれるときも、飛翔することをなさずして、駆けて逃れるのである。この種は、常に穀粒、種子、昆蟲、小爬虫類等を食する。その巢は、唯地中の穴にして、七面鳥の卵よりは、大なる二三卵を産む。卵は淡褐色にして、鈍い赤色の斑紋を有するのである。

頭は小さく、頸は長く、體軀は輕快である。嘴は常に頭部よりも長く、且つ縦扁伸直にして、その先端に至るに従ひ、漸々尖つて居る。鼻孔は殆んど嘴の中央に、位し、且つ長方形をなして居る。また口角は、額の下に位する。脚は頗る細長にして、脛骨部は長く、その大部分は裸出して、六角形の鱗片がある。跗蹠部も亦長く、且つ強壯にして、これには楯狀鱗を有する。三趾は前向し、その中で外方に位する二趾は、基部に短小なる膜を有する。後趾は小さくして、地を踏むことはない。翼は大きく、且つ幅廣く、内方の腕蹠は、長くして、翼を疊むときは、腕蹠にて、手蹠と尾とを被覆するのである。尾は短く、且つ方形であつて、十二枚の幅廣い蹠より成立するのである。

羽毛はよく密生し、羽色は概して、その大部分は灰色、黒色若くは白色である。雌雄に因つて、羽毛の相違もなく、また季節的變化もないのである。然しながら、羽毛の始めて生へた雛では、成鳥の羽色よりも、餘分に褐色を帯びて居て、且つ成鳥の如く、頭は裸出することなくして、この部に綿羽が生へて居る。

本科のものは、その性群居することを好む。而して蕃殖期に於ては、雌雄雙棲して、他の組々より、分離するのである。常に戒心深く、よく危難の近づくを知るのである。またその動作は、甚だ活潑である。その行歩は、悠々として遅けれども、反つて莊重なる態度を呈して居る。然し又よく走り得るのである。常に好んで沼澤河邊、若くは海岸等を徘徊し、その長脚を利用して、淺瀬を涉り、また長い嘴を用ひて、泥土及び水中を探り、蠕蟲、

昆蟲、魚類、兩棲類、軟體動物を食ひ、水草の莖や根、穀粒等を啄む。故に農業上には、寧ろ破壊を與ふる鳥ではあるが、本邦に渡來する數は、漸々減少したる爲めに、種屬の絶滅を防ぐ必要上、その捕獲を禁止せられたのである。又朝鮮に於ても、今日に於ては、鶴の捕獲を禁止せられたのである。

鶴の飛び方は、重々しく見ゆるが、然かも有力であつて、好んで空中を翱翔するのである。尾、尾は短いから、頸をば前方に伸出し、脚をば體の後方に挺出し、よく體の加減を取り、よく飛翔し得るのである。

鶴科のものは、蕃殖期になると、雄は舞踏し、或は體をば俯伏し、或は翼をば開展し、姿勢を調へたりして、大に雌の歡心を得んことを努むるのである。又或る種に於ては、翼を閉ぢながら、よく内方の羽をば、高めるものがある。巢は地上若くは淺水に、堆積せる蘆葦などの塊上に置かる。卵は二三個であつて、常に青白色にして、且つ暗色の汚點を有し、凡そ一ヶ月位で孵化する。雛は卵殻を出づるや否や、直ちに歩き出して、自ら餌を索むるのであるが、初めの間は、親鳥は、時々嘴で、餌を與へてやるのである。

本科のものは、東半球の大部分、及び北米に産する。而して北地に産するものは、冬をば、南方の暖地に越すのである。その棲息する所は、開濶なる地方にして、常に水邊であ

る。鶴科には凡そ十六種位ある。



丹頂鶴 圖五十四百三第

〔一〕 丹頂

鶴又た
うづる

Grus ja-
ponensis
(P. L. S.
Müller)

英名を「サクレ
ツド、クレーン」
(Sacred Crane)と
ふ。總身は純白色
にして、頭上は赤
く、額、眼前、頬、咽喉

部より頸背に亘る部分と、尾端にあらはるゝ翼の羽は黒く、尾は白色である。東、部西比

利亞にて蕃殖し、本邦の東北部に渡來するが朝鮮には多いのである。朝鮮では鶴の翼の骨で煙管を造り、足骨で筭を製する。この筭をば頭上に戴くときは、頭痛を病むことがないとい唱へられて、貴婦人間に實用せらるゝといふことは、編者が明治三十六年の大阪博覽會の出品物の説明で始めて承知した所である。

明治四十五年一月の時事新報に「鶴の生涯五十年」と題して、上野動物園技手黒川義太郎氏の談話が掲げてある。今左にその中の幾分をば掲載する。

▲鶴は長命 丹頂で云へば、雌は何う見ても、雄より優形で、頸も細く、丹頂の部分も雄よりは面積が狭い。最も能く雌雄の判るのは、鳴聲で、雄はコウと一聲しか鳴かぬけれど、雌は必らずコウコウと二音づゝ續ける。亞弗利加の鶴は、別として、其他は、成年期が十年、其五倍即ち五十年位は生きるのみならず、鶴は一體強健で、總じて無病なのが多く、怪我さへなければ、内臓病で斃れる事は、まゝ無いのである。動物園では丹頂、眞鶴、黒鶴、鍋鶴、アネハ鶴及びオウストラリア産のを飼ひ、餌は鰯と粉を與へて居る。

▲親鶴の慈愛 鶴が交尾期に達したのは、丹頂の部分が非常に擴がつて來るので判る。産卵期は、四月か五月頃で平均して、長徑三寸七分、短徑二寸五分位の、大きな

卵を産む。但しオウストラリア産の鶴は、少し小さく、長徑が三寸二分、短徑が二寸七分である。卵の色は、青味に黄を加へた様な地色に、錆色の斑紋があり、夫れが尖つた方に少なく、丸味を持つた、所謂基底部の方に、濃く、且つ多くなつて居る。此色合は、外國産でも、殆んど同じである。然し亞弗利加産のには、全く斑紋の無い、扱て、愈々卵を産むとなると、燒野の雉子、夜の鶴と云ふ本文通り、親の情、極めて厚いので、見て居ても心持が好い。卵は母體に温められ、三十三日目に孵化して、母體の下から滑り出す。一時に二個を抱くから、未だ一個は、母が温めて居るので、一羽が滑り出すと、其處に雄が待ち受けて居て、鰯を細かく切つて、雛に食べさせる。見當が違つて、雛の口から、地へ落とすと、雄は拾ひ上げた上、それに砂でも附いて居ると、奇麗に洗つて、又子に食べさせる。と云ふ風である。四日目には、後のが孵化する。夫れからは、兩親掛りで、育てるが、孵化した當座は、肢が長いので、容易に歩けず、よう／＼匍つて出る。其の姿の愛らしさ、二ヶ月で、雛はもう自分に餌を食ふ様になるが、尙ほ親が居ると、甘へて親に食を求める。親は食ひ方を教へながら、愛に引かれて、自分の食べやうとした物を、食べさせる。三ヶ月を過ぎると、羽も充分に揃ひ、大きさも親と同じ位になり、色も黄褐色で、斑紋があつたのが、二ヶ月で脱け代つて白くなり、翼の先きの黒いのも、灰白色

に變化する。六ヶ月目は所謂乳に離れる時期で、親は飛翔する事を教へる。夫れは羽を擴げて地を這ふと、子も同じ様に飛ぶ。若し廣い場所ならば、中空を飛ぶであらう。是で始めて、親の責任が解けたのである。夫れから、鶴は廣い庭程産卵が早く、狭い庭では、運動不足の爲か、産卵が遅いのである。

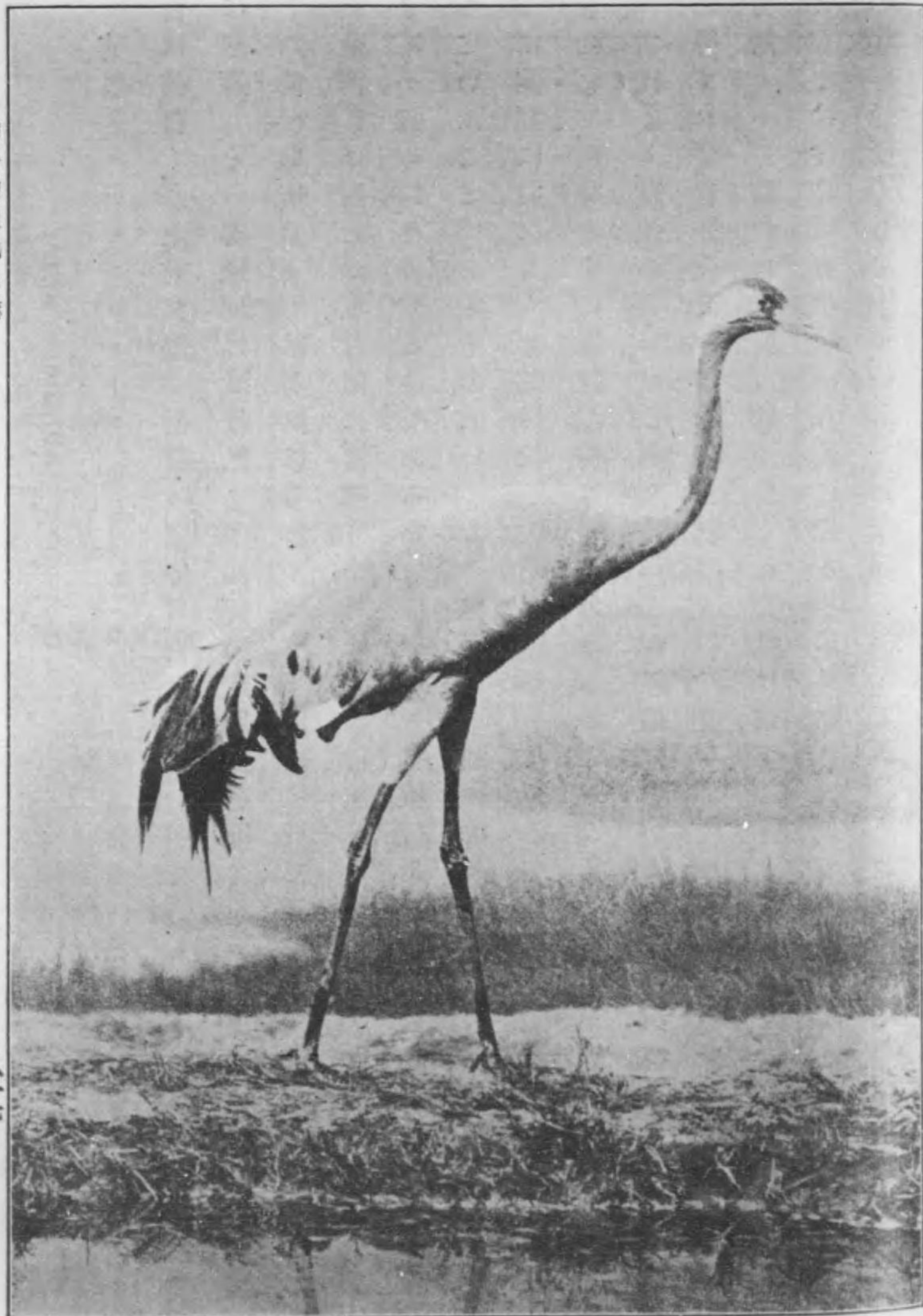
〔二〕 眞那鶴 又あをまな *Grus vipio*, Pallas.

英名を「ホワイト、ネーブド、クレーン」(White-necked Crane)といふ。全身灰褐色、若くは灰黒色である。頭頂、頸背、咽喉の前は白色で、眼の周圍は赤く、脚は暗赤色である。その蕃殖地は、前種と同一であつて、秋季本邦に渡來するのである。

〔三〕 鍋鶴 又黒鶴 *Grus monachus*, Temm.

英名を「ホワイト、ヘッド、クレーン」(White-headed Crane)といふ。體は小形で、全身灰黒色である。額と眼前とは黒く、頸の中段より、その周圍は白く、頭部も白色であるが、脚は黒い。この種は、西比利亞の東部にて蕃殖し、秋季群をなして渡來し、殊に本邦の西南部には、夥しかつたといふことである。朝鮮にては、麥の芽が一二寸位の時に、之を啄みて、害をなすのである。

〔四〕 黒鶴 又ねずみづる 又まつまへづる



(Photoby Ottomar Anschütz)(From Living Animals of the World) 鶴 黒 圖六十四百三第

英名を「コンモン・クレーン」(Common Crane)といふ。高さは約五尺で、全身灰白色で、頸側は稍白く、頭上、前頸、眼前、咽喉の諸部は、孰れも黒いのである。冬季には、本邦及び支那に來遊し、その蕃殖地は、歐羅巴より、南部西比利亞を経て、カムチャツカに亘つて居る。十六世紀の末頃までは、英國にも多く棲みて、沼地に於て蕃殖したものである。この種は、歐洲には、四月か五月頃に渡來し、十月に至れば、埃及、アビシニア、南亞細亞に冬を越さんが爲めに、移住するのである。常に群をなして旅行し、時には三四百羽の大群もあると、いふことである。その旅行するや、概して二線に排列して、二等邊三角形をなすか、又は前方に尖れる方を向けたる楔形の隊形をなすのである。この隊形は、空氣の抵抗を減じて、疲勞せず、進行し得る利益があるといふことである。

古代より、歐洲の人々は、この鳥には、全隊の指揮者があり、その指導役をなせる鳥が、疲勞すれば、自分の役をば、他の一羽のものに譲りて、己れは、隊列の後尾につくといふて居る。その移住は、夜間に於て營まれ、日中は地上に降りて、食餌を索むるのである。時としては、彼等は飛びながら、甚だ鋭るごき叫聲を發して、進行する。また途中、食肉鳥類の襲撃を受くるときは、いつもの隊形を解きて、圓陣を造りて團結し、以つて敵に顔を

向けるやうにするのである。

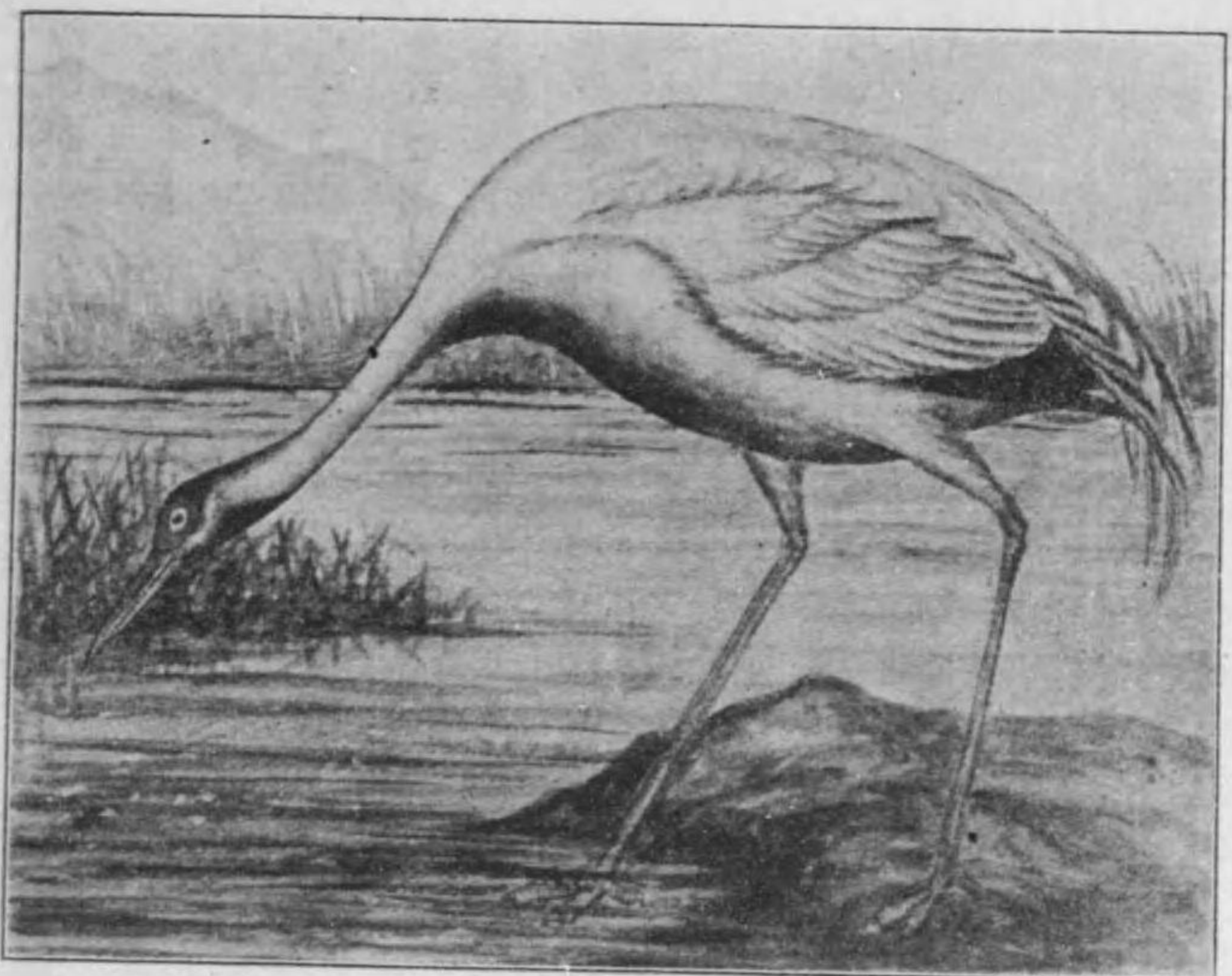
常に沼地、又は水源ある平原に來り、魚類、爬蟲類、蛙、軟體動物、蠕蟲、昆蟲、若くは小哺乳類を食ひ、又穀粒を食し、時には、新らたに播種せる耕地を、荒らすことも、珍らしくはない。その蕃殖期に於ては、群を解いて離散する。巢は粗糙に構へられ、沼の中央部の高地なれば、その地形が狭小なる場所でも、何處でも構はず、巢を造るのである。雄は雌と共に、孵化の勞に任ずるのである。又この鳥の群が眠るや、頭をば、翼の下に、隠くすのであるが、その際、一羽の鳥は警戒の任に當るのである。されば、この鶴は、歐洲では「警戒」といふ意義を示す、表章となつたものである。

この鳥の「渡り」をなすことは、歐洲にては、昔より、よく知られたる所にして、ホーマー、ヘロドタス、アリストートル、ブルターク、アリアン、ペリニイ、ストラボ氏の如きも、よくその移住せる事實を知つて、居つたさうである。

[五] 袖黒鶴 又 袖鶴 又 白鶴 Grus leucogeranus, Pallas.

英名を「シベリアン・ホワイト・クレーン」(Siberian White Crane)といふ。全身純白色にして、手翳のみは黒い。頭上と眼の周圍とは裸出し、嘴と脚とは淡紅色である。東部西比利亞にて蕃殖し、春秋二季、本邦に渡來する。

〔六〕 姉羽鶴 *Grus virgo* (Linn.)

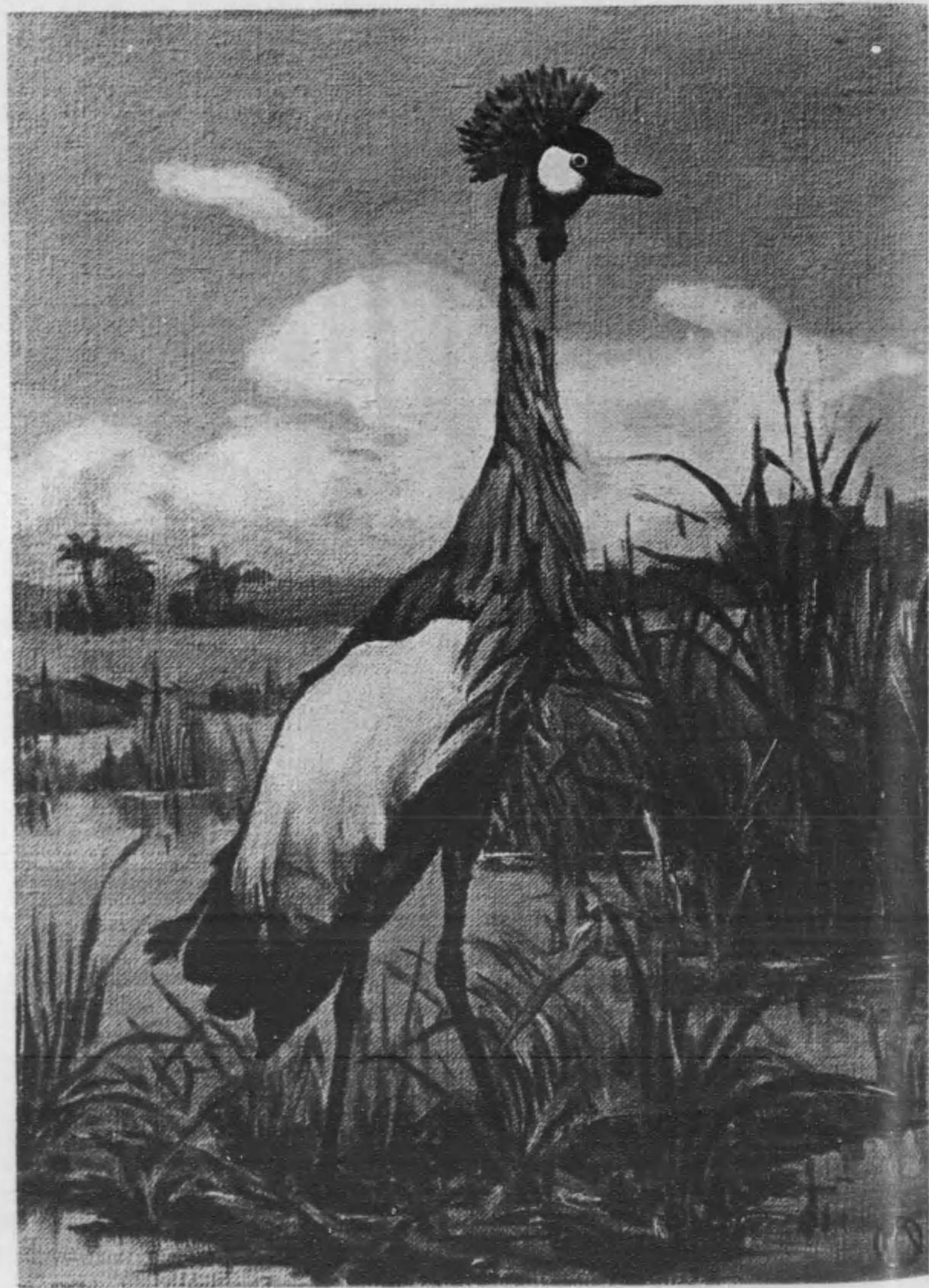


第三百四十七圖 第三千七百九十九番

英名を「デモイセレ、クレートン」(Demoiselle Crane) 又「ヌミチアン、クレートン」(Numidian Crane) といふ。小形の鶴にして、體長は二尺五寸許である。全身は灰白色にして、眼の後方には、純白色の長毛を生ずる。歐州の南部、北亞弗利加、亞細亞の東部、及び中央部の諸地方にて蕃殖し、冬季には本邦を始め、中央亞弗利加、及び印度に渡來するのである。

〔七〕 冠鶴 (Crowned Crane) *Balearica pavonina*

體は強壯にして、頸は中庸の長さあり。頭は大きく、額には、密生せる黒色の毛總を有し、後頭には、黄金色の剛毛より成れ



冠 鹤

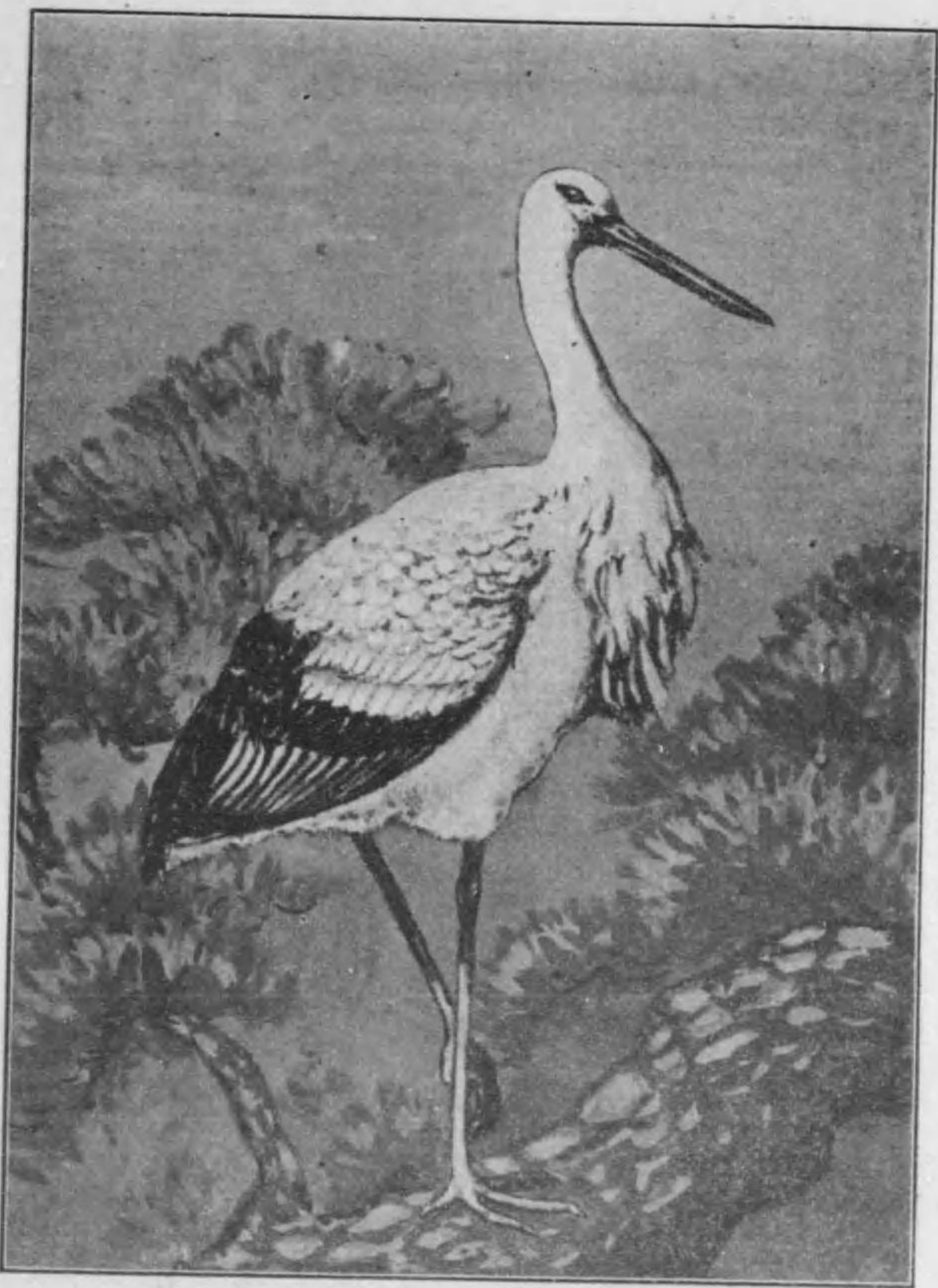
冠毛を有する。嘴は中庸の長さありて、圓錐状をなし、その先端は圓い。脚も趾も長く、稍強き爪を具へ、翼は甚だ廣く、尾はその先端がよく揃ふて居る。頸と前胸の羽毛とは長く、羽色は暗灰色を呈する。而して體長三尺有餘である。

この種は中央亞弗利加に産し、常に河岸を徘徊し、主として穀類を食する。歩行の際には、體をば直立し、背を曲ることなく、且つ冠羽を立つるのである。此鳥の奇習は、河の砂地に來るときは、必らず飛び上り、その際、翼を擴げて、踊るのである。而して地に下るときは、片脚づゝ更るゝ地につけ、二脚をば同時に下すことはないのである。常に一對にて棲むか、若くは數多群居するのである。

(五) 鶴科 (Ciconiidae)

體軀は大きく、殆んど三尺より五尺の高さがある。嘴は長く、伸直なるか、又は先端に於て彎曲し、口角は眼の半途に達し、鼻孔は嘴の基部に位する。脚は、蹠の上は裸出し、跗蹠部は長く、三趾は前向し、その基部に膜を有し、后趾はよく發達する。爪は短く、且つ鈍い。嘴は大きく、幅廣く、尾は短く、頸は長いのである。眼と嘴との間は裸出し、時には頭と頸との全部が裸出するものもある。下尾筒は、時には甚だ強壯にして、硬きものあれども、又時としては綿毛状のものがある。雌雄の羽毛は同様であるが、稀に季節的變化を

呈するものがある。



第三百四十八圖

且つ上方は開いた儘である。而して樹上又は岩上にありて、數個の卵を産む。卵は白色

この科には、約二十種ありて、主として熱帯地方に産する。常に嘴を叩きて、音聲を發するのである。その食物は、魚類、蛙、蛇、軟體動物、其他の小動物である。尤も或る種類にては、屍肉を食ふものがある。巢は樹枝より成り、

であつて、凡そ一ヶ月にして孵化するのである。雛の羽毛は、親鳥とは異り、多くは褐色である。

〔一〕 鶴こぶつ又こぶつ又こぶつる *Ciconia boyciana*, Swinhoe.

英名を「ジャパニース・ストーク」(Japanese Stork)といふ。大なる鳥にして、翼長は二尺二寸六分もある。全身白色なれども、手翳の若干の外翳は、一部灰白色をなせる。外肩羽と風切との他部は、皆黒いのである。眼の周圍の皮膚は、裸出して赤色を呈する。嘴は稍黒く、脚は赤い。この種は、往時我國に普通なりしが、今は殆んど盡きたのである。尤も朝鮮にては、今も尙少からずといふ。

〔六〕 フレーミンゴ科 (Phoenicopteridae)

體軀の大きさは、小形の鴛鳥乃至家鴨位であるが、頸と脚とが長い爲めに、身の丈は、高いのである。嘴は短く厚く、中央に於て下方に彎曲し、口角は額を越へて擴がることはない。上嘴は扁平にして、下嘴は甚だ深く、恰も箱と蓋とのやうに見ゆるのである。而して、上嘴は下嘴よりは、一層よく動くのである。而して兩嘴共に、その先端には、皮膚を有すれども、其他は皆角質である。脚は甚だ長き跗蹠部を有し、且つ腿は裸出して居る。前向せる三趾は短く、且つ蹠を有し、後趾は小さく、地に着かすして、時には之を缺くも

のがある。嘴は中庸にして、翼は短い。體は小さく、頸と脚とは、殊に長いのである。
本科のものは、兩半球の温暖地方又は熱帶地方の、淺水ある地方に産し、約十二種を有する。この科のものは、泥土を集めて、圓るき巢を造るのである。巢の基礎は、水中に入ること、一尺二寸六分もあつて、水面に出



づること、五寸乃至六寸八分に達し、直徑は巢の頂上に於て、一尺二寸六分に達するものもある。この巢の頂上に於て、親は頸をば背部の羽毛中に燃ち込み、脚をば折り重ね、その先端をば、尾後を超へて伸出しながら、坐つて居る。卵は一二個に被覆物がある。而して三十日若くは三十

第三百四十九圖

日以上にして、孵化するのである。孵化したる雛は、活潑であるが、始めは親鳥に因りて養はれるのである。而して體には、白色の綿毛を有し、嘴は伸直である。此科のものは、常に小形の水棲動物、及び水生植物をば、家鴨が餌を採ると同様の方法にて、採り取るの

である。肉は食用となり、羽毛は裝飾用となる。外鳥の形貌は美麗なるを以つて、歐洲にては、公園其他の場所に飼養して、風致を添ゆるに賞用せられて居る。(この種の分類については、涉禽類の總論に於て、述べて置いた通りである。)

〔一〕 フレイミングト Phoenicopterus antiquorum, L.

英名を「コンモンフレイミングト」(Common Flamingo) といふ。南歐羅巴より、亞弗利加及び印度に産する。羽毛は概して蔷薇色を帯びたる白色にして、風切は黒く、雨覆は深紅色である。常に沼地湖水及び河口に徘徊し、常に群居するのである。

〔七〕 鷺科 (Ardeidae)

體軀の小なるは、鶉よりは少しく大なる位であるが、大なるものは、四尺位の高さがある。嘴は伸直にして、硬く尖り、常に長いのである。上嘴の兩側には、鼻孔より嘴端に向つて、狭き溝あれども、決して嘴端に達することはない。而してこの溝の端の基部に、鼻孔を有するのである。また口角は眼下に位するのである。脚は跗蹠部は長く、且つ四趾も長い。而して後趾は強壯にして、地に着く。前方にある三趾中の二つの外趾は、基部に於て、短膜に因りて結合する。而して中趾の爪は、内側に齒狀部がある。翼は大きく、且つ幅廣く、尾は短い。頸は長く、休息するときにはS字狀に彎曲する。體は瘦せて、その側面は

平垣である。

この科のものは、約百種を含み、世界到る處に分布すれども、主として温暖地方に多く産し、常に河湖の畔に棲息する。巢は小枝より成り、樹上に置るれども、時には蘆葦中、若くは岩石上にあることがある。卵は數個にして、白色若くは着色を有すれども、斑點を有することなく、二週乃至三週、若くは三週乃至四週の間にて孵化する。雛は茸毛狀の飾毛を有し、誠に哀れむべきものであつて、親鳥に因りて保育せらるゝのである。この科のものは、常に魚類を食ひて、損害を與ふれども、また野鼠及び昆蟲類を食ふことは、有益である。

〔一〕 あをさぎ又みごさぎ *Ardea cinerea*, Linn.

英名を「コンモン・ヘロン」(Common Heron) 又「グレイ・ヘロン」(Grey Heron) といふ。大形の鳥にして、長さは三尺以上もある。背は銀灰色にして、翼は黒く、腹は白く、頸及び頭も白けれども、頭上の兩側と後頭とは黒く、黒色の長き冠羽を有し、頸の前面には、黒色の斑紋が縦列して居る。尤も幼鳥の頭上は灰色である。而して、この屬の尾翹は十二枚を有するのである。

この種は、到る處に棲息すれども、その蕃殖區域は、本邦、印度、南西比利亞、歐洲大陸、及

び英國にまで擴がつて居る。常に魚類、蛙、鼠、水鳥の雛を食ひ、枝を集めて、樹上に巢を造るのである。

〔二〕 猩々鷺又あまざぎ *Ardea coromanda* (Bodd.)

英名を「イースタン・ブツフ・バックド・ヘロン」(Eastern Buff-backed Heron) といふ。翼長は七寸五分乃至八寸四分である。嘴は黄色にして、蕃殖期に於ける羽毛は、頭、頸背、胸、肩羽は栗色を帯びたる淺黄色である。

この種は、夏季本邦の南部に渡來すれども、北海道には産せざるのである。而してその分布は、印度、錫蘭、バルマ、交趾支那、南部支那、瓜哇、ホルネオ、セレベス、フィリピン諸島である。

〔三〕 大鷺又もじろ *Herodias timoriensis* (Cuv.)

英名を「グレート・ホワイト・エグレット」(Great White Egret) といふ。純白色をなせる本邦産の鷺中の最大なるものにして、翼長は一尺三寸乃至一尺五寸に達する。嘴は、夏は黒く、冬は黄色である。蕃殖期に於ては、頭と胸とは、頸羽を生することなきも、肩に於ては、よく發達せる簔羽を有するのである。また尾翹は十二枚である。

この種は、夏季本邦に渡來し、亞細亞、亞弗利加及び歐洲の南部に産するのである。

〔四〕 こももじろ *Ardea alba modesta* (J. E. Gray)

前種とよく似たれども、唯體軀は小さく、翼長は一尺三寸以下である。夏季本邦に渡來し、南部西比利亞、印度、パルマ及び支那にて蕃殖するのである。

〔五〕 白鷺又こさぎ又いつばい(一杯鷺) *Ardea garzetta*, Linn.

英名を「リットル、エグレット」(Little Egret) といふ。體の大きさは、大鷺の半分位で、翼長



ぎさこ 圖十五百三第

は八寸四分乃至九寸二分である。體は小なるも、嘴は割合に長く、夏も冬も、嘴の色は黒い。而して、體は純白色である。この種の肉は、ゴキサギ等と同じく、美味である。常に本邦の南部に棲息し、その蕃殖區域は、波斯、印度、パルマ、支那、南歐洲及び本邦に迄擴がつて居る。

〔六〕 中鷺又しまめぐ

5 *Ardea intermedia*, Wagler.



ぎさうち 圖一十五百三第

英名を「ブルームド、エグレット」(Plumed Egret) といふ。翼長は九寸七分乃至一尺許である。嘴は、夏は基部黄色なれども、先端に至るに従ひ黒い。而して冬に於ては、全く黄色となるのである。總身は純白色にして、夏は背部と胸とに、長き簑羽を生じ、就中背部のものは、尾の先端より、五寸程も伸出することがある。足と趾とは黒く、趾は甚だ長い。

この種は、夏季本邦到る處に渡來し、冬季には、南方の暖地にも

産するのである。

〔七〕 よしこゝる又ぼんのうさぎ又ばんづる(方言)又うまをひ(方言)

方音 *Ardetta sinensis* (Gmelin.)

英名を「オリエンタル、リットル、ビッターン」、*Oriental Little Bittern* といふ。小形の鳥にして、翼長は四寸二分乃至四寸四分である。腋下は白きか、若くは淺黄色にして、脛部は完全に羽毛を有する。この種は次の二種と共に、尾翹は十枚にして、内趾は外趾よりも長いのである。

この種は本邦到る處に産し、また印度、錫蘭、マレイ半島、マレイ群島及び支那に棲息するのである。

〔八〕 大よここゝる *Nannocnus eurhythmus* (Swinhoe.)

英名を「シュレンクス、リットル、ビッターン」(*Schrenck's Little Bittern*) といふ。小形の鳥にして、翼長は四寸二分乃至四寸六分である。腋下は灰色にして、脛部には羽毛を有するのである。

この種は、黒龍江溪谷及び北部支那にて蕃殖し、秋季には、本邦及び南部支那に渡來するのである。



第三百五十二圖 かんさのこゝる
(After Herman and Owen)

〔九〕 さんかのこゝろ *Botaurus stellaris* (Linn.)

英名を「ビッターン」(Bittern)といふ。大形の鳥にして、體長は二尺三寸五分乃至二尺五寸に達し、翼長は一尺以上に達する。頸は長く、脚も長きを以つて、大きく見ゆる。嘴は黄灰色にして、その背面には褐色部がある。脚は黄灰色にして、趾は長い。眼は黄く、羽色は鶉の羽毛に似て居る。また手翹には横斑を有する。北海道には、夏季のみ棲めども、本邦の南部には、常に棲息し、その蕃殖地は、本邦より蒙古の北部と南部、其他の亞細亞大陸、歐羅巴及び英國に亘つて居る。常に蘆葦地に徘徊し、夜出で、軟體動物、蛙、小形の蛇、蜥蜴、カハネズミの類、及び魚類を食する。巢は止水に近き蘆葦地にありて、蘆葦及び羽毛より成り、一産に三乃至五卵を産む。卵は淡藍灰色である。

〔一〇〕 みづこゝろ又いばさぎ又やまいば又かしまこゝろ

Gorsachius goisagi (Temm.)

英名を「ジャバニース、ナイト、ヘロン」(Japanese Night Heron)といふ。中庸大の鳥にして、翼長は八寸四分乃至八寸八分である。腕翹と臂翹とは、暗灰色にして、先端は栗色である。尾翹は十二枚ありて、腋下は條斑を有する。この種は、本邦に特有なる鳥にして、また臺灣にも産するのである。

〔一一〕 みのこゝろ又ささこゝろ *Nycticorax javanicus stagnatilis* (Gould.)

英名を「グリーン、ヘロン」(Green Heron)又「オーストラリアン、マングローブ、ヘロン」(Australian Mangrove Heron)といふ。翼長は六寸三分乃至六寸九分である。嘴は伸直にして、風切は灰色で、腋下も亦灰色である。而して成鳥は、美麗なる蓑羽を有する。また本属の尾翹は十二枚である。夏季本邦に渡來し、印度、錫蘭、パルマ、マレイ群島及び南支那に産するのである。

〔一二〕 あかがしらこゝろ *Nycticorax prasinoseles* (Swinhoe.)

英名を「チャイニース、スクラツコ、ヘロン」(Chinese Squacco Heron)といふ。翼はその長さ六寸七分乃至七寸五分であつて、白色である。頭と頸背と頸側とは、栗色にして、成鳥には、背と胸とに、帯緑黑色の蓑毛を有する。この種は、支那の南部及び交趾支那に棲息し、嘗つて本邦にても捕へたことがある。

〔一三〕 銅冠せうかん又こゝろさぎ又ほしこゝろ(俗稱)なべしゆい(黒田長禮氏に據る)
Nycticorax nycticorax (Linn.)

英名を「ナイト、ヘロン」(Night-heron)又「グレー、ナイト、ヘロン」(Gray Night Heron)といふ。

雛は全身に白斑を有する。故に「ホシゴキ」ともいふ。體長は約一尺九寸三分である。翼長は九寸二分乃至一尺二寸四分にして、頭頂と頸背とは黒くして、緑色の金屬光澤を有



第三百五十三圖

し、嘴の基部の周圍は白く、冠羽は二三個、若くは四個の雪白色の羽より成る。嘴は長く、且つ尖りて黒く、背は緑色の光澤を有する。黒色にして、頭と翼と尾とは灰色にして、體下は白く、脚は赤黄色である。
本邦の南部には、夏季普通に見る鳥なれども、北海道には産することはないのである。その蕃殖區域は、本邦より支那、バルマ、印度、

波斯、歐洲の南部及び亞米利加に亘つて居る。常に沼地、池などを徘徊し、魚類、大なる昆蟲、蠕蟲、カハネズミを食ふのである。また群をなして樹上に巢を造り、四五個の淡き緑藍色の卵を産む。樹上に靜止するときは、頸を引き入れ、以つて駝背狀をなすのである。

〔八〕 篋鷺科 (Plataleidae)

體軀の大きさは、鳥大より鶖大位である。上嘴の兩側に於て、鼻孔より嘴端に至るまで、狭き溝を有する。而して朱鷺屬にては、嘴は殆んど圓筒狀にして、先端に至るに従ひ、漸々細くなり、且つ下方に曲つて居るが、篋鷺屬にては、嘴は幅廣く、扁平にして、篋形である。脚の跗蹠部は長く、後趾はよく發達して、地に着く。前趾は總べて、その基部に膜を有する。翼は大きく、先端に於て圓るくなり、且つ尾は短いのである。頭は小さく、頸は長いのである。

羽毛は、雌雄に因りて、相違することなれども、羽毛の生へ始めの雛は、成鳥とは異つて居る。また時には、季節に因りて、羽毛を變化するものがある。顔若くは頭には、常に幾分か裸出せる皮膚を有するのである。本科には約三十種ありて、廣く地球上に分布すれども、主に溫暖なる地方に産するのである。概していふときは、群居を好み、常に沼地を徘徊し、昆蟲、甲殼類、小魚を食ひ、また有害動物を食ふのであるが、少しは植物質を

も食ふのである。而して本科のものゝ肉は食用となるのである。

常に樹上に於て、小枝等より成れる巢を造れども、時には岩石上、蘆葦中又は地上に



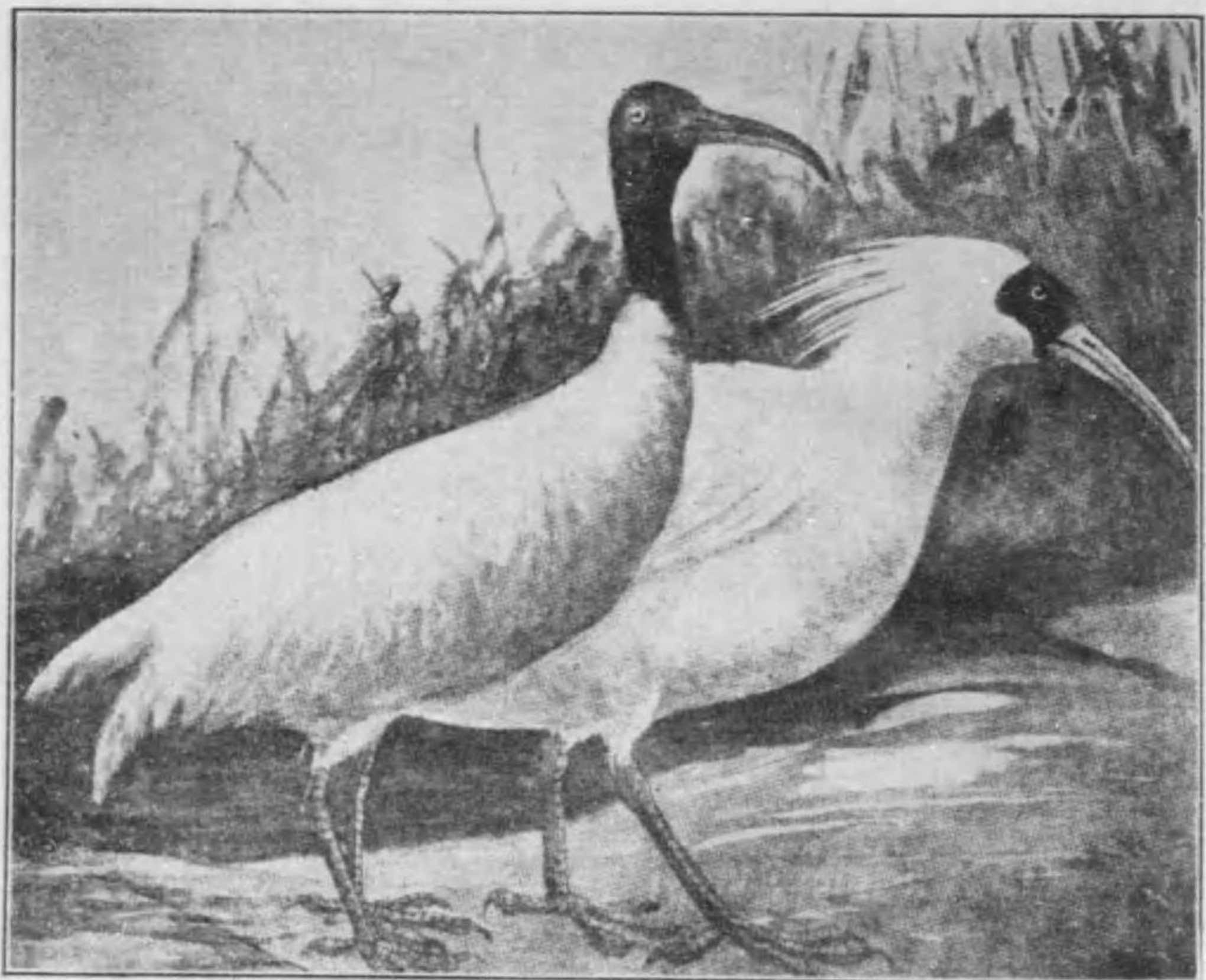
ぎさらへ 圖四十五百三第

巢を造り、數個の卵を産む。卵は白色の地に、斑點あるか、或は淡藍色である。而して凡そ三週間にして孵化し、雛は綿毛を有し、嘴は短く、誠に哀れなる状態にして、親鳥に因りて養はれるのである。

〔一〕 鶺鴒 *Platalea leucorodia*, Linn.

英名を「コンモン・スプーンビル」(Common spoonbill)といふ。

翼長は一尺三寸許で、嘴は六寸六分許である。眼の周圍にある、皮膚の裸出部は、黄色にして、喉の裸出部も亦黄色である。額の羽と頬羽とは、眼よりも遙かに、前方に至るまで、



きと(右) きとろく(左) 圖五十五百三第

伸びて居る。羽色は白く、老鳥にては、黄色を帯びたる冠羽を有するのである。この種は、北亞弗利加、印度、錫蘭に棲息し、冬季は臺灣及び南支那に來り、夏は、歐洲、南比利亞及び本邦に渡來するのである。

〔二〕 くろつらへらさぎ

Platalea minor, Temm. & Schl.

英名を「スウインホース・ブラックフェイスド・スプーンビル」(Swinhoe's Black-faced Spoonbill)といふ。前種よりも小さく、眼の周圍にある皮膚の裸出部は、黒い。また額と頬との羽は、眼より前方に達せずして、その色は黒いのである。

の種は、臺灣及び本邦の極南部に、普通に見る鳥である。

〔三〕 朱鷺 *Ibis nippon*, Temminck.

英名を「ジャバニース、クレストッド、イビス」(Japanese Crested Ibis) といふ大なる鳥にして、翼長は一尺三寸四分である。顔面は裸出し、色は深紅色である。嘴は黒く、長さは五寸六分乃至六寸三分である。羽色は純白色に、深紅色を帯びて居る。幼鳥にては頭冠羽、頸及び背部は灰色である。

この種は本邦の南部には四時棲息し、冬は朝鮮、南支那の海岸及びハイナンに渡るのである。

〔四〕 くろこぎ 又くまら *Ibis melanocephala* (Latham.)

英名を「ホワイト、イビス」(White Ibis) といふ大なる鳥にして、翼長は一尺二寸五分乃至一尺九寸である。前種よりも稍々小く、頭より頸にかけて裸出部を有し、その色は黒色であるが、嘴と脚とも、亦黒いのである。羽色は、純白にして、成熟せるものにては、肩に灰色の裳羽を有する。この種は、支那等には、四時棲息する鳥にして、本邦には夏季渡來するのであらうと云はれて居る。

第七目 水禽類又游禽類 (*Natafores*)

體軀は肥大にして、腹部は舟底狀である。脚は短く、遙かに體の後方に位し、三趾は前

向し、一趾は後向する。趾間には唯前方に向へる三趾のみに、蹼を有するものあれども、或は鶉の如く、前趾の外に、後趾にも蹼を張れるものがある。また、鷓鴣かじやうの如く、趾は瓣狀をなし、蹼は頗る退化するものがある。されば種屬に因り、生活の境遇に適應して、趾及び蹼の形狀には、變化を見るものなれども、一般に蹼が發達し、之を櫂の如く使用して、水中を游泳し、或はよく水中に沈むことを得るのである。

水禽類の飛翔力は、概して強けれども、時には「ベングイン」の如く、翼は鳍狀に退化し、尾も亦短く、僅に剛き羽毛を有するに過ぎざるを以つて、水中を潜行するには、頗る巧妙を極むと雖も、全く飛翔すること能はざるものがある。

水禽類は、常に水中に棲息するを以つて、羽毛は密生して、體温の放散するを防ぐのみならず、脂肪腺も頗る發達し、盛んに脂肪を分泌する。鳥は時々その嘴にて、之をば體の全面に塗抹して、水分を弾じき、爲めによく體温の放散を防ぐ作用を營むのである。嘴の形狀は、習性に因り、異同を見るものにして、その扁平となり、且つ柔軟なる皮膚を以つて被はるゝものにおいて、泥中を探りて、蠕蟲其他の水棲動物、若くは種子及び種々の植物質を食するのである。また嘴が非常に曲り、且つその縁邊に缺刻を有するものにおいて、主に魚類を食ふのである。

水禽類は、常に群をなして、湖河、沼澤、海岸若くは大洋面に棲息し、多くは渡鳥である。この類の肉と卵とは、食用に供するもの多く、綿毛は褥に入れて防寒用となり、鳥糞の孤島に堆積したるものは、遂に糞化石となり、廣く肥料として使用せらるゝのである。而して、この類の保護鳥には左の種類がある。

(一) 禁獵鳥類(無期保護鳥)

- (1) 鷗カモメ
- (2) 鰐刺カササギ
- (3) 阿比アビ
- (4) 海雀ウミスズメ
- (5) 善知鳥チンギス
- (6) 水風鳥ミヅカザリ

(二) 獵期外禁獵鳥類(有期保護鳥)

- (1) 雁ガシ
- (2) 鳧カモ

水禽類を分ちて、次の四亞目として記述する。

第一亞目 扁嘴類又板嘴類 (Lamellirostres)

體は肥大し、翼の大きさは尋常である。嘴は扁平、且つ柔軟にして、觸覺鋭敏である。外、その側縁には、櫛齒狀の缺刻を有し、之を泥中に挿入して、餌食を探るとき、泥水を漉過する作用がある。また嘴の先端には、鋭るごき爪狀の突起を有するのである。四趾中の三趾は、前向して趾先に至るまで、蹼を張り、後趾は分離するも

のと、また膜を具ふるものがある。

第二亞目 全蹼類又全蹠類 (Steganopodes)

體軀は大きく、頭は小さく、翼はよく發達し、飛翔は巧妙である。また中には、翼が長くして、尖れるものがある。後趾は内向し、前趾と共に、蹼にて連結せらるゝのである。脚は極めて短小にして、體の末端に附着し、游泳すること極めて巧みである。嘴は長く、伸直にして、上嘴の末端に至りて、鈎曲するのである。肉は食ふに堪へざれども、糞は最良の肥料である。

第三亞目 長翼類 (Longipennes)

翼は長大にして、末端尖り、飛翔は巧妙である。上嘴は大に鈎曲せるものがある。前向せる三趾は、蹼にて連結せらるゝも、後趾は蹼にて連結せらるゝことなく、或は發育不完全のものがある。

第四亞目 短翼類 (Brevipennes)

翼は、尾と共に極めて短小にして、飛翔の用をなすことはない。或は翼には、本羽を有せずして、鱗片狀の羽毛を有するものがある。然れども、翼をば、魚鱗の如く使用して、水中を潜入すること巧みである。趾には蹼を具へ、後趾は之を缺くに

第一亞目 扁嘴類又板嘴類 (Lamellirostres)

(一) 鴨科 (Anatidae)

體軀の小なるは鳩位にして、大なるものは飼養せる鵞位である。嘴は中庸の長さであるか若くは短くして、常に幅廣くあるが、角質の代りに皮膚を以つて被はれ、其先端は剛く且つ爪状をなすのである。而して嘴の側縁には、櫛齒状の缺刻を有する。口角は額よりは遙かに後方に達することはない。跗蹠部は、中庸の長さなるか若くは短く、三趾は前向し、皆蹠を有し、後趾は小さく、且つ地に着かない。翼は中庸の長さなるか若くは短いのである。體軀は重々しく肥大し、頸は長い。尾は短く、多くの羽より成つて居る。羽毛は甚だ滑らかにして、色彩には大に變化があるが、腕蹠に顯著なる條斑を有するものが常である。雌雄は、その羽毛を異する場合が甚だ多い。而してかゝる種類にては、一例外はあるが、一雛が卵より孵化せる後數週間は、雄の羽毛も雌の羽毛と、多少類似して居る。而して毛が抜け換る際風切羽は、常に一齊に脱落するのである。幼鳥は、成長せる雌と似るか、或は特有の羽毛を有するものがある。

この科のものは、約二百種を含み、地球上到る處に棲めども、多くは温帯及び寒帯に産し、且つ渡り鳥である。常に廣濶なる地方を好み、多くは淡水に來るのである。巢は植物質より成り、これに交ゆるに、雌の羽毛を以つてして、内面を被ふのである。普通、巢をば地上に置けども、時には穴中に置き、又樹木の穴、岩石間の罅隙、若くは他鳥の舊巢に産卵するものがある。卵は常に數個にして、決して二個より少きことなく、卵殻は白色若くは青白色にして、斑紋を有することはない。而して凡そ三週間乃至六週間にて、孵化する。この科のものゝ多くは雜食するものにして、小形なる動物の外に、陸生及び水生の植物穀粒等を食べ、その肉は食用として美味なるもの多く、又綿毛、本羽は種々の用途に供せらるゝのである。この科を分ちて、鴨亞科、カハアイサ亞科、雁亞科、鵞亞科の四亞科として區別せられて居る。

【一】 鴨亞科 (Anatinae)

この亞科のものは、跗蹠部は、中趾よりも短く、嘴の基部の幅と厚さとは、相等しきか、或は厚さよりは幅の方が餘計である。

(一) 眞鴨又あをくび *Anas boschas*, Linn.

英名を「ワイルドダック」(Wild Duck) 又「マラード」(Mallard) といふ。翼長は八寸八分乃至

九寸二分である。雄は頭と頸とは輝ける緑色にして、翼下の羽毛と、下の雨覆とは白色なれども、大雨覆は、黝色にして、その末端は黒色である。胸は栗色で、背は天鵝絨様の黒色にして、尾の中央にある四枚の本羽は、半圓形をなし、その末端は、上方に捲曲して、帯緑黒色である。雌の羽毛は、淡黒色にして、黒斑を有する。

この種は、本邦の南部には、冬季來遊するのみなれども、北海道、千島、カムチャツカには多い。又その蕃殖區域は、稀に北極圏内に達するのがある。常に主として水棲の昆虫、蛙、魚仔を食すれども、成長せる魚を、食せざるのが常である。巢は蘆葦中にありて、十一个若くは十二個の、淡緑色の卵を産むのである。

〔二〕 鶩あひろ

眞鴨を飼養して、變化したるものにして、體軀は肥大し、翼は短小となつて居る。多くの場合に於ては、飛翔することは出来ない。卵は、鶏卵よりも大きく、殻は白色である。之を食用に供すれども、稍泥臭を帯びて居る。肉は頗る脂肪に富み、鶏肉の如く美味ではない。羽毛は、蓐及び椅子等の心に填充することが出来るのである。これには、次の品種がある。

〔一〕 北京鶩 (Pekin Duck)

〔二〕 ルーアン鶩 (Rouen Duck)

〔三〕 アイルスメリー鶩 (Aylesbury Duck)

〔三〕 おかよこがも *Anas strepera*, Linn.

英名を「ガッドウォラル (Gadwall)」といふ第九乃至第十一の腕蹼の外翹は、殆んど白色である。この鳥は冬季稀に本邦の南部に渡來すれども、北海道には、産することはない。而して、東西兩大陸の極地に於て、蕃殖するのである。

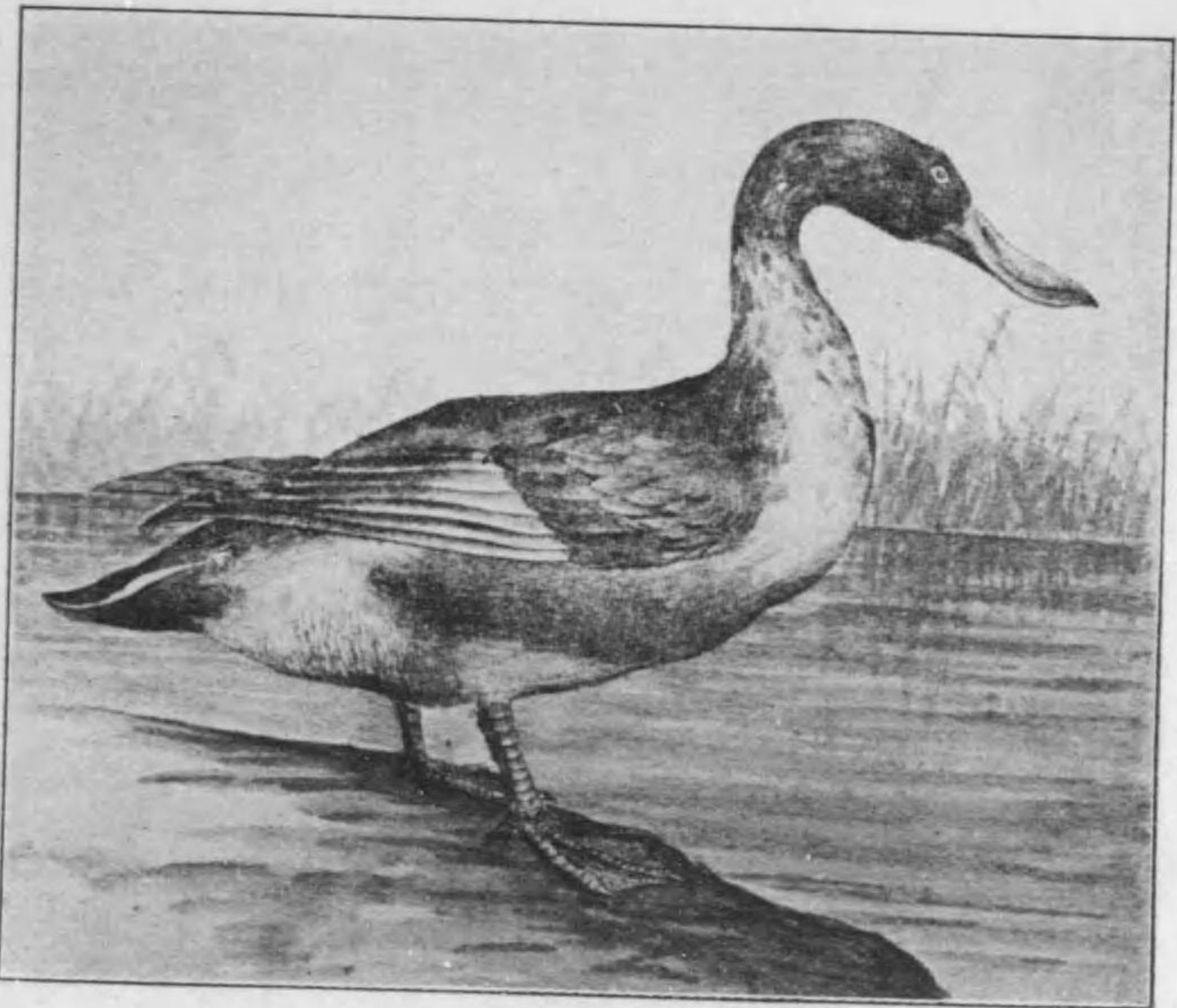
〔四〕 くちがも又はしびろ

がも *Spatula clypeata* (Linn.)

英名を「シアブラー」(Shoveler)といふ。嘴は、先端に於て幅廣くなり、匙形であつて、上嘴は下嘴を被ふのである。頭と頸とは、光澤ある緑色にして、胸は純白で、横腹は栗色である。この種は、冬季本邦に來遊すれども、北海道には、少い。兩



第三百五十六圖 鴨 (Pekin Duck)



もがるびしは 圖七十五百三第

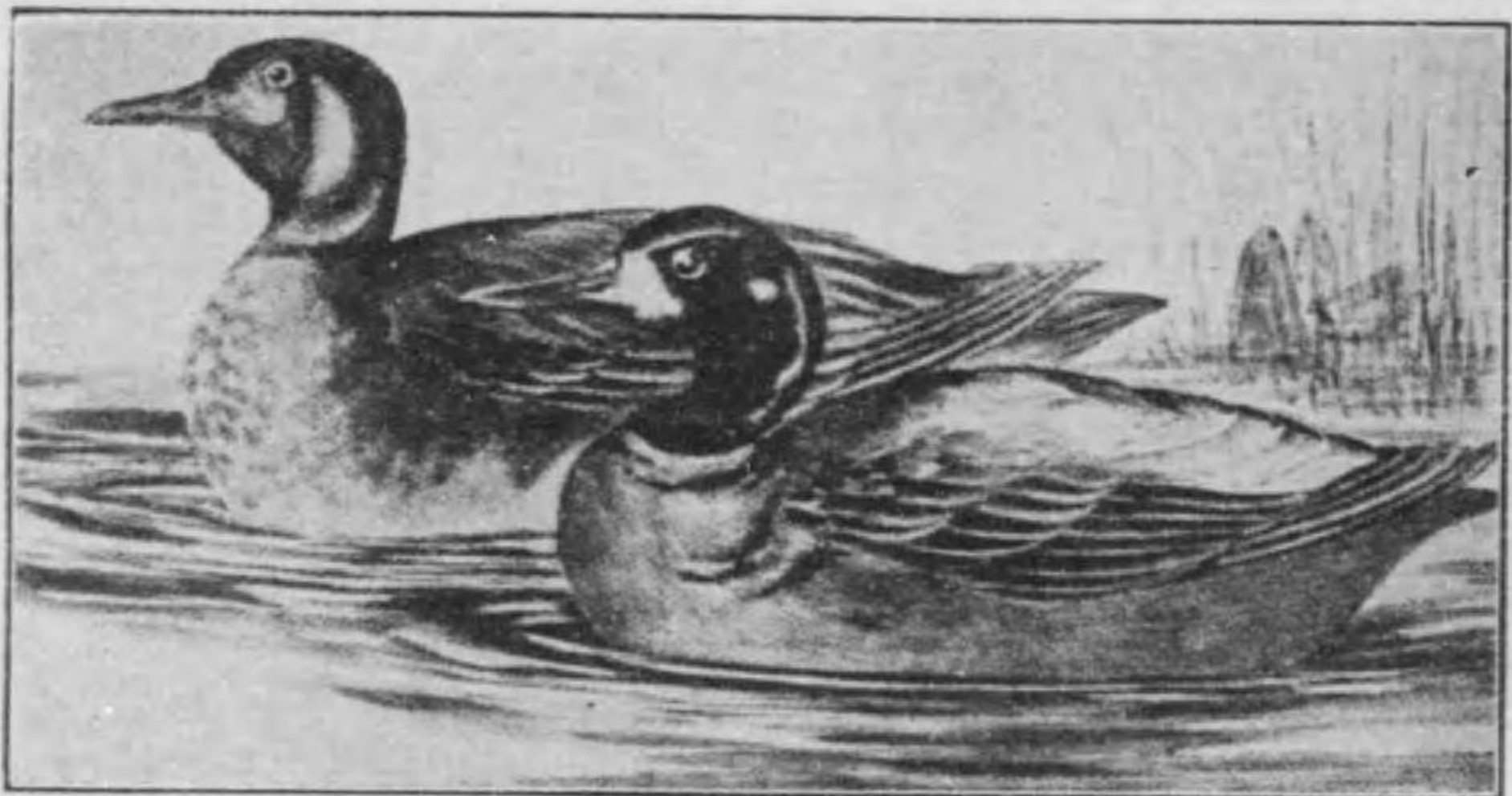
大陸の寒帯に於て蕃殖し英國にても蕃殖する。巢は長き草中、又は沼地にありて、一産に八乃至十四卵を産み、卵は緑色を帯びたる淺黄色である。

[五] かるがも *Anas*

zonorhyncha, Swinhoe.

英名をダスキイ、マラード (Dusky Mallard) といふ。翼長は九寸二分である。嘴は黒色にして、その先端は黄色である。腋下の羽毛と下雨覆とは、白く、大雨覆は茶褐色にして、その末端は黒色である。この種は、四時本邦に棲息し、沼澤地にて産卵する。その分

布は、東部西比利亞蒙古、及び本邦に擴がつて居る。



もがりのし 圖八十五百三第

[六] 小鴨 *Nettion crecca* (Linn.)

英名を、コンモン、チ、イール (Common Teal) といふ。小形の鳥にして、翼長は僅に六寸三分である。頭と頸とは、輝ける栗色にして、眼の周圍には、綠色の一廣帯を有する。腕蹼の外翹は、天鵝絨狀の黒色なれども、腕蹼の内部の三枚の外翹は、金屬光澤を帯べる綠色である。卵は帶黄白色にして、一産に十四個を産むところが、ある。この種は冬季、本邦の南部に渡來し、千島及びカムチヤツカにて蕃殖し、又歐亞の寒帯地方にて蕃殖するのである。

[七] こもゑがも 又あじがも *Anas formosa,*

Georgi.

英名を、スペクタクルド、チール (Spectacled Teal) といふ。翼長は六寸五分乃至六寸七分である。嘴は甚だ短い。雄は頬に、巴狀の紋を有する。冬季、本邦の南部、及び支那に渡來するものにして、東部西比利亞にて蕃殖するのである。

〔八〕 このりがも又をきのけんでう *Histrionicus*

Histrionicus, (Linn.)

英名を「ハーレクインダック」(*Harlequin Duck*)といふ。成長せる雄にては、冬季及び春季に於て、體に青黒色の羽毛を有し、頭と頸とに白斑を雜へ、頭頂の兩側には、鮮明なる赤茶色の幅廣き條を有し、胸の兩側部も亦赤茶色にして、其色彩は鮮明である。此種は冬季本邦に渡來し、千鳥には多く棲み、兩大陸の極地にて蕃殖するのである。

〔九〕 しまあじ *Querquedula circa* (Linn.)

英名を「ガーガネー」(*Garganey*)といふ。小鴨の如き小形の鳥にして、腕蹼は小鴨の腕蹼

よりも、その色淡く、殆んど金屬性の光澤がない。冬季本邦に渡來すれども、至つて稀れである。その蕃殖區域は、歐羅巴、南部西比利亞を経て、太平洋沿岸地に擴がつて居る。

〔一〇〕 をしごり又をしがも (米譯) *Aex galericulata* (Linn.)

英名を「マングリンダック」(*Mandarin Duck*)といふ。雄の羽毛は、頗る艶美にして、臂蹼の一對は、直立して左右相對し、その下部は瑠璃色にして、後側には、少しく黒色部を有するのである。雌の臂蹼には、少しく瑠璃色をなせる部分あれども、雄に見るが如く、直立して居ない。雌雄共に、手蹼の外側には、銀灰色の部分をも有するのである。この種は常に



第三百五十九圖 おしごり

本邦の南部に棲息し、また中央支那及び南部支那にも産するのである。

〔一一〕 頬白鴨 *Clangula glaucion* (Linn.)

英名を「ゴールデンアイ」(*Golden Eye*)といふ。頭部と頸とは、

雄の冬羽にては、眞黒色なれども、他の季節に於ける色と、雌と雖とでは、褐色である。頬には、白色の圓斑を有する。背の色は、黒色であつて、中央の腕蹼は白色である。また上嘴の側方に生せ

る羽毛は、鼻孔より、約四分二厘以内に達しないのである。この種は、冬季本邦に渡來し、東京灣に多いのである。而して、東西兩半球の極地に蕃殖するのである。

【一二】 こほりがも *Clangula hyemalis* (Linn.)

英名を「ロングテイルドダック」(Long-tailed Duck)といふ。成長せる雄は、中央の尾翹は甚だ長く、其末端は尖鋭である。また黒色なる嘴の周圍には、淡紅色帯を有し、冬季の羽毛は、頭、頸、腹等は白色なれども、夏季に於ては、これらは煤色である。この種は千島及びカムチャツカの海岸に普通にして、東西兩半球の極地にて蕃殖するのである。

【一三】 くろがも *Oidemia americana*, Sw. & Rich.

英名を「アメリカンブラックスコーター」(American Black Sooter)といふ。成長せる雄の嘴は、その基部にて膨れ、その半は黄色に、末端と縁邊とは黒色である。腋下は暗色にして、翼には白色部がない。千島にて蕃殖し、冬季は本邦の海岸に來るのである。

【一四】 びらうごきんくろ *Oidemia fusca stejnegeri* (Bidgway)

英名を「ベルベットスコーター」(Velvet Sooter)といふ。成熟せる雄の嘴の基部は隆起し、この部と嘴根とは、黒色にして、嘴の側方は、赤色を帯びて居る。東西兩半球の極地にて蕃殖し、冬季本邦に渡來するのである。

【一】 かはあいさ亞科 (Merginae)

【一】 かはあいさ *Mergus merganser*, Linn.

英名を「グウサンダー」(Goosander)といふ。頭と背部とは、帶綠黒色にして、その他は主に淺黄色である。冬季本邦に渡來し、千島及び北海道に産する。この種の蕃殖區域は、露西亞及び西比利亞の極地である。常に魚類を食ふのである。

【二】 うみあいさ *Mergus serrator*, Linn.

英名を「レッドブレストッドマーガンサー」(Red-breasted Merganser)といふ。前種よりは小さく、頭は帶綠黒色にして、著明なる冠羽を有する。湖水や河に來りて、魚を取るために、よく潜水するのである。而して嘴は、鋸齒狀の缺刻を有し、鰻の如きものでも、容易に啄み得るのである。千島、其他東西兩半球の極地に近き地にて蕃殖し、冬季は、本邦に渡來するのである。

【三】 みこあいさ *Mergus albellus*, Linn.

英名を「スミウ」(Smew)といふ。中央の腕翹は暗色にして、その先端には、狭き白色帯を有する。冬季、本邦に渡來し、極地に介在する地方にて、蕃殖するのである。

【三】 雁亞科 (Anserinae)

頸は長く、嘴は前方に至るに従ひ、細まり、その末端は、剛いのである。脚は短く、體の後部に位し、且つ中趾よりも長い。

〔一〕 まがん又かりがね *Anser albifrons* (Scop.)

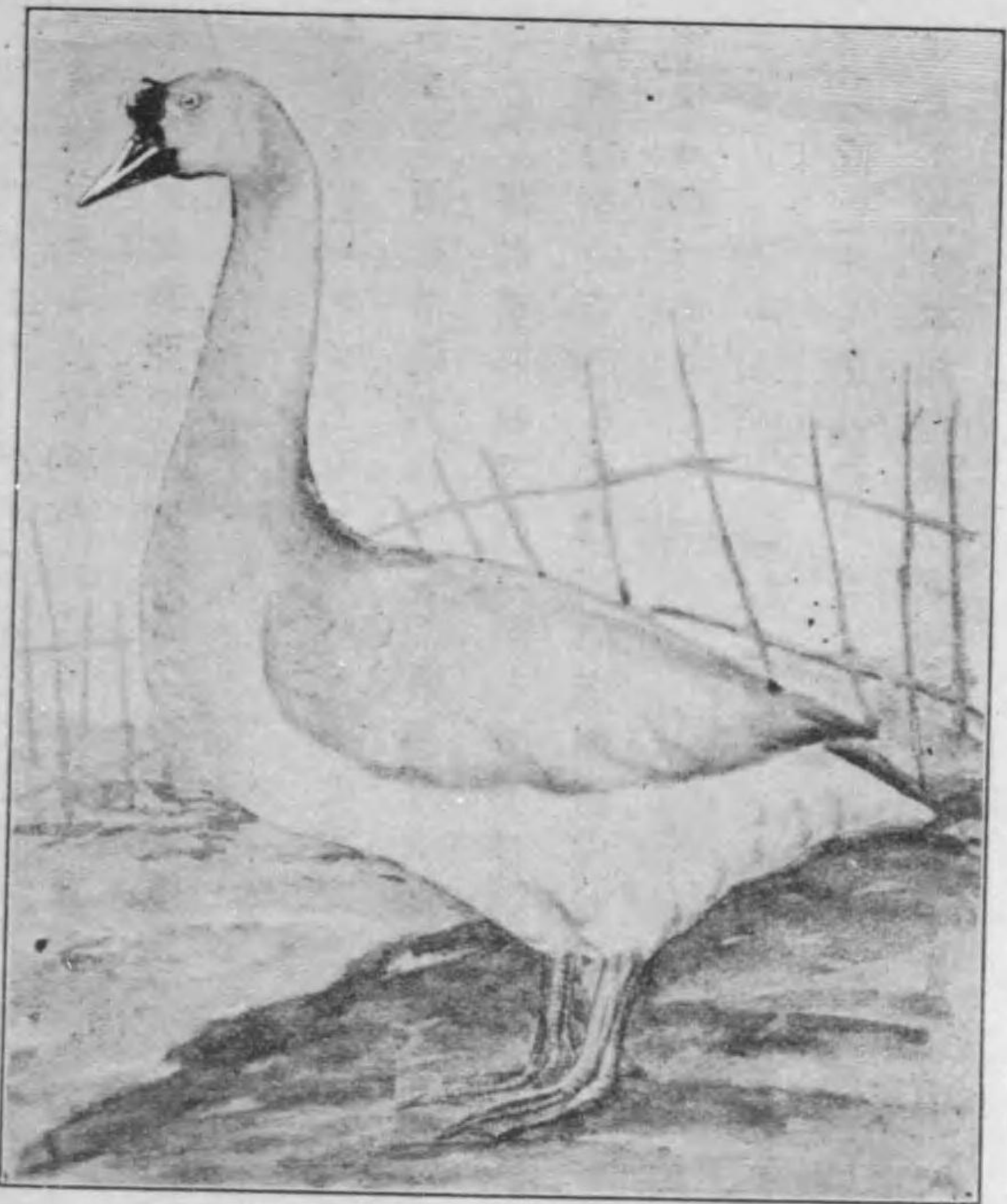
英名を「ホワイト、フロンテッド、グウス」(White-fronted Goose)といふ。菱喰ひしくより小さく、全

長二尺三四寸である。嘴と脚とは共に黄色にして、體の上
部は茶褐色である。下面殊に、
胸部には、黒斑を有するので
ある。額は白きも、白色部は眼
に達せざるのである。尾翹は
十六枚を有する。

この種は、秋季本邦に渡來
し、春は北方へ去るのである。
その蕃殖地は、西比利亞及び
北歐羅巴の凍原である。

〔二〕 酒顔雁 *Anser*

cynoides, Gmelin.



第三百六十六圖 がつてう

英名を「チャイニーズ、グウス」(Chinese Goose)といふ。顔部は黄赤色を帯び、頸側は略白く、
脚は橙黄色にして、嘴は黒色である。西比利亞の東部に於て、蕃殖するのである。

〔三〕 鶩鳥

酒顔雁を飼育したものである。

〔四〕 黒雁 *Anser nigricans*, Lawr.

英名を「パシフィック、ブレンド、グウス」(Pacific Brent Goose)といふ。嘴、頭、頸、脚は黒く、喉
に三日月形の白色輪を有する外、全身は灰白色にして、尾筒部は白いのである。この種
は、冬季本邦の海岸に渡來し、北米の西部に、多いのである。

〔五〕 四十雀雁 *Anser hutchinsii*, Swains. & Rich.

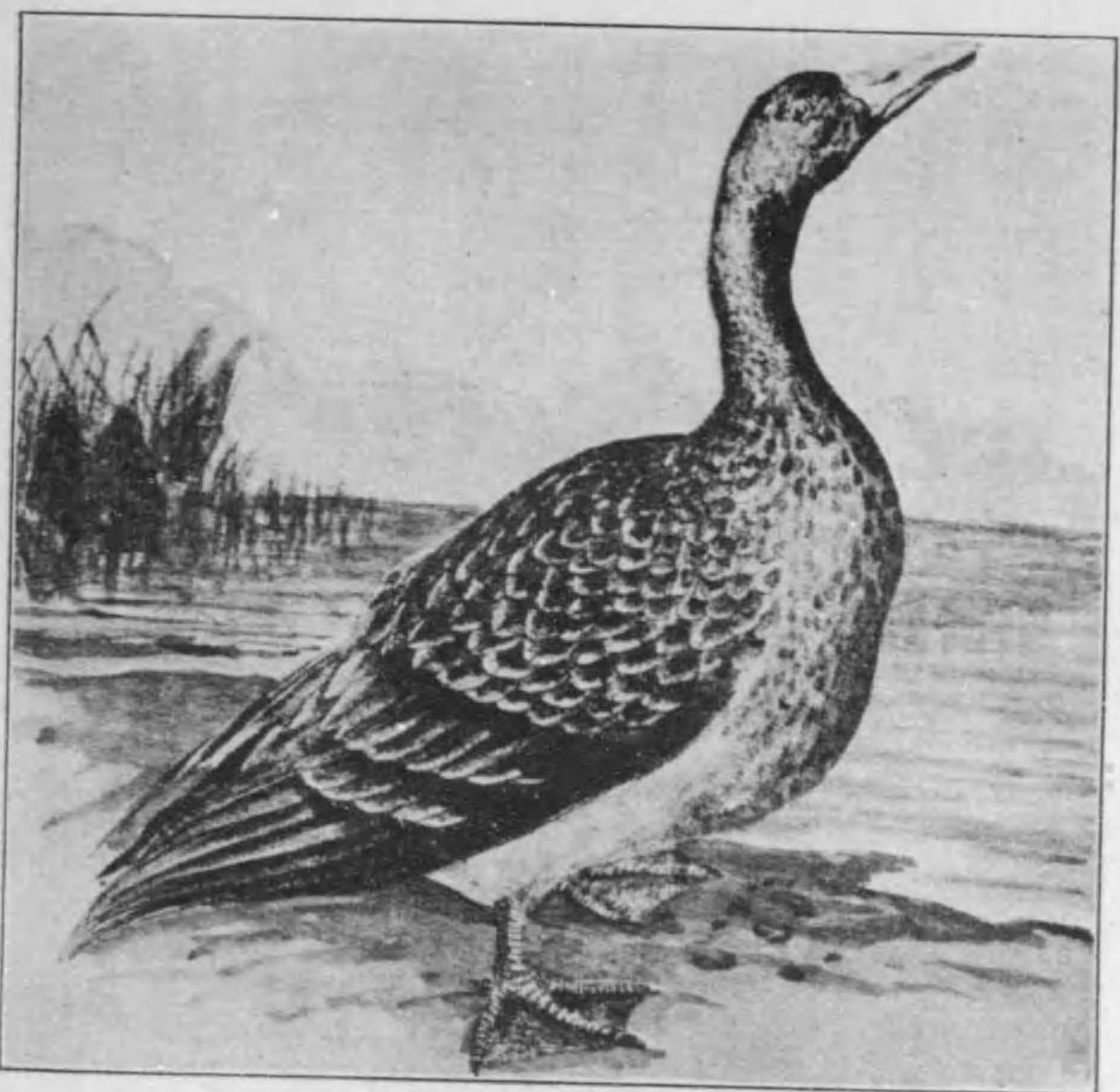
英名を「ハッチンス、バーナクル、グウス」(Hutchin's Bernacle Goose)といふ。頬の邊は四十
雀の如く白く、頭と頸と尾とは黒く、上尾筒は白く、其他の體部は、灰茶褐色である。その
蕃殖地は、千島より北亞米利加の極地である。

〔六〕 白雁 *Anser hyperboreus*, Pallas.

英名を「スノウ、グウス」(Snow Goose)といふ。嘴と脚とは赤く、手翹は黒く、羽毛は純白で
あつて、尾翹は十二枚である。亞米利加の極地に於て蕃殖し、また東部西比利亞にても、蕃

殖するならんといふ。

〔七〕 大白雁 *Anser hyperboreus nivalis*, Ridgw.



第三六一一圖 白くしひ

英名を「グレート・スノー・グース」(Greater Snow Goose)といふ。前種に似たれども、軀軀は前種よりも大きい。

〔八〕 こかりがね *Anser minutus*, Naumann.

英名を「レット・サー・ホワイト・フロント・テッド・グース」(Lesser White-fronted Goose)といふ。眞雁によく似たれども、それよりは小さく、額の白色部は眼に達する。秋季本邦に來り、春北地へ去る。その蕃殖地は、西比利亞及び北歐羅巴の凍野である。

〔九〕 菱喰又沼太郎 *Anser*

segetum serrirostris, Swinhoe.

英名を「イースターン・ビーン・グース」(Eastern Bean Goose)といふ。體は頗る大きく、全長三尺ありて、尾翹は十八枚あるを常とする。嘴は橙黄色と黑色の部とありて、脚は橙黄色にして、羽毛は灰褐色で、胸部の羽色は淡いのである。

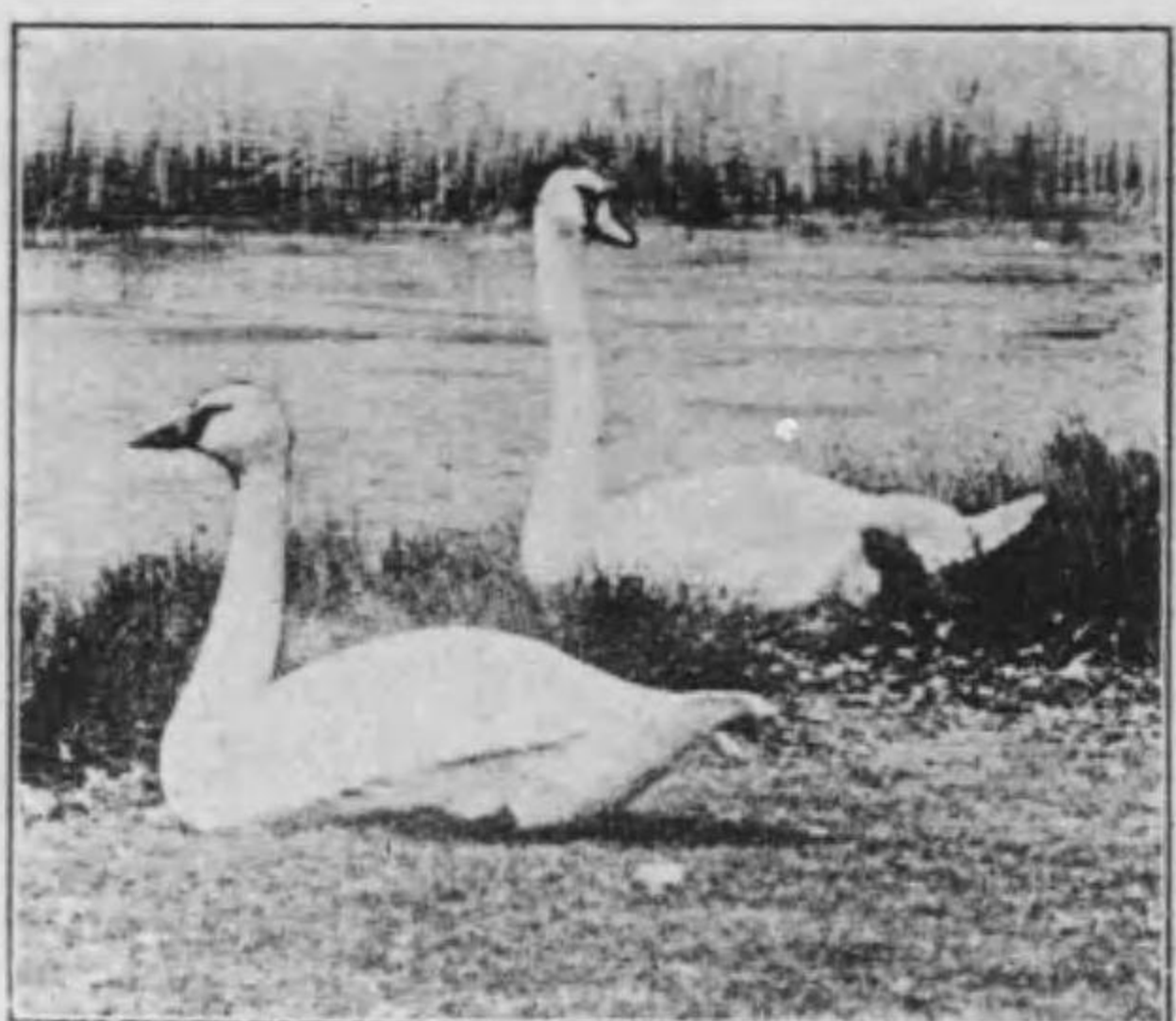
冬季我邦に渡來する普通のものである。

〔四〕 鵞亞科 (Cygninae)

嘴の側縁には、齒狀物なく、跗蹠部は、中趾よりも短いのである。

〔一〕 大白鳥 *Cygnus musicus*, Bechstein.

英名を「フッバー・スウラン」(Whooper Swan) 又「ホイストリング・スウラン」(Whistling Swan)といふ。頸は長く、羽毛は厚く密接し、翼は長く且つ廣濶である。體の全長は、五尺



第三六二圖 大白鳥

許で、兩翼を擴ぐるときは七尺余もある。總身は純白色であつて、冬季我國に渡來し、北海道には多いのである。この鳥は西比利亞、ラブランド、イスラランド、ハドソン灣に多く産するのである。幼鳥の肉は美味にして、また綿羽を衣服用として、賞用せられて居る。

〔一〕 白鳥 *Cygnus bewicki*, Yarell.

英名を「ビウイックズ・スワラン」(*Bewick's Swan*)といふ。前種よりも小形にして、體長は三尺七八寸で、兩翼を擴げたる長さは、六尺乃至六尺二寸で、羽毛は純白色である。この種は、冬季我邦及び歐洲に渡來し、白海附近に夥しく蕃殖するのである。

第二亞目 全蹠類又全蹠類 (*Steganopodes*)

〔一〕 鵜科 (*Phalacrocoracidae*)

嘴は、中庸の長さあるか、若くは短く、その先端は鉤状をなすのが通例である。而して嘴は、溝に因りて別かたれ、鼻孔は殆んど發育不完全である。跗蹠部は短く、側方は扁平にして、前後趾共に蹠を以つて張られ、第一趾は、常に後方に向いて居る。翼は中庸の長さありて、尾は中庸大なるか、若くは長く、頸と體とは長く、腿は突隆して居るのである。顔面は常に裸出し、下背部の羽毛は、短いのである。

この科には、約三十九種を有し、地球上の各地に産するのである。常に魚類其他の水棲動物をば、水中に潜りて、捕獲する。巢は、枝、雜草等より成り、岩上、樹上、蘆葦中にあるか、若くは地上にありて、一産に數個の卵を産む。卵は淡藍色若くは綠色にして、その上に、白堊質の被覆物あり、凡そ一箇月にして孵化するのである。雛は生るゝや裸出し、誠に

哀れむべき状態であるが、間もなく、額を除き他の體部には、綿毛を生するのである。而して、普通の鵜の雛にては、綿毛は黒色である。

〔一〕 海鵜 又かはつ又通常鵜 *Phalacrocorax carbo* (Linn.)

英名を「コンモン・コルモラント」(*Common Cormorant*)といふ。體長は三尺である。額の兩側にある黄色の裸出部は、遙かに口角の後部に達し、成鳥にては喉は白く、肩羽と小雨覆とは、暗褐色にして、黒線を有し、縁邊は黒色である。この種は、本邦の南部に棲息し、その蕃殖區域は、本邦、亞細亞の北部と南部、歐羅巴大陸、英國、濠太利亞、北米の大西洋沿岸にまで擴がつて居る。常に海岸の岩礁上、若くは高樹に巢を造るのである。

〔一〕 鷓鴣 又島津 *Phalacrocorax capillatus* (T. & S.)

英名を「テンミンクス・コルモラント」(*Temminck's Cormorant*)といふ。額の兩側にある黄色の裸出部は、口角の後方に擴がることはない。又喉には、數條の緑黒色の條紋がある。肩と雨覆とは、青銅綠色にして、縁邊には、狭き黒色部を有するのである。また尾翹は十四枚である。この種は、本邦及び東部支那に棲息するものである。岐阜縣にては、この種をば、尾張國知多郡篠島海岸に於て捕獲し、之を馴らして、所謂鵜飼として、使用するのである。

〔三〕 姫鷗ひめう又うがらす *Phalacrocorax pelagicus*, Pall.

英名を「レスブレンデント、シャツグ」(Resplendent Shag)といふ。小形にして尾翹は十枚を有し、背の羽毛と肩羽の縁邊には、黒色部を有することはない。成鳥にては、二個の冠羽を有し、額は嘴の基部に至るまで、羽毛を有するのである。

この種は、夏季は北海道の海岸に普通であつて、冬季に至れば、大多数のものが、東京灣に來り、春季には又北地に歸來するのである。その蕃殖地は、千島、カムチャツカ、アラスカ、アレウト諸島である。

〔四〕 千島うがらす *Phalacrocorax bicristatus*, Pall.

英名を「ベイヤ、フェースド、シャツグ」(Bay-iced Shag)といふ。成鳥にては、額及び眼の周圍は、橙黄赤色にして、裸出部もまた然りである。我邦にては、千島に産し、その分布は、太平洋の北部に限りて、産するのである。

〔一〕 鯉鳥科いりてう (Sulidae)

大きさは鷲鳥大より、小なる鷲位である。嘴は強壯伸直にして、先端に於て稍彎曲し、且つ鼻溝を有し、鼻孔は發育不完全にして、口角は眼を超へたる所に達する。脚の跗蹠部は短く、四趾は皆蹠を有し、一趾は内方若くは後方に向いて居る。翼は長く尖り、尾は中

庸の長さにして尖り、頸は長いのである。羽毛は雌雄に因りて相違あることなく、又季節的の變化がない。然しなから、幼者は、成鳥よりは暗色である。また顔は、常に多少裸出して居る。

この科には、約八種を有し、多くは温暖なる海洋に産する。常に群居するを好み、魚類其他の海産動物を食し、海藻等を集めて、岩上、樹上又は藪叢中に巢を造り、一産に一二卵を産む。卵は藍色の卵殻の上に、白堊質の被覆物を有し、普通の鯉鳥にては、六週間位にして孵化する。雛は始めは裸出し、後に、厚き白き綿毛を生ずれども、誠に哀れむべき状態にして、親鳥に因りて養はるのである。

〔一〕 琉球鯉鳥 *Sula sula* (Linn.)

英名を「コンモン、ブービー」(Common Booby)といふ。鴨位の大きありて、嘴と脚とは淡黄色にして、腹は白く、其他の羽毛は褐色である。本邦にては南鳥島、入表島及び石垣島にて採集せられたれども、この種は、普通熱帯の海洋に棲む鳥である。

〔二〕 赤足鯉鳥 *Sula piscatrix* (Linn.)

英名を「レッド、フーテッド、ブービー」(Red-footed Booby)といふ。幼鳥の羽毛は、體の下部に於て、少しく青白味を帯べども、成鳥にては、風切は褐色にして、其他は白色である。而

して雛も成鳥も、皆脚は赤色である。この種は、西は印度洋より、南は濠太利亞、東は太平洋の海洋に産するのである。

八六〇

〔三〕 かつをツの *Sula leucogastra* (Bodd.)

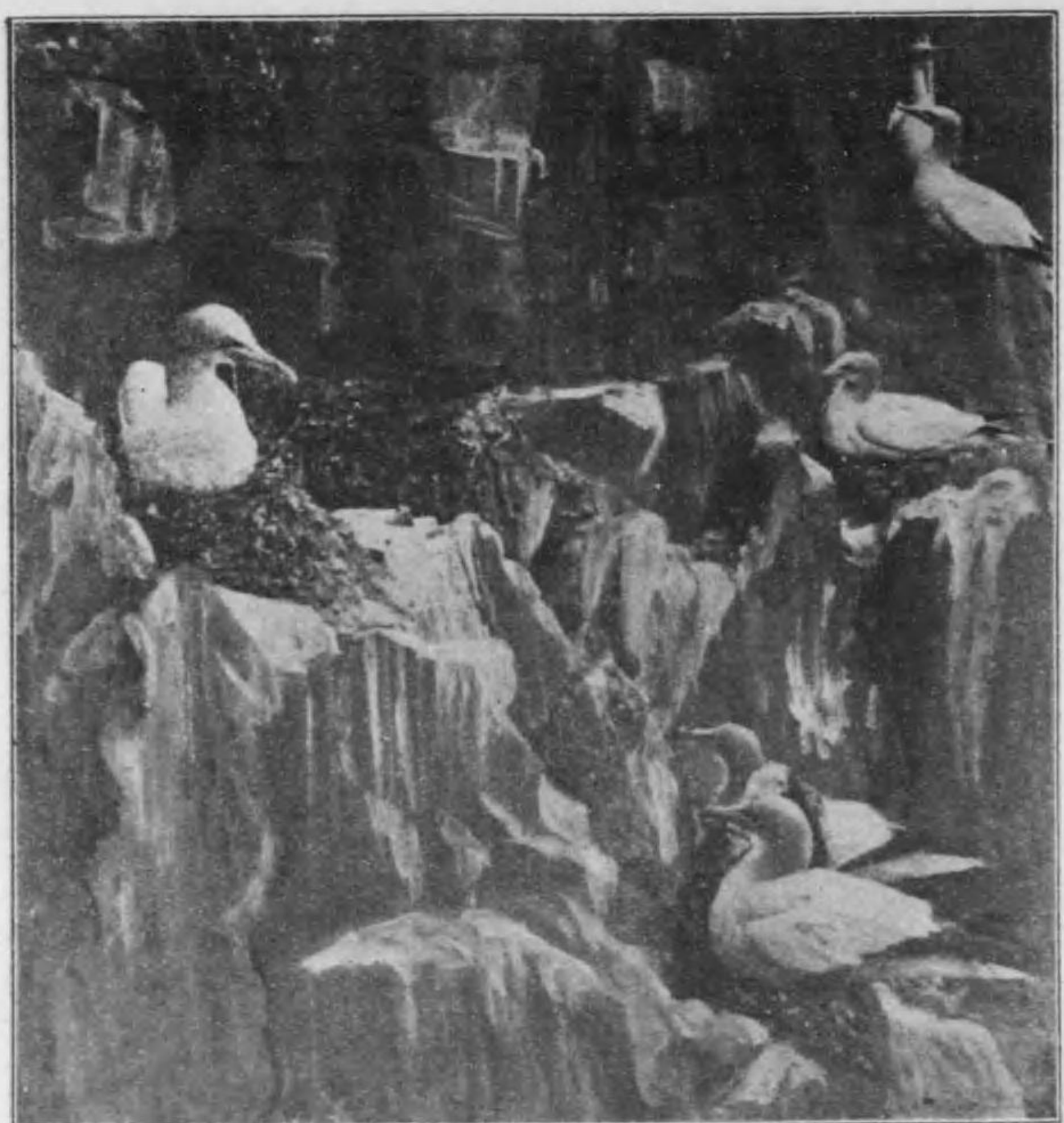
英名を「ブウビイ、ガンネット」(*Booby gannet*)又「コンモン、ブービイ」(*Common Booby*)といふ。成鳥は、胸以下の體下は、白色をなせる外、羽毛は褐色にして、脚は淡黄色である。幼鳥には、頭、頸及び體下は淡色にして、其の他は褐色である。

この種は小笠原島にて蕃殖し、南は濠太利亞、西方は印度洋及び大西洋を横ざりて、西印度に至るまで、また東方は太平洋を横ざりて、廣く分布するのである。

茗溪會發行「教育」四十七號に、田口元氏の述べられたる「御藏島の生物」中に、次の記事がある。「本島の特産、或は奇産とも稱すべきは鯉鳥なり、此等は、年々岩穴の間に巢を結び、一歳僅に一卵を生み、雛を孵す、其雛は小鴨の如くにして、羽色は淡黒色なり、十月頃に至り、石路の花盛なるを期として、巢立前の雛を捕獲するなり、其肉は柔軟にして、味頗る美なり、或は鹽漬として貯ふ、之を捕ふるには、村内一同揃ひて、未明より操出し、一日一人にて、三四十羽を捕ふることあり、其形状は、鷗の如くにして海上に住み、常に相模洋に往來して、鰯其他の小魚を捕ひ來りて、雛を養ふと云ふ」云々。

〔四〕 英國産鯉鳥(假稱) *Sula bassana*, L.

英名を「ガンネット」(*Gannet*)又「ゾーラン、グウス」(*Zolan Goose*)といふ。この種は、北半球を



鳥鯉産國英 圖三十六百三第

通じて廣く分布し、スコットランドの東部及び西部の海岸を離れたる島嶼に於て、この種の數千が群をなして、蕃殖するのである。巢は海藻及び草より成り、通例は岩石の突出部に置かれてある。而して産卵数は、唯一つである。幼鳥は、生れた時は、裸出すれども、間もなく、長き白色の綿毛を生ずるやうになる。成鳥の體長は三尺にして、頭と頸とは淺黄色で、手足は黒い外、羽毛は皆白色である。この鳥は、にしん。

の如き魚類を食ひ、單獨に、若くは群をなして海洋面を飛翔し、魚種の水面に現はるゝを見るや、高所より直ちに急轉落下し來りて、之を攫むのである。されば英國沿岸の鯡漁者は、この鳥の群を見て、鯡群の來遊するを、知るといふのである。この種の肉は、食用となり、また脂肪を締め、羽毛を諸種の間、に供する爲めに、年々、その多數が捕獲せらるゝのである。

〔三〕 熱帶鳥科 (Phaethontidae)

體軀の大きさは、鳥位より、小形の鷗位である。嘴は殆んど伸直にして、上嘴の輪廓は、曲線をなし、一樣なる角質の被覆を有し、鼻孔は分明に裂けて居る。而して口角は眼下に達するのである。脚は小さく、跗蹠部は甚だ短く、四趾は皆蹠を有し、第一趾は甚だ小さく、且つ内方に向いて居る。翼は甚だ長く、尾は長くして尖り、且つ中央の羽は、殊に長いのである。頭は大きく、頸は短いのである。嘴は赤きか、又は黄色にして、眼と趾とは、暗色である。

本科のものは、地球上到る處の温暖地方の海に産し、唯六種を有する。別段に巢を造ることなくして、岩石又は樹木の穴に産卵し、一産に一卵を産む。卵は白く、且つ褐色の斑紋を有し、常に魚類を食ふのである。

〔一〕 赤尾熱帶鳥 又 赤ぼうし(圖) *Phaethon rubricauda*, Bodd.

英名を「レッド、テイルド、トロピック、バード」(Red-tailed Tropic Bird)といふ。嘴は黄色なる白き鳥にして、尾には二つの長き赤き羽を有するのである。常に印度洋及び太平洋の熱帶地方に棲息し、我が小笠原島及び南鳥島等に産するのである。

〔二〕 白尾熱帶鳥 又 白熱帶鳥 又 熱帶鳥 又 白ボージン(圖) *Phaethon candidus*, Temm.

英名を「ホワイト、テイルド、トロピック、バード」(White-tailed Tropic Bird)といふ。前種に似たれども、尾は白いのである。

〔四〕 ペリカン科 (Pelecanidae)

體軀の大きさは、鷺鳥大のものより、小なるは、白鳥よりは少し大きいのである。嘴は甚だ狭長且つ扁平にして、先端には鉤を有する。下顎は二つの屈撓せる枝より成り、それは、唯先端に於てのみ結合し、以つて、大なる囊を支へて居る。四趾は總べて蹠にて結合し、後趾は後方に向き、且つ少しく内方に傾いて居る。翼は甚だ長大にして、且つ幅が廣い。尾は短く、頸は長い。舌は甚だ小形である。

羽毛は長く、且つ弛るく生じ、羽色は成鳥に於ては、大部分は白色若くは灰色にして、

幼鳥にては、褐色である。また風切は黒色である。囊と顔とは、常に裸出する。雌雄に因りて、殆んど羽毛に相違することなく、唯季節に因りて、幾分か變化を見るのみである。本科のものは、約十二種を含み、温暖地方及び温帯地方の海岸、及び大河に棲息する。常に群居し、魚類を食すれども、時には幼き水鳥を食ふものがある。枝及び燈心草の類等を集めて、巢を造り、樹上若くは地上に置く。一産に數個の卵を産み、卵は白く、卵殻は粗糙である。而して一箇月乃至七週間許にして、孵化し、生れたる雛は、誠に哀れむべきものにして、始めは裸出すれども、後ちに、青白き綿毛を生じ、且つ嘴は、始めは全く短いのである。

〔一〕 ペリカン又がらんでう又こんがらてう又るびすみひ
 又おほごり又れんごてう *Pelecanus onocrotalus*, L.

英名を「ホワイト、ペリカン」(*White Pelican*) 又「ローゼート、ペリカン」(*Roseate Pelican*) といふ。南部歐羅巴及び北部亞弗利加の各地に産する。下嘴にある囊は、魚を容れ置く用に供するのである。羽毛の大部分は白色にして、少しく薔薇色を帯びて居る。而して手翼は黒色である。上嘴は帯赤黄色にして、下嘴は肉色である。常に河口及び湖沼に徘徊し、魚類を食する。この鳥の體軀は、無骨の造りで、且つ行歩に於て蹣跚すれども、飛力は強

健にして、肩の間に頭を引き入れ、尾の下に脚を擴げて、よく飛翔するのである。體長は五尺位あれども、またよく樹上に留るのである。親鳥が幼鳥を食ふに當りては、雛の胸に對して、自分の囊を押し付け、上嘴を開き、以つて雛の食物を取るに、便利を計るのである。

〔五〕 軍艦鳥科 (*Fregatidae*)

體長は約三尺三寸位である。嘴は長く、非常によく鵜の嘴に似て、且つその先端に於て鈎曲し、口角は眼下に達するのである。鼻孔は嘴の溝中に位する。跗蹠部は甚だ短く、羽毛を生じ、四趾は基部に於て蹠を張り、第一趾は後方に向つて居る。翼はよく發達し、長く且つ幅廣くして、腕關節は、翼を疊むときは、胸を超へて突出するのである。尾は、長く、且つ叉狀である。また體は甚だ小形である。羽毛は成長せる雄にありては、



シカリハ 四十六三第

暗色なれども、雌に於ては、胸部は白いのである。また幼鳥は、頭にも白色部を有するのである。この科の咽喉は裸出し、雄にては擴張し得る赤色の囊を有するのである。

本科のものは、熱帯の海洋に産し、蕃殖期に於ては、海洋中の無人島に來るのである。而して唯二種のみを産する。常に群居し、多くは空中に飛翔し、水に入ることは稀れである。而してその飛翔は、實に強健にして、長い間、翼を打たずして翔け廻はり、又拭ふが如くに飛び廻はり、且つ飛ぶときは、頸をば胴の方へ引き入れるのである。常に水面に浮び出づる魚及び幼き海龜等を食し、他の海鳥を襲ふて、その捕へたる魚を奪ひ、又それらの雛、及び自分の幼鳥をも食ふのである。常に小枝を用ひて、巢を造り、樹木、藪叢或は岩上に置き、一個の白卵を産む。孵化せる雛は、白色の綿毛を有し、甚だ哀れむべきものにして、親鳥に



鳥艦軍 圖五十六百三第

〔一〕 軍艦鳥 *Fregata minor* (Gmelin.)

困りて養はるゝのである。

英名を「レツサー、フリゲート、バールド」(Lesser Frigate Bird)といふ本邦にては、嘗つて箱館にて捕獲せられたことがある。形貌は鶉の小なるものゝ如く、見ゆるのである。

〔二〕 大軍艦鳥 (Large Frigate-Bird) (假稱) *Fregata aquila*, Linn.

小川三紀氏の目録に因れば、嘗つて南鳥島にて得たりといふ。この種は、東西兩半球の熱帯地方の海に、廣く分布する鳥である。

第三亞目 長翼類 (Longipennes)

〔一〕 海燕科 (Procellariidae)

體は、大なるは白鳥大より、小なるは燕位である。嘴は、中庸の長さあるか、或は長くして、その先端は鈎状をなし、これには溝を有する。而して、鼻孔は管状をなして突出し、信天翁に於ては、左右二個相分離すれども、海燕類にては、左右の鼻管は、嘴根上に於て、合して一個となつて居る。而して、口角は眼の前面に位するのである。跗蹠部の長さは、種屬に因りて異なる。而して、前向せる三趾は、皆蹠を張り、後趾はなきか、又は唯爪のみ顯はれて居る。翼は概して狭長にして、尾は常に短い方である。

本科には、百二十種位を含み、地球上の到る處の海に産すれども、陸地より、遙かに離

れたる所に棲息するのである。常に海産動物、屍肉若くは船舶より投棄せらるゝ食物を啄み、よく泳ぎ、又中にはよく潜水するものがある。巢は常に穴中にあれども、信天翁にては、土と芝土との開豁なる地に於て、巢を造るのである。卵は一個にして、常に白色



群の翁天信 圖六十六百三第

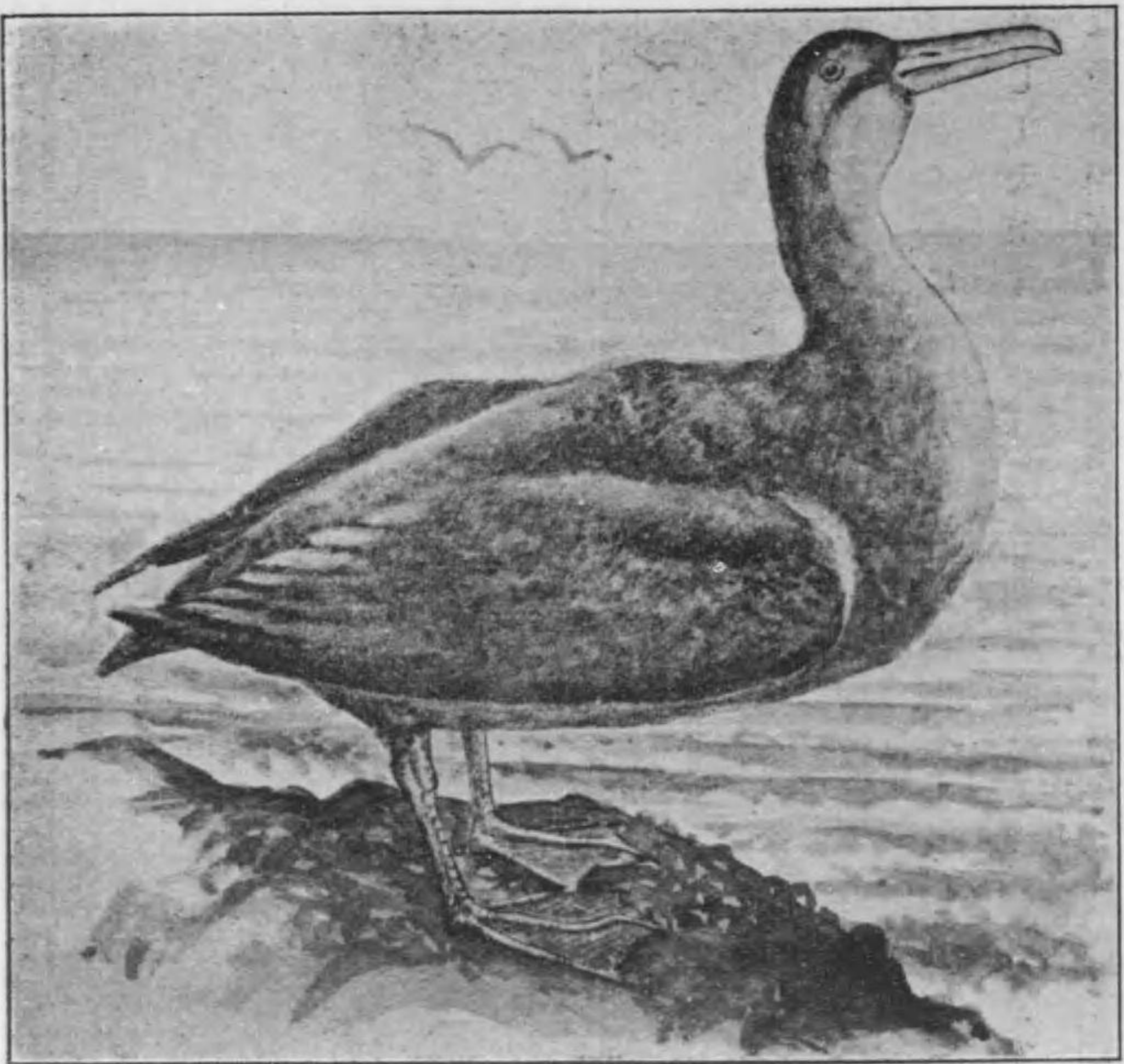
なれども、時には赤き斑紋を有するものがある。而して一月乃至二ヶ月にて、孵化するのである。雛は綿毛を生すれども、誠に哀むべき状態にして、親鳥に因りて養はるゝのである。

〔一〕 信天翁亞科 (Diomedinae)

主として、南方の熱帯の海に産すれども、唯一二種は、太平洋に來り、カムチャツカに産するのである。

〔一〕 信天翁あほうどり又ばか (上總長生 郡方言) *Diomedea albatrus*, Pallas.

英名を「ステラリス、アルバトロツス」(Steller's Albatross)といふ。甚だ大きく、翼長は一尺六寸乃至一尺八寸四分である。淡色のものは、羽色は殆んど白く、翼尾、肩羽の大部分及



翁天信 圖七十六百三第

び雨覆の大部分は、褐色である。而して暗色のものは、體の上下面は全く褐色である。また嘴及び脚は、青白色である。この種は、本邦の海に普通に見る鳥にして、廣く北太平洋に分布し、亞細亞及び亞米利加の海岸にも、普通である。

〔一〕 黒足信天翁 *Diomedea nigripes*, Audubon.

英名を「アウヂエボンス、アルバトロツス」(Audubon's Albatross)といふ。前種より稍小さく、翼長は一尺五寸五分である。體の上部と下面とは、暗褐色にして、嘴の基部の周圍は、淡褐色である。

が嘴と脚とは殆んど黒いのである。この種は北太平洋に産するのである。

八七〇

〔三〕 信天翁一種 *Diomedea exulans*, L.

英名を「ウランダリング、アルバトロックス」(Wandering Albatross)といふ。體重は僅に一貫九百三十五匁に過ぎないが、翼を擴ぐるときには、一丈二尺に達するものがある。この種は、全く南半球の海洋に産する鳥にして、蕃殖期の外は、陸地に來ることが稀れであつて、その際に於ても、トリスタンダクニアの如き絶島に來るのみである。羽毛は、大部分は、帶黃白色にして、大雨覆には、黒味を帯びたる條紋を有する。その飛翔力は、實に非常なるものにして、天氣靜穩なるときには、折々水面に靜止することあれども、多くは、絶へず飛翔するのである。而して大形且つ強壯にして、屈曲せる嘴を用ひて、大魚を捕へ、且つまた約三百六十三匁乃至四百八十四匁もある、鯨の脂肪を呑んだものもある位である。この種は、大なる群をなして、地上に於て、粘土及び草にて成れる、大なる圓錐形の巢を造り、その中に一



種一翁天信 八十六百三第
(*Diomedea exulans*)

卵を産む。卵は殆んど白鳥の卵位の大きさがある。

〔二〕 海燕亞科 (*Procellariinae*)

〔一〕 はいいろうみつばめ *Procellaria furcata*, Gmelin.

英名を「グレイ、フアーク、テイルド、ベートル」(Grey Fork-tailed Petrel)といふ。翼長は約五寸二分である。羽毛は、淡石板灰色にして、下尾筒は白く、肩羽及び臂翼の先端も亦白く、腋下、大雨覆、小雨覆及び耳覆は、暗褐色である。その蕃殖區域は、千島、コンマンダー群島、アラスカ、ベーリング海峡等である。

〔二〕 腰白海燕 *Procellaria leachi*, Temm.

英名を「リーチス、フアーク、テイルド、ベートル」(Leachi's Fork-tailed Petrel)といふ。翼長は約五寸である。上尾筒は白色なる外、體の上下部は、著るしく濃褐色である。この種は、千島、スコットランド及びアイルランド及びファンデー灣にて、蕃殖するのである。

〔三〕 くろうみつばめ *Procellaria melania*, Bonaparte.

英名を「ブラック、ベートル」(Black Petrel)といふ。翼長は五寸二分である。尾の叉狀部は稍深くして、一寸餘もある。臂部及び上尾筒は、翼の色と同じく、煤褐色にして、臂翼と肩羽との縁邊は、腰白海燕(こししろつばめ)の如く淡色である。この種は、仙臺附近の海にて、捕獲せられて

居る。

〔四〕 あらし、うみつばめ(假稱) *Thalassidroma pelagica*, L.
英名を「ストーミー、ペトル」(*Stormy Petrel*)といふ。大西洋に産し、體長は五寸許であ



めばつみうしらあ 圖九十六百三第

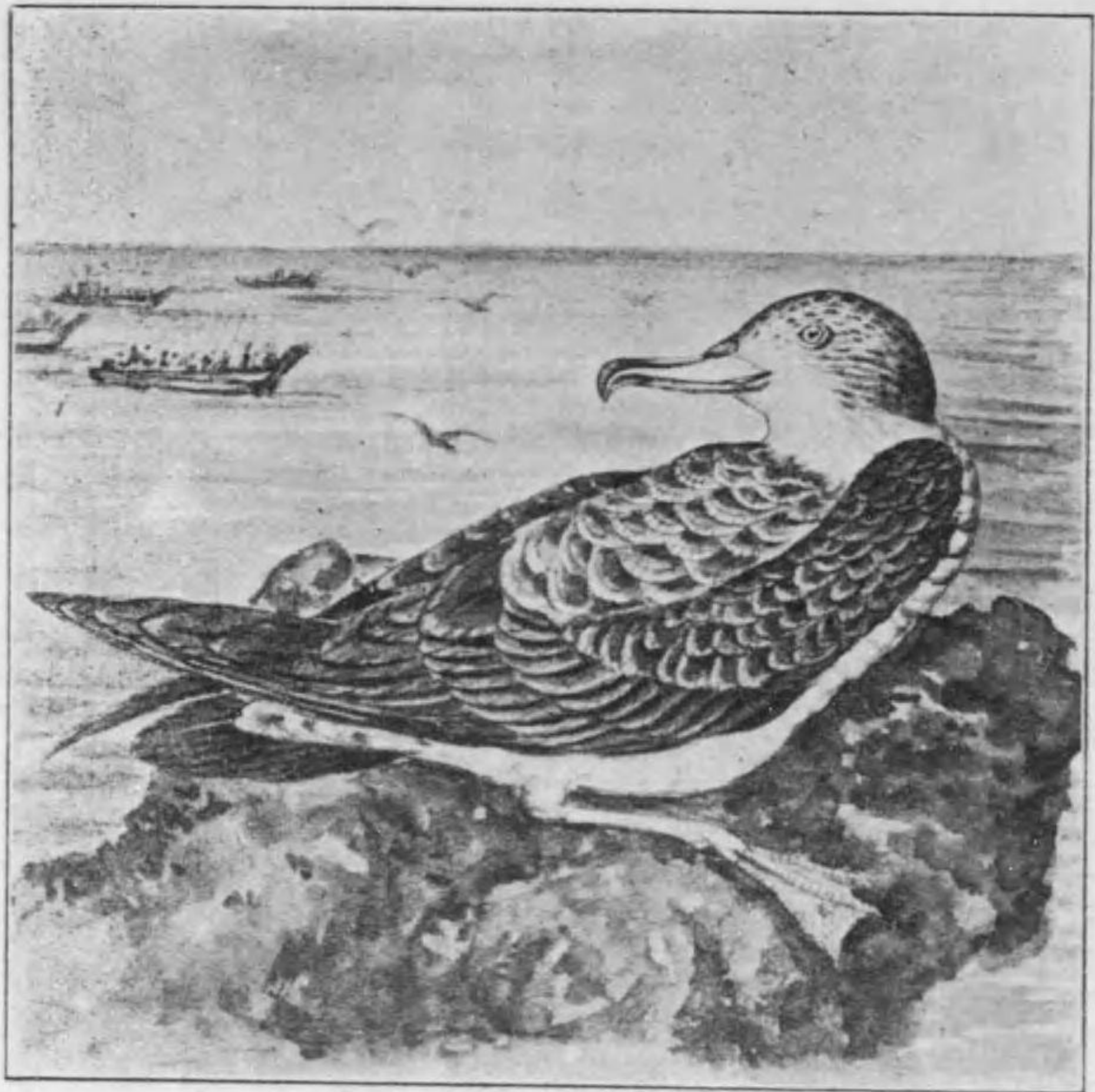
る。尾の基部に白斑を有する外、體の色は、重に煤黒色である。この鳥は、暴風雨の時には、好んで怒濤の上を飛翔し、波の爲めに、表面に曝されたる、海産動物を捕へて、食ふのである。また體には、油分を多く含、有し、物に恐るゝときは、口より之を吐出するのである。されば、英國北部の絶島に棲める人は、この鳥の雛を捕へ、その脂肪分に富める體中に、燈心を挿入して、一端をば嘴より出し、これに點火するのである。

〔五〕 大水風鳥 *Puffinus leucomelas* (Temm.)

英名を「シーボルズ、シーアウラター」(*Siebold's Shearwater*)といふ。體長は一尺六寸で、翼長は一尺五分である。體の上部は褐色にして、下面は白く、頭も亦白く、下雨覆には、褐色斑を有し、嘴は灰黒色にして、先端の曲れる所は、灰白色である。跗蹠部は黄褐色にして、趾は肉色である。本邦到る處の海に産し、南はマレイ群島附近に分布するのである。

〔六〕 尾長水風鳥 *Puffinus griseus* (Gmelin.)

體長は一尺四寸で、翼長は一尺である。體の上面は褐色にして、頭部と頸部の側面と



鳥風水大 圖十七百三第

は灰色である。下尾筒は暗褐色にして、體の下面は、一樣に純白色である。尾羽は比較的長くして、暗褐色である。この種は、南鳥島及び小笠原島附近に産するのである。

〔七〕 はしほそみづな

ホヅリ *Puffinus tenuirostris* (Temm.)

英名を「スレンダー、ビルド、シーアウラター」(*Slender-billed Shearwater*)又「マツツン、バールド」(*Mutton-bird*)といふ。體長は一尺九分で、翼長は八寸四分乃至九寸である。體

の上面は、一様に暗色にして、下雨覆は淡灰色で、嘴と脚とは暗色である。この種はフアン、ヂーメン及びビニュー、ジールランドの海岸を離れたる、或る島嶼にて、大群をなして蕃殖すると云はれて居る。而して夏季のみ、北太平洋に來るので、あらうといふことである。

〔八〕 水風鳥 *Puffinus nativitatis*, Streets.

前種に似たれども、體は小さく約一尺一寸七分で、翼長は八寸四分位であつて、體の羽色は濃いのである。小川三紀氏の目錄には、南鳥島に産する旨、記されてある。

〔九〕 灰色水風鳥 *Puffinus griseus* (Gmelin.)

英名を「スウチイ、シールアウワター」(Sooty Shearwater)といふ。體長は一尺五寸許で、翼長は九寸二分乃至一尺位である。下雨覆の大部分は白色なる外、體は一樣に褐色であつて、嘴と脚とは暗色である。この種は南半球の太平洋方面にて蕃殖し、太平洋にては、北は千島より、南はマゼラン海峡に至る迄、分布する。

〔一〇〕 赤脚水風鳥 *Puffinus carneipes*, Gould.

英名を「ピンク、フウテッド、シールアウワター」(Pink-footed Shearwater)といふ。體長は一尺六寸三分で、翼長は一尺五分である。體全體は一樣に褐色にして、嘴と脚とは淡色である。

る。この種は、濠太利亞より、北部太平洋に亘りて産するのである。

農商務省令第十四號

狩獵法施行規則中左の通改正す

明治四十五年五月四日 農商務大臣

第二十七條中「一雷鳥」の下「水風鳥」を加ふ

● 新保護鳥、水風鳥……………時事新報所載

(獸醫學士 内田清之助氏談)

今度保護鳥になつた水風鳥は、又の名、瀬鳥とか、眞鳥とかと、稱する鳥で、居る處には、澤山に居るけれども、元來が海鳥であるから、自然知らない人も、多分ある様であるから、今其の種類、形狀、性質、其他どう云ふ譯で、保護鳥になつたかに就て、御話して見やう。

▲ 其種類 日本に棲息して居る此鳥の種類は、水風鳥、大水風鳥、嘴細水風鳥、灰色水風鳥、赤足水風鳥、尾長水風鳥の六種で、何れも日本近海の海上に棲息して居る。

内外普通動物誌

(中略)

▲生産地と分布 元來は海鳥であるが、其分布は極て廣く、北は千島の果の寒い所から、南は小笠原、琉球、臺灣等の熱帯地方に至るまでの海上に飛翔して、海上に浮遊して居る諸種の動物や、小魚を食して居る。其生産地は、多く人里を離れた無人島で、今日迄私の知り得た營巢地は、北では北海道福山沖の小島、越前沖の大島、伊豆七島中の二三の小島、小笠原島の中、四國の蒲葵島、鹿兒島縣下の無人島、琉球諸島のあるもの等の、何れも無人島である。巢は草の根方に、土を横に二三尺の深さの穴に掘て造るのである。此鳥の特徴として、其巢の中に、只た一つの卵を、一年に一回しか産ないのである。巢籠をして居る間は、雌雄共に其島を離れる事はないが、雛が巢立をする頃になると、雛を連て、海上に出て、浮游動物や小魚を食物として、海上遙か遠方まで、飛び行も、夜になると、必ず自分の巢に歸つて來て、決して他の島や、外の巢に迷ひ込む事などはない。夫で夜が明けると、又何方ともなく飛で行つて、餌を漁つて居る。で雛が一本立になると、親鳥と別れて、別に配を求めて、新に分家して、世帯を持つのである。其生産地の無人島に行つて見ると、二足三足歩く中には、必ず巢の中に、足を落す程の、非常な巢の數で、一つの無人島には、何萬と云ふ水風鳥が、棲んで居るのである。

である。

▲有益なる現由 日本では海鳥や、水鳥には保護を加へて、居らなかつたが、四十一年に狩獵規則改正の時、鷗、鰯、刺、海雀、善知鳥、阿比の類を附加されたが、水風鳥を保護鳥にしたのも、全く夫れと同じ理由である。此鳥の食物は、海面に群集して、浮んで居る動物や、小魚であるので、之等の食物が、海上に群れて居るのを見出すと、水風鳥は、之を目懸けて、集まつて來る。そこで、此鳥の好んで食する餌は、鰯や鰹も、好んで食するので、漁師は、水風鳥の群をなして居る所には、必ず鰯や鰹の群をなして居ることを知るの便りとなる。又此鳥は、動物や魚類を常食として居るから、其糞は、有機物に富み、従つて此鳥の棲息して居る島の土壤に、糞が濕み込み、爲めに、磷酸肥料として、價値のあるので、此鳥の棲んで居る無人島は、屢々世人の注目する所となり、土は採掘されても、割合に人を恐れぬので、手取にされ、又は撲殺されて、一萬羽や二萬羽を、捕獲することは容易である。而かも、其生産力は、僅か年一回一匹であるから、此儘打ち棄て、置いては、折角の益鳥も、忽ちにして絶種となる恐れがあるので、終に今度保護鳥に差加へた譯である。云々

(一) 鷗科 (Laridae.)

嘴は、種屬に因つて、其形狀を變化すれども、概して、中庸の長さにして、側方は扁平で裂孔狀の鼻孔を有する。鼻孔は概して、遙かに前方に位し、口角は眼下に位する。跗蹠部は、種屬に因つて、その長さを異にし、前趾には通例充分に蹠を有し、後趾は常に甚だ小形である。翼は長く且つ尖り、尾は中庸なるか、又は長い。頭は大きく、且つ體軀は輕快である。羽毛は成長せるものにありては、白色部多く、且つ雌雄同色にして、時には季節的變化を有するものがある。雌は常に斑色を有する褐色にして、親鳥と大に羽色を異にするのである。

本種のもものは、約百二十種を有し、世界到る所の海岸若くは河湖沼地に徘徊し、多くのものは渡鳥である。その食物は、魚類其他の海産動物なれども、屍肉を食ひ、また昆蟲及び野鼠を食する點は、大に有益であるが、時には他鳥の卵及び雛を食ふものがある。巢は樹枝、海草等より成り、地上、岩礁上、又は樹上、若くは叢叢中に置かれ、一産に一乃至四卵を産む。卵は斑紋を有し、凡そ三週乃至四週にて孵化するのである。雛は綿羽を有し、稍活潑にして、自身食物を取り得れども、また親鳥に因りて、口より吐出せられたる食物を受けて、養はるのである。綿羽は常に灰色にして、暗色の斑紋を有するのである。

(一) こうぞくかもめ 亞科 (Stercorariinae)

趾の蹠は、充分に發達し、強き爪を有し、羽毛は褐色である。この亞科のものは、決して温暖なる地方にて、蕃殖することはない。その性質は、掠奪性にして、他の海鳥より、食物を奪ふのである。その食物は、魚類なれども、また小形の水鳥と、その卵とを食ひ、鯨肉を食ひ、更らに屍肉も食ふのである。

(一) こうぞくかもめ *Stercorarius pomarinus* (Temm.)

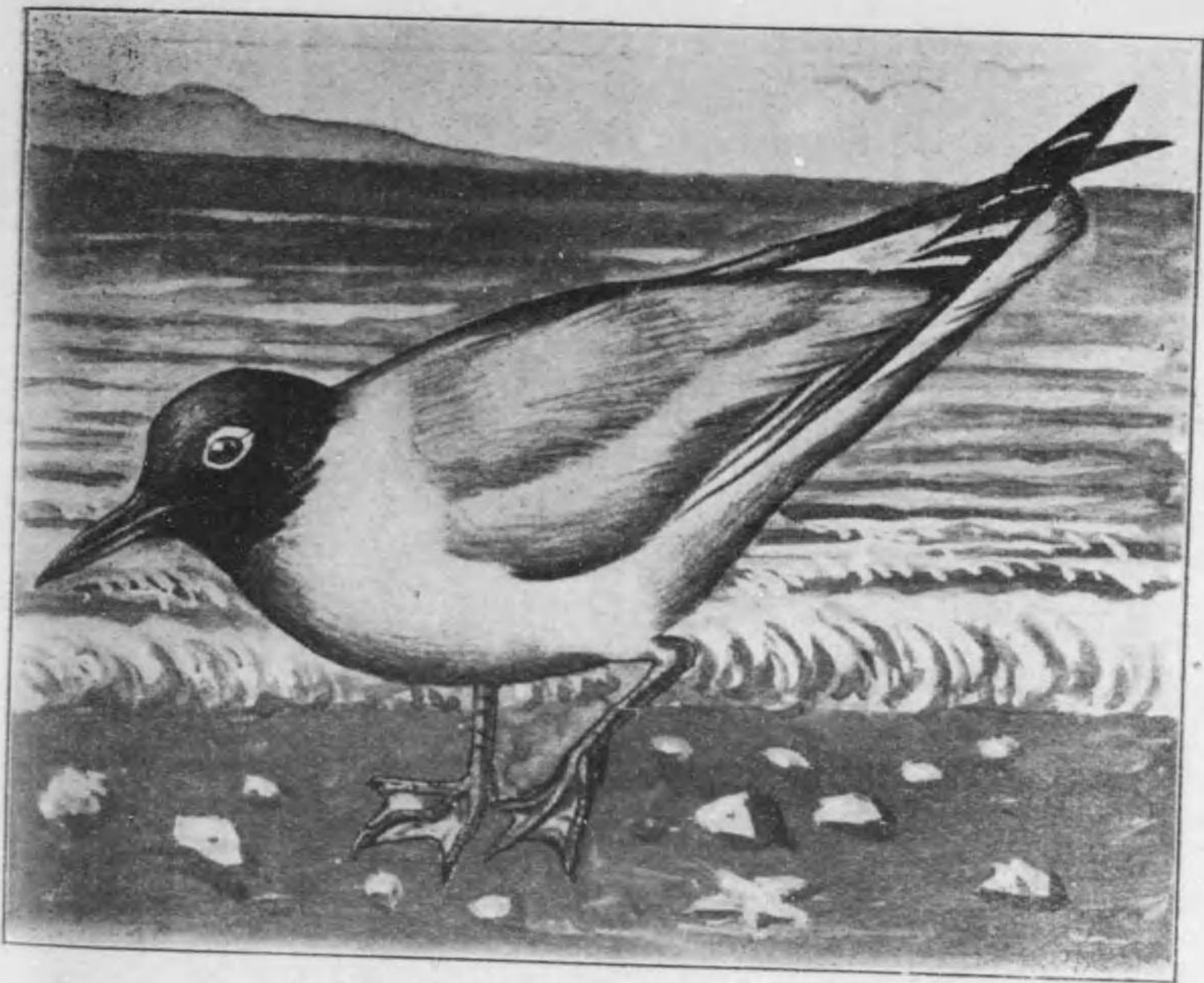
英名を「ポマリン・スクア」(Pomarine Skua)といふ。この屬のものは、中央二枚の尾羽は長いのである。而してこの種にては、一寸七分も長い位である。親鳥の上部は、暗色にして、下部は白く、時として全體暗色のものがある。この種は冬季稀れに見る鳥である。

(二) 白腹こうぞくかもめ *Stercorarius parasiticus* (Linn.)

英名を「ブッフフランス・スクア」(Buffon's Skua)といふ。親鳥にては、體の上部は暗色にして、下部は白く、頭上と頭側とは、煤黑色にして、自余の頸部と頭部とは、淡黄色である。この種は千島に渡り來る候鳥である。

(三) 黒こうぞくかもめ *Stercorarius richardsoni* (Swainson.)

英名を「リチャードソン・スクア」(Richardson's Skua)といふ。親鳥にては、體は一様に暗色であつて、時には頸と體の下面とが、白いものがある。その種も千島に産するのである。

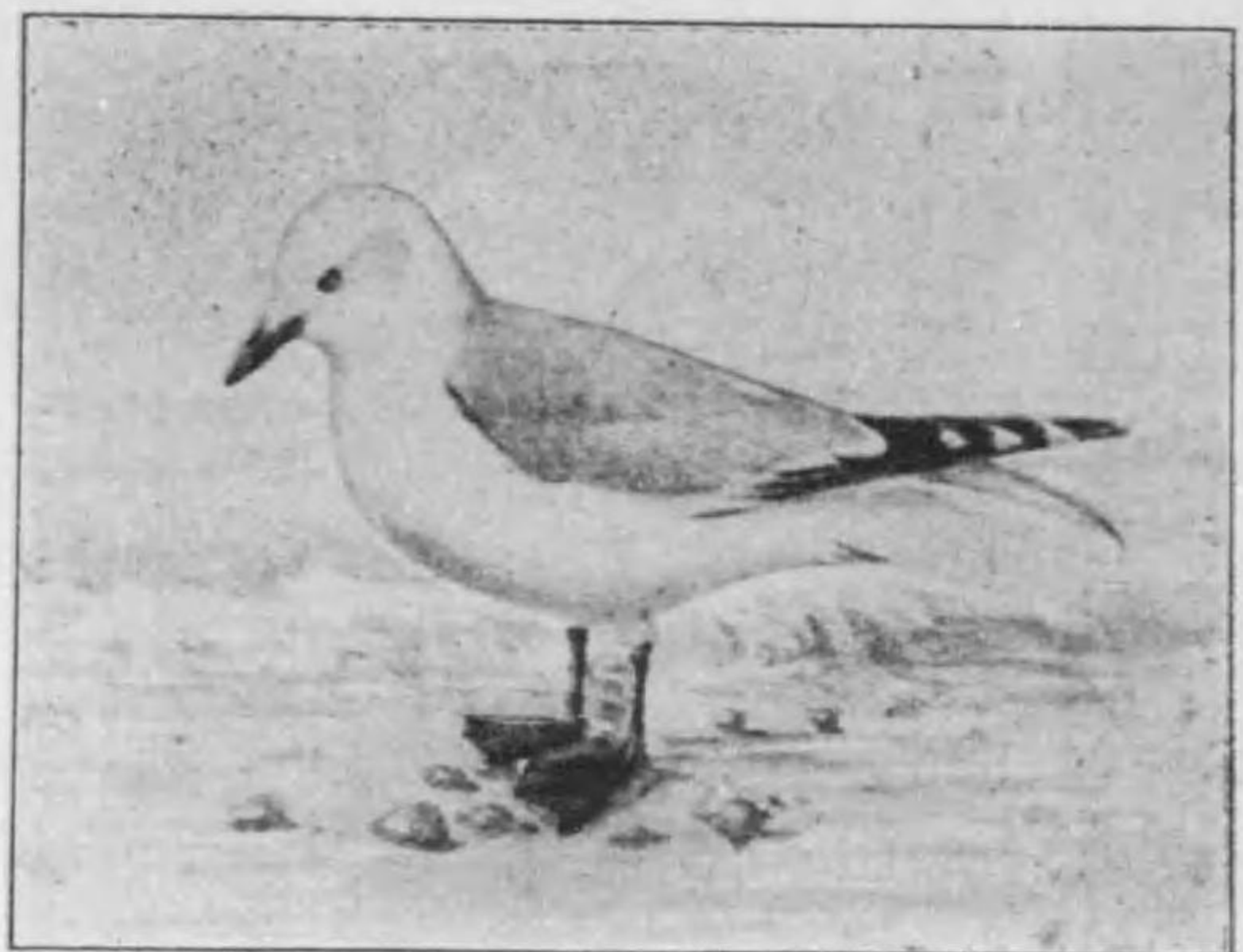


めもかりゆ 圖一十七百三第

親鳥の翁は、一様に灰色である。而して多くのものは、頭部は白色なれども、冬季にては、普通は灰色の條紋を有するのである。

〔一〕 ゆりかもめ *Larus ridibundus*, Linn.

英名を「ブラック、ヘッデッド、ガール」(Black-headed Gull)といふ。體長は一尺三寸四分で、嘴はあまり強壯ではなく、その先端は下方に曲り、色は脚と共に深紅色なれども、冬季にては、兩者共に光澤を失ひて肉色となり、遂に褐色を帯ぶるに



めもか 圖二十七百三第

至るのである。眼の周圍には一白輪を有し、頭は美なる暗褐色にして、喉の上部も、これと同色である。頸と翁とは美なる灰色であつて、喉、胸及び體の下面は白色にして、少しく石竹色を帯びて居る。頭の羽毛は、冬季にては白くなる。この種は北海道にて蕃殖し、又歐洲にも産し、英國にては、四時常に沿海に棲息し、春季には海岸近き湖沼に徘徊し、蠕蟲、ヂムシ、蛾、甲蟲等を食べ、また屍肉を食ひて、大に有益である。然しながら、小魚を食ふことは害の方面である。

〔一〕 鷗又かぶな(方言鳥) *Larus canus*, Linn.

英名を「コンモン、ガール」(Common Gull)又「ミウ、ガール」(Mew Gull)といふ。頭と頸とは、純白である。體の上面は灰色にして、縁邊には、白色部を有する。腕、蹠と臂

蹠の先端とは、灰色である。尾筒部と、尾と、體の下面とは、純白にして、脚は灰色である。成長せる雄にては、一尺五寸位もあつて、雌は雄よりは小さい。常に海岸に漂流せる屍肉

等を食するのである。

〔三〕 うみねこ又はまねこ(上雄長生 郡方言) *Larus crassirostris*, Vieillot.

英名を「テンミンクスガール」(*Femminek's Gull*)といふ親鳥の翁は灰黒色であつて嘴の

末端は赤く、其次に黒帯がある。この種は、本邦何れの地にも棲みて蕃殖するのである。

〔四〕 せくろかもめ *Larus vegae* (Palmén.)

英名を「バラスガール」(*Pallas' Gull*)といふ親鳥の翁は濃灰色で、足は肉色である。冬季は長崎に至るまで普通である。

〔三〕 鱒刺亞科 (*Sterninae*)

親鳥にては、翁は一樣なる色にして、淡き灰色、若くは黒色である。夏季に於ては、頭には多少の黒色部を有し、冬季にては、少くも額の部は白く、その他の頭部は、通常白色の條紋を有するのである。この亞科のもの、嘴は、伸直にして、脚は小さい。殆んど世界到る處に産し、且つ蕃殖するのである。



種一しざちあ 圖三十七百三第 (After Protheroe)

〔四〕 あぢぢこ *Sterna longipennis*, Nordmann.

英名を「ダウリアンターン」(*Daurian Tern*)といふ親鳥の嘴は黒く、脚は黒褐色にして、夏季にては、額と頭上とは、共に黒いのである。この種は、千島及び北海道に産するのである。

〔二〕 紅あぢぢこ *Sterna dougalli gracilis* (Gould.)

英名を「ロセエートターン」(*Rosette Tern*)といふ。夏季の親鳥の羽毛は、額と頭上ともに、黒色を呈し、翁は淡灰色で、足は赤いのである。この種は、奄美大島、石垣島にて捕獲せられたのである。

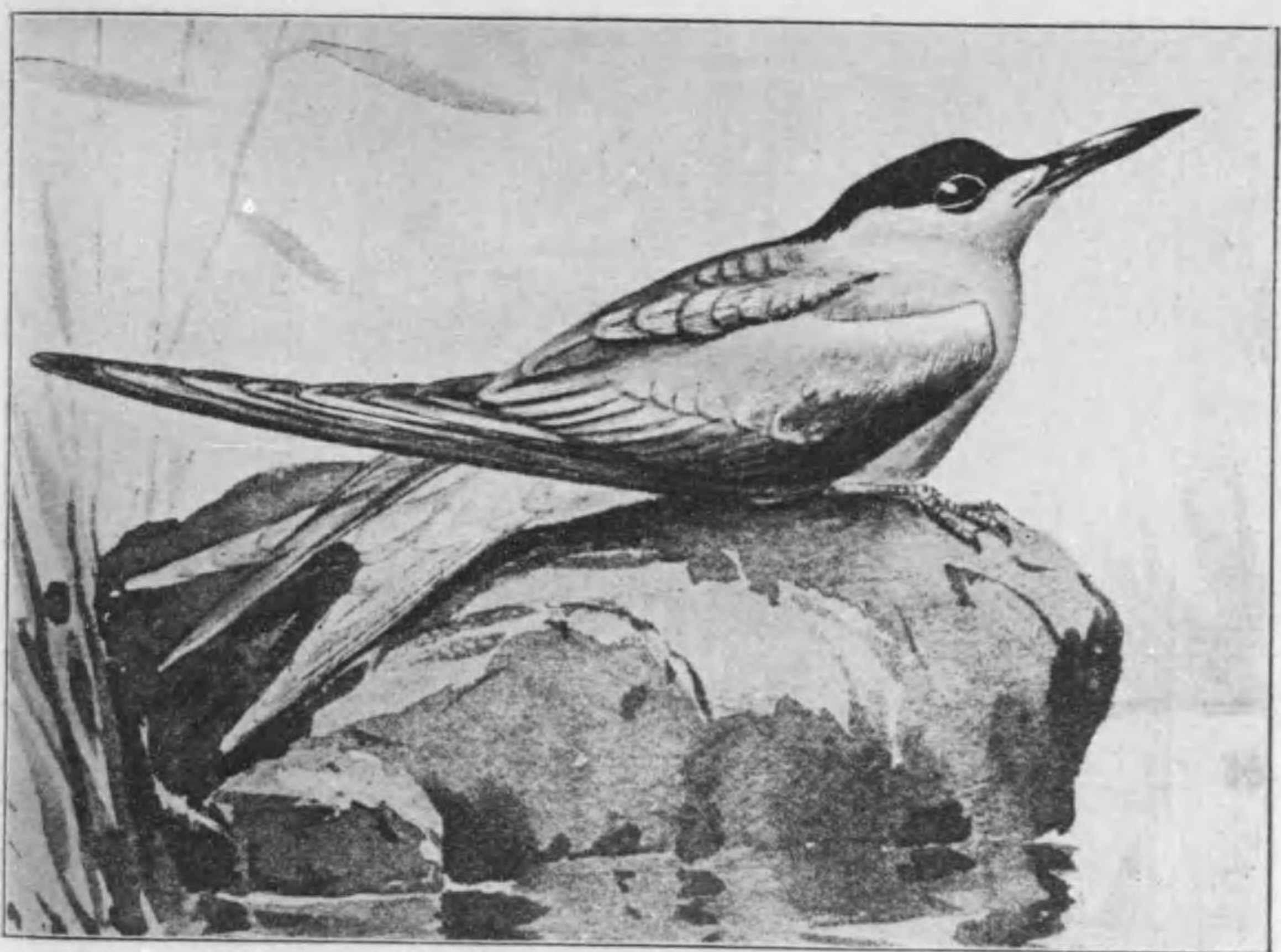
〔三〕 黒あぢぢこ *Sterna stolidus*, Linn.

英名を「ノツヂイターン」(*Noddy Tern*)といふ。全體一樣に煤褐色なれども、額部は殆んど白い。



じさぢあろく 圖四十七百三第

この種は南鳥島、東京灣及び琉球にて捕獲せられたのである。



(From Birds Useful and Harmful) しさぢあ産巴羅歐 圖五十七百三第

八八四
〔四〕 腰白あぢさし *Sterna alentica*, Baird.

英名を「アリユシアンターン」(Aleutian Tern)といふ。額は白色にして、肩は白く、體の上部は鉛灰色にして、下部は淡白色で、尾は一樣に白く、嘴と足とは共に黒いのである。この種は下總の犬吠岬にて、捕獲せられて居る。

〔五〕 歐羅巴産あぢさし
Sterna fluviatilis.

英名を「コンモンターン」(Common Tern)といふ。體長は一尺二寸許もある嘴は赤く、頭上と頸背とは黒く、翁は藍灰色で、喉と胸とは白く、翼は暗色を帯びて居る。而して腰は白く、眼は赤褐色であ

る。この鳥は群をなして、河畔の草原地に於て、地中の平坦なる穴に巢を造り、二三卵を産む。卵は粘土色、若くは藍黄色にして、天鷲絨様の灰色及び褐色の斑紋がある。

〔六〕 せぐろあぢさし *Sterna fuliginosa*, Gmelin.

英名を「スーチイターン」(Sooty Tern)といふ。嘴と脚とは黒く、頭部と眼前とは白色にして、背部と風切羽とは灰黒色に稍褐色を帯ぶる所がある。額、頬、咽喉、腹面、下尾筒は總べて純白色である。尾翹は灰黒色にして、二枚のみ長くして、外縁のみ灰白色を呈する。體の全長は約六寸で、翼長は約一尺二寸位である。

〔七〕 まみじろあぢさし *Sterna anaetheta*, Scopoli.

英名を「ブライドルドターン」(Bridled Tern)といふ。頭部と眼前との黒色部は、鼻溝に達せずして、後頸部は白色を帯ぶ。背部は一體に薄墨色にして、肩部にある褐色部は、前種よりも多いのである。體長は約五寸で、翼長は約一尺である。

第四亞目 短翼類 (Brevipennes.)

〔一〕 阿比科 (Colymbidae.)

體軀の大きさは、小なるは家鴨大より、大概鷺鳥位である。嘴は伸直にして、寧ろ長く、中庸の厚さを有し、口角は、眼の前下面下に位する。脚は體の後端に位し、三趾は前向し、その

中の外趾は、最長にして、皆蹠を有し、後趾は小形である。翼は中庸の長さありて狭く、體と頸とも、亦中庸の長さである。尾は甚だ短きも、眞正の尾翹を有するのである。羽毛は一様なる色にして、體の上面は暗色にして、下面は純白である。而して雌雄に因りて、羽色を異にすることなければ、季節的の變化があつて、雛の冬季の羽毛は、親鳥と類似して居る。

この科のものは、北半球に産し、唯五種位のみ知られて居る。足のみを用ひて、水中を潜行し、常に魚類、其他の水棲動物を食し、水邊に近き沿岸に於て植物質を集めて、巢を造り、一産に二卵を産む。卵は卵形にして、暗色の斑紋を有する所の橄欖色である。而して四週間にして孵化するのである。幼鳥は活潑にして、暗色の綿羽を以つて、被はれてある。

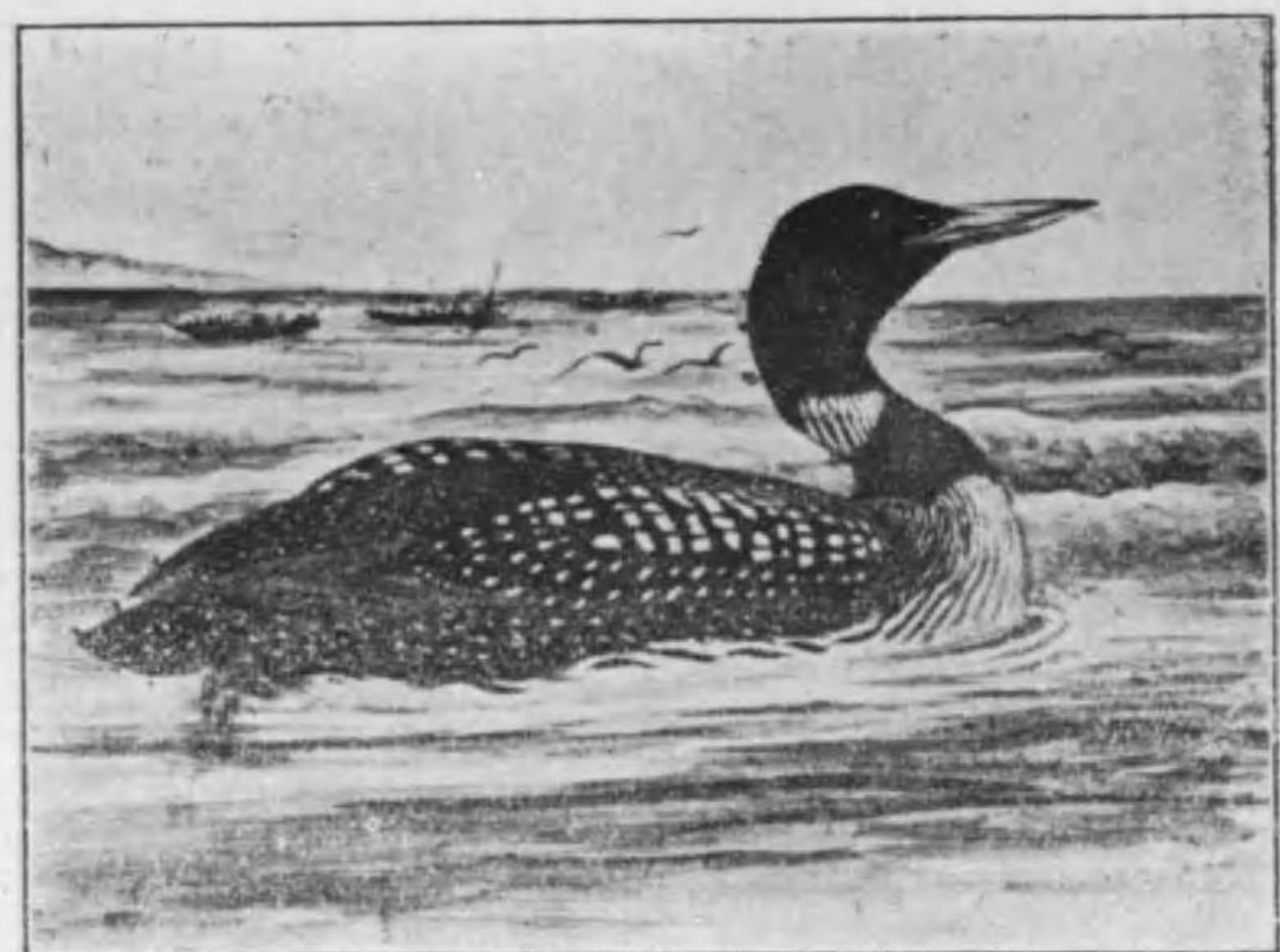
〔一〕 おほはむ *Colymbus arcticus*, Linn.

英名を「ブラック、スロートテッド、ダイバー」(*Black-throated Diver*) 又は「ブラック、スロートテッド、ルーン」(*Black-throated Loon*) といふ。喉及び前頸は、黒色にして、紫色の光澤を有する。脊は黒色にして、白點を混んじ、體の下面は白色である。冬季北海道に普通であつて、また、英國、北歐羅巴、西比利亞、アラスカ、北米の極地にも産するのである。

〔二〕 阿比 *Colymbus septentrionalis*, Linn.

英名を「レッド、スロートテッド、ダイバー」(*Red-throated Diver*) 又「レッド、スロートテッド、ルーン」(*Red-throated Loon*) といふ。額と頭頂とに、黒斑を有する鳥である。よく魚類を捕へ、魚群の來遊を知る爲めに、この鳥の群を見て、漁業者は、魚群の存在を知る利益がある。此種はスコットランド及びアイルランドの北方にて、蕃殖するのである。

〔三〕 大形北地阿比(假稱) *Colymbus glacialis*, L.



第三百七十六圖 大形北地阿比

英名を「グレート、ノーザン、ダイバー」(*Great Northern Diver*) といふ。シエトランド諸島にて蕃殖する鳥である。體長は三尺に近く、頭は黒く、綠色と紫色を帯び、且つ光澤がある。背は黒く、短き白條を以つて、斑色となつて居る。頸と上胸部とは白く、これには黒斑を有し、胸と腹部とは白く、主として魚類を食ひ、鱗などの群を發見すること、至つて巧妙である。

(一) 鷺鷥科 (Podicipedidae)

嘴は伸直にして、長さど厚さとは種類に因りて異同がある。口角は眼の前面下に達し、脚は體の後端に位し、前向せる三趾の中、外趾は最長にして、後趾は小さく、趾は皆瓣狀且つ扁平にして、鈍き爪を有し、中趾の爪は、その内縁は、鋸齒狀となつて居る。翼は短く、眞正の尾翹を缺き、體は短く、頸は長いのである。

本科のものには、約二十四種を含み、北地産のものは、冬季は南方に移住する。常に淡水に棲み、その瓣狀の足を用ひて、巧みに水中を潜行し、小形の水棲動物、及び水生植物を食ひ、また水面より昆蟲を食ふのである。巢は濕りたる植物質より成り、水面より突出する水草叢中にあるが、また水面に觸れる枝上にありて、數個の卵を産むのである。卵は卵形にして、産下せらるゝ際には、純白色なれども、巢の濕りたる植物質の作用を受けて、汚れたる淺黄色、若くはチョコレート色となる。而して約三週間に於て孵化するのである。産れたる雛は、その性活潑にして、唯始めの僅少の日數丈、親鳥の背上にて運ばれ、親鳥に因りて養はるゝのである。

(一) 鷺鷥 カイツブリ 又もぐり 又もぐりつちよ 又かいつぶれ (方言)
Podiceps fluviatilis philippensis (Bonnat.)

英名を「リットルグリーブ」(Little Grebe)といふ。生殖季の羽毛は、頭上より後頸を経て、背部は一面に黒味を帯び、喉と頭の前方の上部は、赤褐色である。本邦の南部には、四時棲息し、英國より本邦まで、又南亞弗利加よりマレー群島及び濠太利亞に亘りて、産するのである。

(二) 赤襟 アカカイツブリ *Podiceps grisigena holboellii* (Reinhardt.)

英名を「レッド、ネックケツド、グリーン」(Red-necked Grebe)といふ。夏と冬とは、眼前は暗褐色で、頸は赤褐色である。この種は東京附近に見る鳥にして、極地にて蕃殖するのである。

(三) はじろ ハジロカイツブリ *Podiceps nigricollis*, Brehm.

英名を「ブラック、ネックケツド、グリーン」(Black-necked Grebe)又「イーアド、グリーン」(Eared Grebe)といふ。蕃殖季の羽毛は、頭、頸、胸は共に黒く、眼後には、黄色の羽總を有する。本邦に普通の種類にして、その分布は、南亞弗利加、歐洲の中央部、露西亞、南西比利亞及び支那に亘つて居る。

(四) みみか ミミカイツブリ *Podiceps auritus* (Linn.)

英名を「スクラボニアン、グリーン」(Solavonian Grebe)又「ホルンド、グリーン」(Horned Grebe)といふ。蕃殖季の羽毛は、耳覆は黒く、前頸は栗色である。この種は極地にて蕃殖する種

類である。

〔三〕 海雀科 (Alcidae.)

英に「オウクス」(Auk)と總稱する。大きは鷲大より、小なるは雲雀位である。嘴の形状は、種屬に因つて變化すれども、口角は眼下にまで擴がつて居る。脚は體の中央部よりも遙かに後方に位し、爲めに脚にて立つときは、その體は殆んど直立するが如く見ゆる。跗蹠部は短く、且つ後趾を缺き、前方にある三趾には、蹠を有するのである。翼は短く、且つ狭く、尾も亦短い。頸は中庸の長さを有し、體は丈夫に、且つ重々しく見ゆる。毛色は雌雄に因つて變化はない。

本科のものは北半球のみの海に産し、主として高緯度の處に棲んで居る。而して蕃殖期に際してのみ、陸地に近づいて、常に群居するのである。別に巢を造ることなく、暗礁若くは穴中に、一卵若くは二卵を産む。卵は大きく、多少圓錐形をなし、且つ斑紋を有するのである。その食物は、魚類、甲殻類等の如き海産動物である。よく水中を潜行し、その游泳するや、脚を用ひずして、半ば閉ぢたる翼を用ひるのである。

〔一〕 つのめつり Fratercula corniculata (Naum.)

英名を「ホルン、バツフイン」(Horned Puffin) 又「ホルン、アイド、バツフイン」(Horn-eyed



りごめのつ 圖七十七百三第 (After Seebohm)

*英名を「ホルン、ビルド、バツフイン」(Horn-billed Puffin) といふ嘴は殆んど頭と同長にして、蕃殖時季に於ては、峰線の基部に、縦扁なる角質の隆起を有するのである。體の上部は暗色で、頭咽喉、體側は鉛灰色で、他の體下部は白色である。この種は北海道沿岸に棲息し、冬は本邦の南部に來るのである。

〔三〕 えん

びりか

Lunda cir-
rhata (Pal-

l.)

英名を「タフテ

ッド、バツフイン」

(Tufted Puffin) とい

ふ。峰線の基部に



(After Seebohm) 鳥知善 圖八十七百三第

Puffin)といふ嘴の峰線の基部には隆起物がない。體の上部は黒色、下面は白色にして、喉を横過する黒帯を有する。この種は千島に産するのである。

〔二〕 善知鳥又ぜん

ちてふ Fratercula

monocerata (Pall.)*

内外普通動物誌

は圓筒狀に似たる隆起を有する體の上部は煤黒色にして、下部は褐色である。蕃殖期の羽毛は、頭側は白色にして、眼上より後方に向ひて垂れたる、總狀の毛を有するのである。この種も亦千島に於て蕃殖するのである。



かりびさえ 圖九十七百三第
(After Seebohm)



めすみうげひらし 圖一十八百三第

〔四〕 うみあふむ
Simorhynchus psittaculus (Pall.)

英名を「バラキート、オークレツク」(*Parakeet Anklet*)といふ。上嘴を側面より見るときは、殆んど橢圓形を呈する。體の上部は灰黒色で、下部は白く、嘴は橙赤色である。この種も亦千島に産するのである。

〔五〕 エトロゾ海雀 *Simorhynchus cristatus* Illus (Pall.)



むふあみう 圖十八百三第
(After Seebohm)

英名を「クレストテッド、オークレツク」(*Crested Anklet*)といふ。蕃殖期に於ては、嘴は橙赤色にして、先端は角色である。この種も亦千島にて蕃殖するのである。

〔六〕 しらひげ海雀 *Simorhynchus pygmaeus*, (Gmel.)

英名を「ホイスカード、アウクレツク」(*Whiskered Anklet*)といふ。嘴は濃紅色にして、先端は白く、眼前部に、白色の羽毛が、總狀をなして居る。千島にて蕃殖し、冬は本州沿岸に來遊するのである。

〔七〕 小海雀 *Simorhynchus pucillus* (Pall.)

英名を「リースト、オウクレツク」(*Least Anklet*)といふ。嘴は暗色にして、先端に濃紅色を帯ぶ。生殖時季には、峰線の元には、小形の瘤起がある。體の全長約五寸にして、雌の背部は白く、體の下面は白色である。而して生殖時季には、胸部に暗色の斑を帯ぶるのである。額部に尖りたる白き羽毛を交へ、眼下後部より耳羽に白斑を有する。千島よりペーリング海峡の諸島にて蕃殖し、冬季日本海の沿岸に移動し來るのである。(動物學雜誌三百八十一號波江元吉氏に據る)

〔八〕 まだらうみすゞめ *Brachyrhamphus perdix* (Pall.)

英名を「バートリツジ、マーレレット」(*Partridge Murulet*)といふ。體の下部は白味を帯び

これには暗色の斑紋を有する。冬季は千島より横濱にまで來遊するのである。

〔九〕 うみがらす *Alca troile* (Linn.)

英名を「カリフォルニア・マアレ」(California Murre)といふ。頭上と後頸とは、灰褐色にして、上嘴の口角に近き切縁部は、暗色である。尾翹は圓い。この種は、千島及び北海道にて蕃殖するのである。

〔一〇〕 かんむりうみすゝめ *Synthliboramphus wumizusume* (Temm.)

英名を「テンミンクス・マールレット」(Temminck's Murrelet)といふ。額には、細長なる黒色の羽毛より成れる冠を有し、常に之を後方に傾けて居る。この種は、伊豆七島及び長崎近傍に於て蕃殖するのである。

〔一一〕 海雀 *Synthliboramphus antiquus* (Gmel.)

英名を「ベアリングス・マールレット」(Bering's Murrelet)といふ。生殖期の羽毛は、頭の一部と頸の前部とは、黒色にして、頭上には冠羽を有しないのである。冬季の羽毛と、幼鳥の羽毛とにては、咽喉の全部、並に頸の前部は白色である。この種は、千島に於て蕃殖し、冬季は南方長崎にまで達するのである。

〔一二〕 けいさふり *Uria carbo* (Pallas.)

英名を「スウチイ・ギイレモット」(Sooty Guillemot)といふ。峰線は殆んど伸直にして、その末端に近く、急に曲つて居る。嘴は黒く、眼の周囲には、白色部を有する。腕蹼の先端には白色部なく、生殖季の羽毛は、體の上下両面共に黒いのである。また脚は赤い。この種は千島及び北海道にて蕃殖し、冬は本邦の南部に來遊するのである。

〔一三〕 うみばつ *Uria columba* (Pall.)

英名を「ピジョン・ギイレモット」(Pigeon Guillemot)といふ。峰線の模様、足と嘴との色は、前種と同様なれども、眼の周囲には白色部がない。この種は千島にて蕃殖するのである。

〔四〕 ペンゲイン科 (Spheniscidae)

嘴鞘には、溝を有し、口角は眼の前方に位する。頸は短く、體の全觀は肥大して居る。脚の跖蹼部は甚だ短く、且つ幅廣く、三趾は前向し、皆蹼を有し、後趾は甚だ小さく、その位置は、脚の内側の上方に位する。翼は權狀をなし、且つ扁平にして、唯肩に於てのみ、動くのみである。尾は短いか、又は中庸大にして、無数の羽毛を有する。羽毛は非常に密生し、外觀は鱗狀を呈する。殊に翼に於ける羽毛は、著るしく鱗狀を呈して、眞正の蹼を有す。

ることはない。

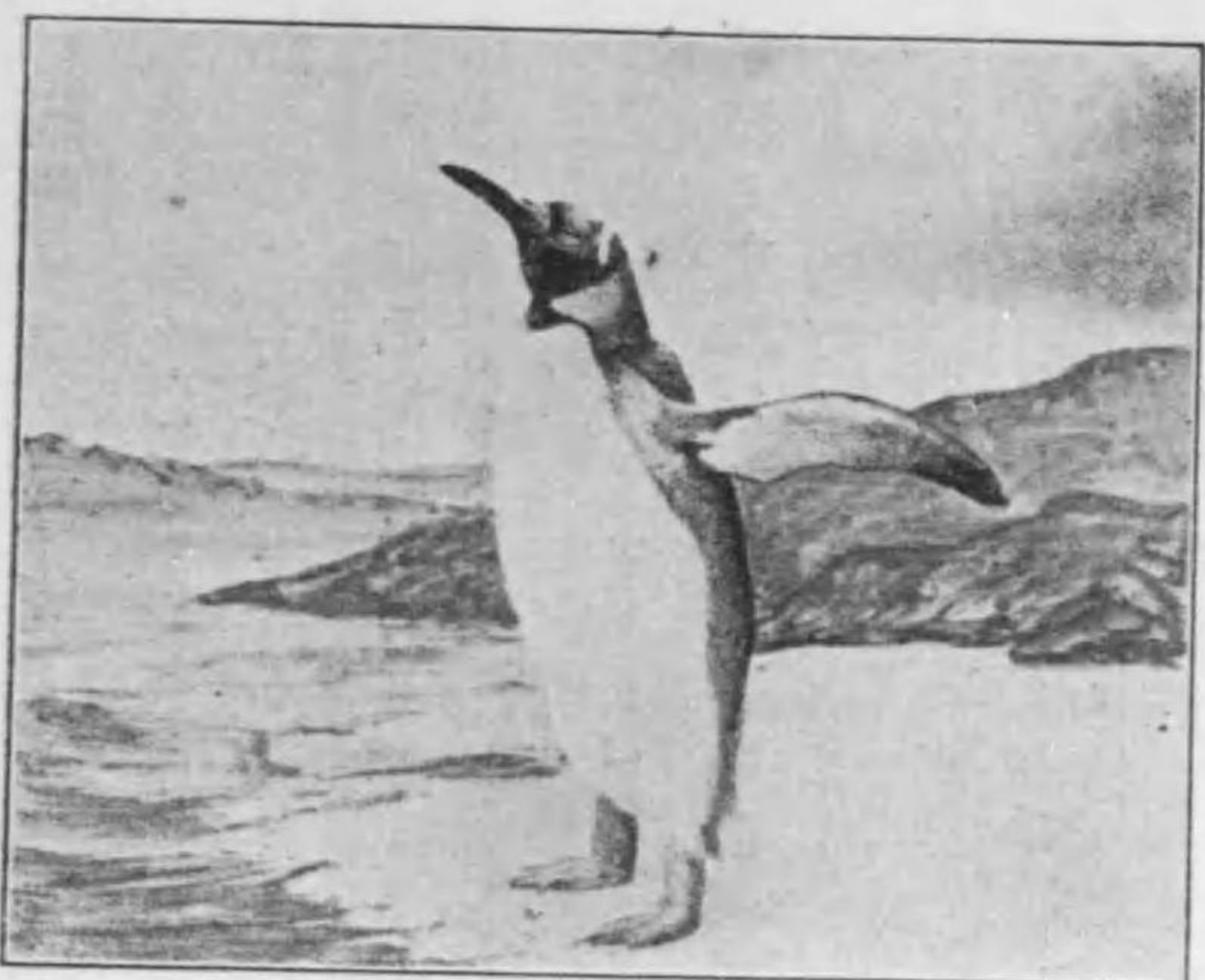
本科のものは、南半球の海洋に産し、約十六種ある。陸上にありては、趾先にて歩行すれども、行歩は極めて拙劣にして、千鳥足にて歩くか、又は跳躍する位であるが、一たび水中に入れば、その游泳實に巧妙にして、翼を用いて潜水するのである。而して時々水面に跳躍し出づること、恰も海豚の如しである。

〔一〕 王ペンゲイン

Aptenodytes patagonica, Forst.

英名をキングペンゲイン (King Penguin) といふ。本科中の最大なるものにして、高さは約三尺五寸に達し、時には約八十封度 (即ち我が九貫六百七十七匁許) に達するのである。

〔二〕 黒足ペンゲイン *Spheniscus demersus*, L.



王ペンゲイン 圖二百八十八第

〔英名をブラックフーテッドペンゲイン (Black-footed Penguin) 又ケープペンゲイン〕

(Cape Penguin) といふ南亞弗利加及び亞米利加に産する鳥である。

第八目 走禽類 (Cursorae)



黒足ペンゲインの群 圖三百八十三第

この類の翼は頗る退化し、或る種類にては、外部より之を見ることが能はざるものがある。胸骨は、他の鳥類の如く、幅廣きことなく、且つ龍骨突起なく、鎖骨の發育も亦不充分にして、骨髓は空氣を含める囊なく、至つて重いのである。故に飛翔することが出来ないものである。之に反して、脚は非常によく發達し、その骨は長く、強壯にして、太く、殆んど馬の脚の如く堅硬である。脚には、二趾若しくは三趾を具へ、その歩行は、頗る迅速である。この類は亞弗利加、亞米利加、及び濠太利亞に産するのである。

〔一〕 駝鳥科 (Struthionidae)

現存する鳥類中の、最大のものにして、雄では體の高さが、六尺乃至八尺に達する。嘴は短く、伸直且つ扁平にして、口角は眼の中央下に位する。脛骨の關節部は突隆し、且つ甚だ丈夫である。跗蹠部は長く、又強壯にして、脚には唯

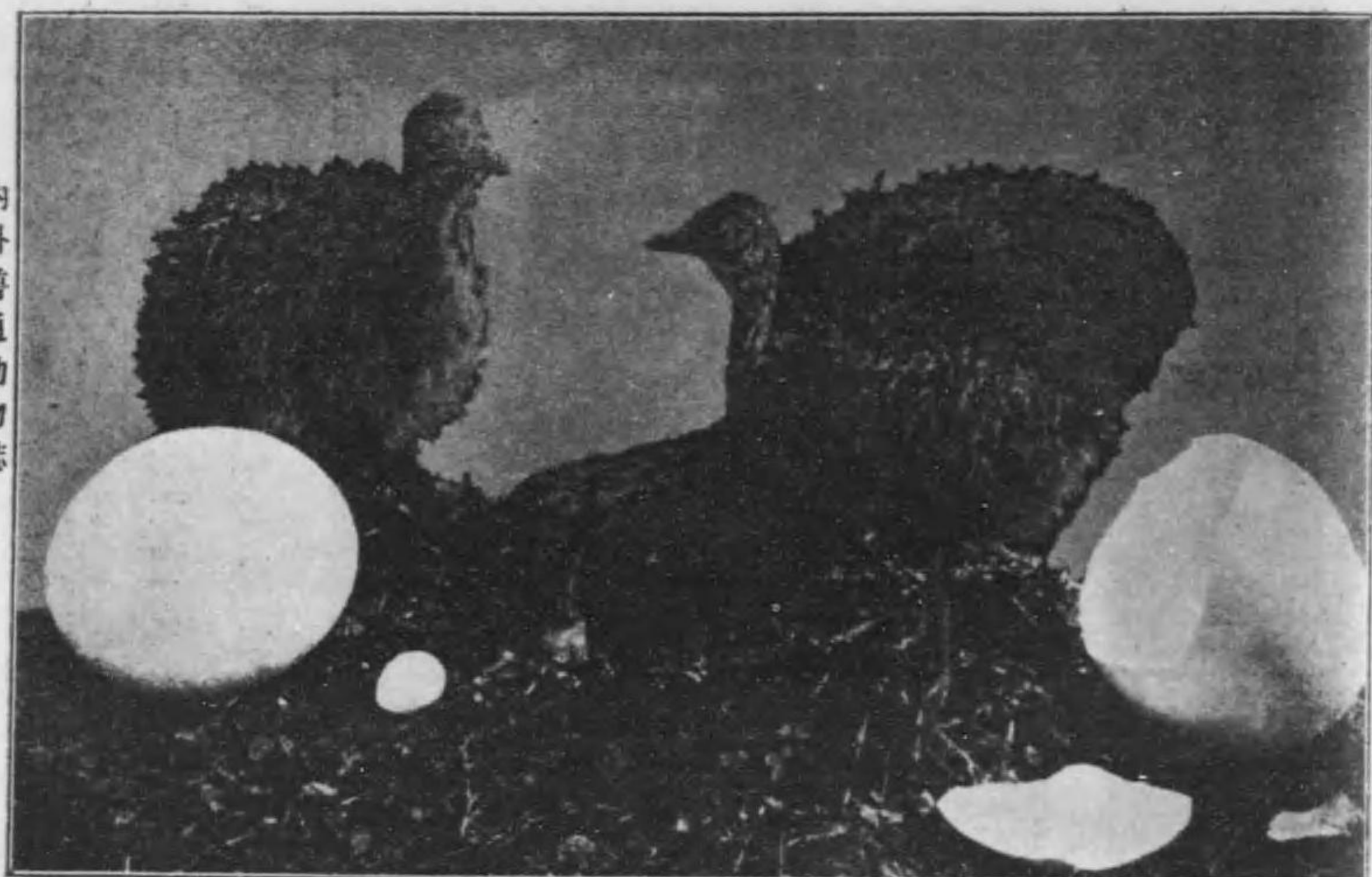
第三第四趾のみを有し、第三趾は非常に大きく、且つ絶へず成長し、これには爪を有するのである。而して第四趾は小さく、これには爪がないのである。而して二趾共に、その基部に於て、膜に因りて連結せられて居る。



毛羽の鳥駝 圖四十八百三第
(From Cawston Ostrich Farm Price Lists)

立ち、且つ屈撓性に富んで居る。雄にては、翼と尾とに生ずる羽毛は、白色なれども、その他は濃黒色であるが、雌は帶褐灰色である。本科のものは、亞弗利加及び亞刺比亞の廣濶なる砂地に産し、雌は雄に因つて掻き穿たれたる砂中の穴に、許多の卵を産む。日中は雌に、夜間は雄に因つて温められ、太陽の光線に曝らして、その温熱を受けて、卵の孵

翼は小さく、唯肘關節に於て曲り、最初の二指には、爪を有するのである。頸は非常に長く、體は瘠せて居るが、尾にはよく羽毛が生へて居る。羽は僅に翼と尾とにのみ存し、頭及び頸にあるものは、茸毛状をなし、また茸毛状をなせる睫毛を有する。翼には覆羽なく、羽毛は綿毛である。その質は屑細にして、波



圖五十八百三第 雌の鳥駝及び圖較比のニ卵鶏ニ卵の鳥駝 (After Edw. H. Mitchell)

化を早めることはない。卵は乳白色である。その形は、圓味を帯びたる卵形にして、非常に光澤がある。卵は凡そ六週間許にして、雌となる。雌は帶褐黄色の斑紋を有し、産まるとや否や、自ら食を求めることが出来る。而して頭と頸とには、黒の斑紋を有する灰色の綿羽を有し、また體には、剛毛状の綿毛を有するのである。

〔一〕 駝鳥又亞弗利加駝鳥

Struthio camelus, L.

英名を「オストリッチ」(Ostrich)といふ。頸は肉色である。尤も頸に青味を帯びたる種を「ソマリ駝鳥」(Somali Ostrich) (*Struthio molybdophanes*)として區別する學者もある。充分に成長せる雄では、高さ八尺許に達し、體重は約三

十六貫二百八十八匁に及ぶものがある。飛翔すること能はざれども、走行は極めて迅速にして、一時間二十六哩を走ることが出来る。全速力を出して走るときは翼を擴げて、帆の様に使用するといふとは、一般に信じられた説であるが、實際は、そうではない。



本標の(こ)雄の鳥駝 圖六十八百三第
(りあ度封十五百三重體尺九さ高は
(From Cawstor Ostrich Farm Price List)

翼を擴げるのは、唯駝け出し始めか、若くは短距離を走るときに於てのみであつて、長距離を疾走するときには翼を體に密着せしめて、之を擴げ出すことはない。然し翼を用ひて、急に體の方向を轉換することをなすのである。

南亞弗利加にては、斑驢、麒麟、羚羊の群と交ることがある。卵はその重量約三百六十匁もありて、その殻は鶏卵十八個の内容物を容るゝ位の大きさである。雌は一産に約十五卵を産むのである。卵は稍香氣を有し、食用に供せらるのみならず、卵殻は非常に硬く

且つ光澤あるを以て、コップとして使用せられて居る。

駝鳥は常に植物の葉、種子、果實を食し、また昆蟲、軟體動物、及び小形の爬蟲類を食ふ。その他木片、金屬片、石片、骨片、玻璃片等をも嚙下する。その性質は怯懦にして、且つ警戒



卵と雄雌の鳥駝 圖七十八百三第
(From Cawston Ostrich Farm Price List)

性に富み、嗅覺は甚だ不完全なれども、視力及び聽力は、大に發育し、よく六哩も距りたる所をば、見得るといはれて居る。飼育場に於ける雛が、早朝その飼小舎より、草原に放ち出さるゝときは、直ちに跳び出して、二三百碼も走りたる後、一度に立ち止り、翼を舉げて、グル／＼回轉する僻がある。成熟せる親でも、大勢で走るときは、やはり同様に、回轉をなす僻があつて、殊に早朝起きて、草原に放ち出された際には、之を行ふのである。

蕃殖期に於ては、他の鳥類に見るが如く、雄間には、仲々烈しい争鬪を惹き起すことがあるのである。また、雄が卵を温めて居る時は、その性質甚だ亂暴となり、よく有力なる脚を用ひて、敵をば烈しく蹴るのである。嘗つて瀛車の進行し來るのを見て、大に怒りて、瀛車を目懸けて突進し來り、機關車の前面に近づき、之を蹴り、反つて、我身は寸斷せられたといふ、亂暴なものがあつたの

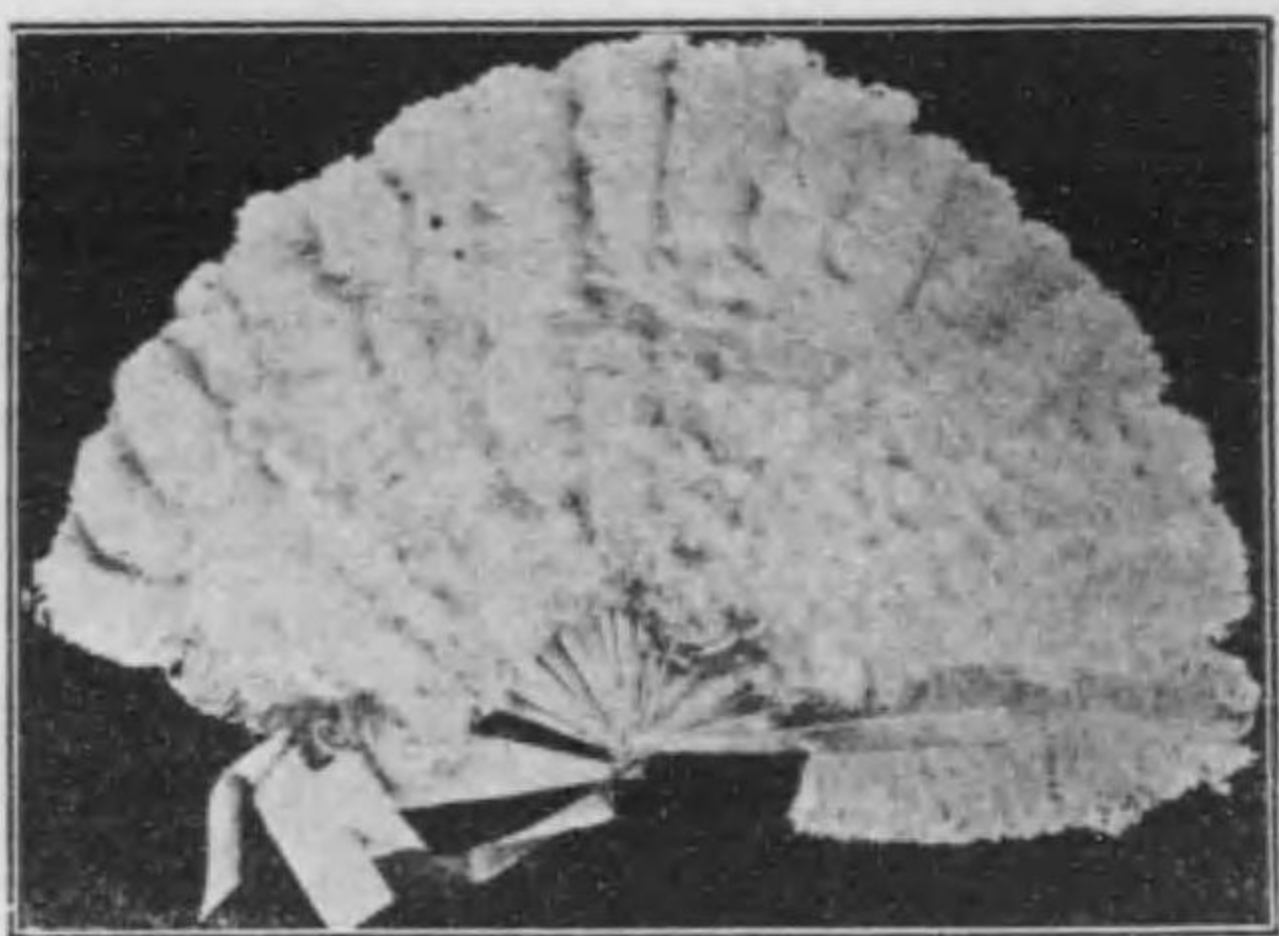
九〇二
である。駝鳥の敵は「チャツカル」其他の動物にして、雄は夜間巢にありて、勇敢に之を防
禦するのである。

ツマリランドの土人及びベツキン人は、駱駝に乗りて、駝鳥を追掛け、充分に鳥群に
近いてから、毒矢にて射殺すれども、サハラにては、馬に乗つて之を狩るのである。南亞
弗利加に住むブツシユ人は、毒矢にて、駝鳥
を射殺すれども、又せしめ陷阱で、生擒することも
あり、又投縄で、生捕るのである。また最も巧
妙な捕獲法は、駝鳥が水を飲みに来る水邊
に隠れて、銃器で打つのであるが、更らに
一層巧妙な捕獲法は、駝鳥の巢を探し出し、
その中にある卵を取り出し、置きて、人がこ
の中に隠れて、鳥の歸來するを待つて、毒矢で射殺することである。



第三百八十八圖 駝鳥の羽毛にて飾る長巻をへる少女
第三百八十九圖 駝鳥の羽毛にて製する扇子

駝鳥の翼及び尾に生ずる羽毛は、帽子、衣服其他の裝飾用として、珍重せられて居る。
而して今より約五十年許前には、この鳥を飼育することが、未だ工夫せられざりしを
以て、全く野生の鳥を捕獲して、羽毛を取つたものであるが、西曆千八百六十七年頃に



第三百八十九圖 駝鳥の羽毛にて製する扇子
(From Cawston Ostrich Farm Price List)

於て、始めて南亞弗利加のケーブ殖民地に於て、その飼養を企てられ、その後駝鳥の飼
養は、東部州に於ては、最も重要な事業の一つとなつたのである。而して西曆千九百
四年の調査に據れば、殖民地にて、飼養せる駝鳥の總數は、實に三十五萬七千九百七十
羽の多數に上り、これより剪り取りて、輸出せし羽毛は、
四十七萬、三百八十一封度ポンドの多量に上り、その價格は、實
に百五萬八千九百八十八磅ポンドであつたのである。羽毛の
價格は、普通、佳い毛では、一封度大凡そ我が七八十圓位
であつて、特別に佳良なるものでは、二百七十二圓餘に
上るものもある。今日にては、南亞弗利加の外、濠太利亞
及び亞米利加のカリフォルニアにては、盛んに飼育し
て居る。カリフォルニアのカウストン駝鳥園 (Cawston
Ostrich Farm) は千八百八十六年の創立である。今本書中
に挿入せる駝鳥、その羽毛などの寫眞は、同園發行(千九百十年より
十一年に至る)羽毛價格表なる冊子よ
り轉載したものである。

〔二〕 亞米利加駝鳥科 (Rheidae)

體の高さは約四尺位か、若くはそれより低い位である。嘴は扁平にして短く、且つ中央に鼻孔を有し、口角は眼の中央下に位する。脚の跗蹠部は長く、且つ三趾を有し、その基部には膜を有することはない。また後趾を有せざるのである。翼は明らかに大きく、且つ普通の鳥の如く、臂及び腕關節に於て摺むことが出来て、體を被覆するのである。が、尾は外部より見へない。而して體全體の形狀は、著しく卵形である。頭と頸と腿とは、羽毛を有するのである。

本科のものは、英名を「リーア」(Rhea) 又「アメリカン・オストリッチ」(American Ostrich) といひ、又「ナンデュー」(Nandú) と呼ばれて居る。南亞米利加のアルヘンテナ、バタゴニア等の平原に、小群をなして棲息し、一雄は五乃至七雌と交はるのである。年々その羽毛を取る爲めに、多数が捕獲せられたるを以つて、現今は、大にその数を減少したのである。雌は雄が掻き出して造りたる、地中の穴に産卵するのである。ダーウキン氏が、ビーグル號の航海記に據れば、氏が採集した四個の巢の中で、三個の巢は各二十二卵を有し、他の一巢は、二十七卵を有したのである。また一日馬背に跨りて、搜索に出懸けたるに、六十四卵を搜索したのであつたが、その中四十四卵は、二の巢にあつたもので、残りの二十卵は、一つ宛其處らに、散在せるものであつた。卵を孵化する役目は、雄のみ任ずる。

所であるが、雛が孵化せば、雄は之を伴ふて徘徊するのを見るのである。雄は巢上にあつては、地に密接して横臥する。……數羽の雌が、同一の巢中に産卵することは、ゴーチア人(Gauchos)の説く所衆説皆一致する所である。而して四五羽の雌が、日中相續いて、同一の巢に行きて、番をすることがあつたことを、斷乎として主張せる人もあつたのである。……且巢中にある卵の數は、二十乃至四十にして、時には五十位のこともある。又時には七八十もあるさうである。云々

卵は卵形、滑澤にして乳脂色で、斑紋がない。而して約六週間に於て孵化する。生れたる雛は、その性活潑にして、自ら食を索める。その綿毛は、茸毛狀をなし、これには、僅かに濃淡の縦條を有するに過ぎない。幼鳥の食物は、主として昆蟲なれども、成長せるものは、草、種子、其他の植物質を食するのである。

亞米利加駝鳥の長き翼羽は、剪み截られて、等等其他種々の用途に供せられ、皮は袋物等を製するに用ゆるのである。また幼鳥の肉は、柔軟且つ美味である。砂囊は、「ペブシ」を取るに用ひられて居る。

この科には次の二種を産する。

〔一〕 亞米利加駝鳥 *Rhea americana*, Lam.

英名を「コンモン・リーア」(Common Rhea)といふ普通の亞米利加駝鳥にして、二種の中では、大きき方である。羽毛は灰色にして、頭上と頸の基部とは黒い。而して乳白色の卵を産むのである。

〔二〕 バタゴニア駝鳥(假稱) Rhea darwini.

英名を「ダーウインス・リーア」(Darwin's Rhea)といふ前種よりも小さく、羽毛は褐色にして、白色の斑紋を有し、淡緑色の卵を産む。而してバタゴニアにのみ産するのである。

〔三〕 食火鶏科 (Casuaridae)

體の高さは、約五尺で、體長は六尺位である。嘴は短く、その中央には、鼻孔を有し、口角は眼の中央下に位する。脚の跗蹠部は、強壯にして、趾は三本を有し、その基部には膜を有することはない。また後趾も缺いて居る。翼は非常に小さく、且つ飛翔することが出来ない。鵝鵝えみぎにては、翼には一爪を有し、且つ翼をば曲けること能はざれども、食火鶏にては、翼は臂に於て屈曲し、爲めに前腕と手とは、下方に向いて居る。尾部には、よく羽毛を生ずれども、特別に尾として、顯はれて居ないのである。羽毛は甚だよく茸毛状をなし、甚だしく分離して、硬固なる纖維状の觀を呈するのである。而して他の鳥類と異り、羽軸は二つありて、主なる羽軸の外に、更らにこれと同長なる羽軸を有するを以つて、羽毛は、恰も二本宛生するが如く見ゆるのである。羽毛は雌雄に因りて、異なることなけれども、雌よりも大きいのである。



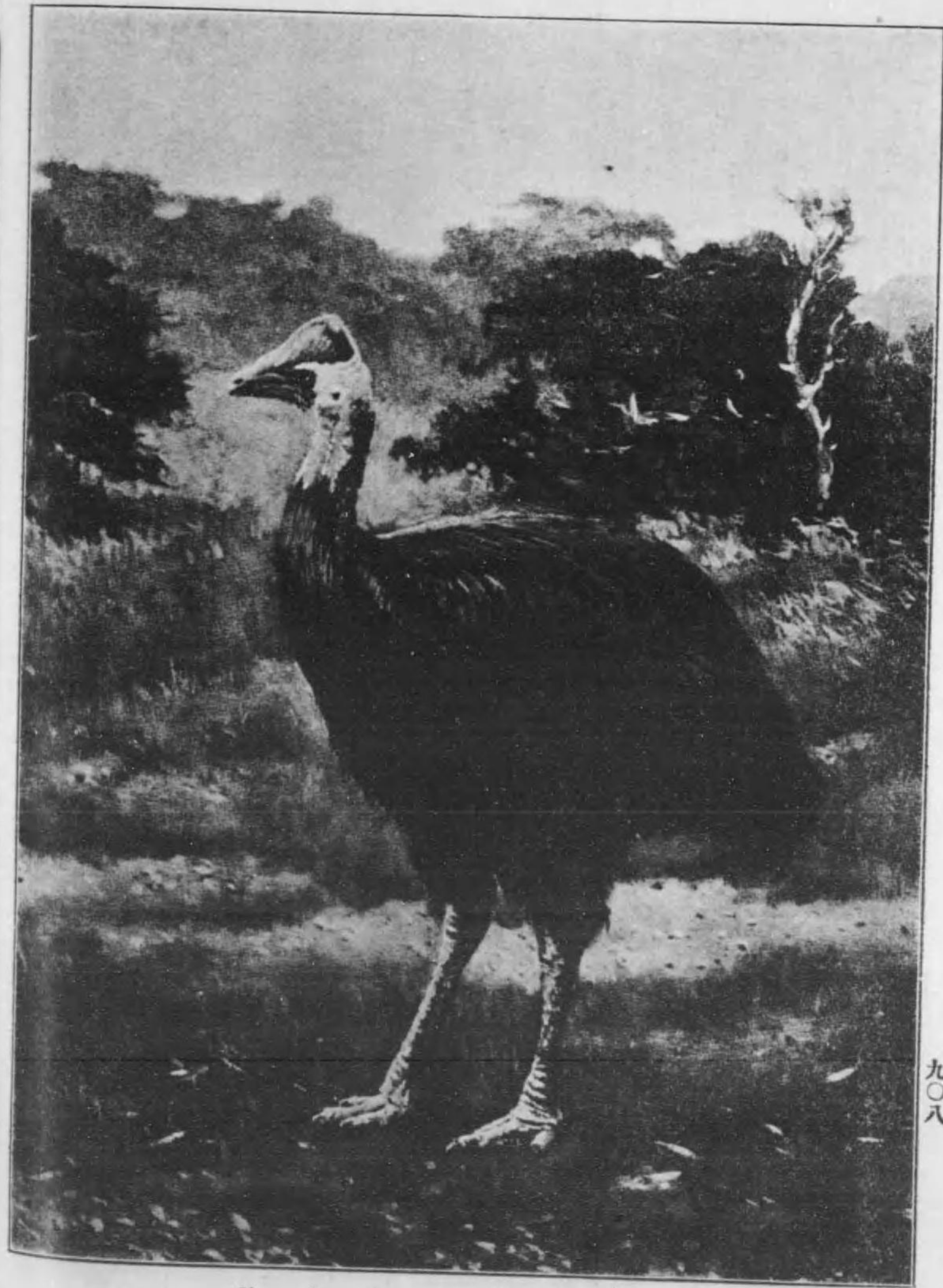
第三百九十九圖 亞米利加駝鳥 雌 (Photo by H. Noble, Esq.)

地上に穴を造りて巢となし、この中に、多くの卵を産む。卵は卵形にして、卵殻の表面は、粗糙である。色は亞米利加駝鳥の卵の如く、白色にあらずして、鵝鵝えみぎにては、暗緑色なるが、食火鶏にては、淡緑色である。雄のみ卵を温め、卵は凡そ七週間乃至九週間にて孵化する。雌は産れて直ちに自ら食を求め、茸毛状の綿毛には、黒と白との縦條が、交互に排列するのである。この科の食物は、主として植物質にして、草、果實及び種子等を食するのである。

鵝鵝えみぎは、濠太利亞大陸に産し、食火鶏は、北部濠太利亞及び新ギネア、セララン、アルー島に産する。

〔一〕 食火鶏 Casuarus galatust, Vieill.

英名を「カゾワリー」(Cassowary)といふ。頭部は、成鳥にては裸出し、頭頂には、骨質の兜を



九〇八

第 三 百 九 十 一 圖 食 火 鷄
(Photo by S. G. Payne & Son)

有し、頸は短く、その前面には箸状の肉垂が垂れて居る。嘴は扁平にして、灰黒色である。脚は灰色で、これには三趾を有する。内趾の爪は大きく、且つ距状であつて、蹴るのに用ひて有力なる武器である。成鳥の羽毛は輝ける深黒色で、質は細く柔軟にして、養の如く垂下する。而して腕翹の翹は棘状である。常に林地に棲息し、特に「マランタ」一種の澁き果實を嗜好する。巢は落葉若くは石礫多き地の凹處である。その性質は、頗る怯懦にして、爲めにその姿を見ることは稀れである。

土人は、この鳥の肉を食ひ、また皮をば、敷物及び靴拭に使用する爲めに、盛んに狩獵するを以つて、現今にては、この種は大に減少したのである。

(一) 鵝 鶩 *Dromaeus novae-hollandiae*, Gray.

英名を「エミウ」(Emu)といふ。頭上には兜なく、且つこの部と頸とには羽毛を生じ、腕翹の翹は棘状をなすことなく、又内趾には、大なる爪を有するとはないのである。體の長さは五尺に達し、毛色は淡褐色と灰色とを帯びて居る。雌は雄よりも大きく、且つ雄と異りて、喉部に於て、氣管の内壁が伸出して生じた一囊を有し、蕃殖期に於ては、この囊に出入する空氣を加減して、一種特有なる「ブン」いふが如き、高調の叫聲を發するのである。而して蕃殖期は、六月より始まりて、九月まで繼續し、巢は平原の裸出せる

砂地の凹みに造られ、一産に七乃至十三卵を産み、雄は孵化の勞に任じ、卵は凡そ五十四乃至六十四日にして孵化して、雛となるのである。

この種は、以前は濠太利亞大陸の全部に棲息したりしも、殖民地の發達するに従ひ、今は漸々内地に逐ひ遣られ、且つ其數を減じたりといふ。この鳥はよく水に入るを好み、幅廣い川を横りて、游泳することもあるのである。また、その肉は美味だといはれて居る。

〔四〕 鸛駄鳥科 (Apterygidae)

大さは、牝鶏位にして、雌は雄よりも大きいのである。嘴は細長且つ伸直にして、鸛の嘴に似て居る。その先端には、鼻孔を開き、口角は眼下に位し、その基脚には、髭を有するのである。頭と眼とは小さく、頸は寧ろ長く、脚の跗蹠部は短く、強健にして、鱗片を以つて被はれ、三趾は前向し、その基部には膜なく、有力なる爪を具へ、地を搔撥するに適する。後趾は甚だ小さく、且つ脚の上方に位して、地に着かない。膝關節部は、大きく且つ強壯である。翼は極めて小さく、外部より認むることが出来ない。而



雌の鸛駄鳥の目五つれ生 圖二十九百三第
(Photo by D. Le Souc), (From Living Animal of the World)

して、屬名「アプテリクス」(Apteryx)は、希臘語の「無翼の義である。翼の先端には、爪を有する。體の羽毛は毛状をなし、且つ叢毛の如く垂下し、雌雄間の區別はないのである。

雌は、爪にて穴を穿ち、これに、白色の卵二個を産む。卵は圖に示すが如く、鳥の大きさに比して、極めて大きいのである。雄のみ卵を温め、卵は六週間にして、孵化して雛となる。雛は自ら餌食を索め、一樣なる色をなせる茸毛状の綿毛を有するのである。この鳥の食物は、蠕蟲、昆蟲及び漿果にして、また消化を助くる爲めに、小石を呑むのである。

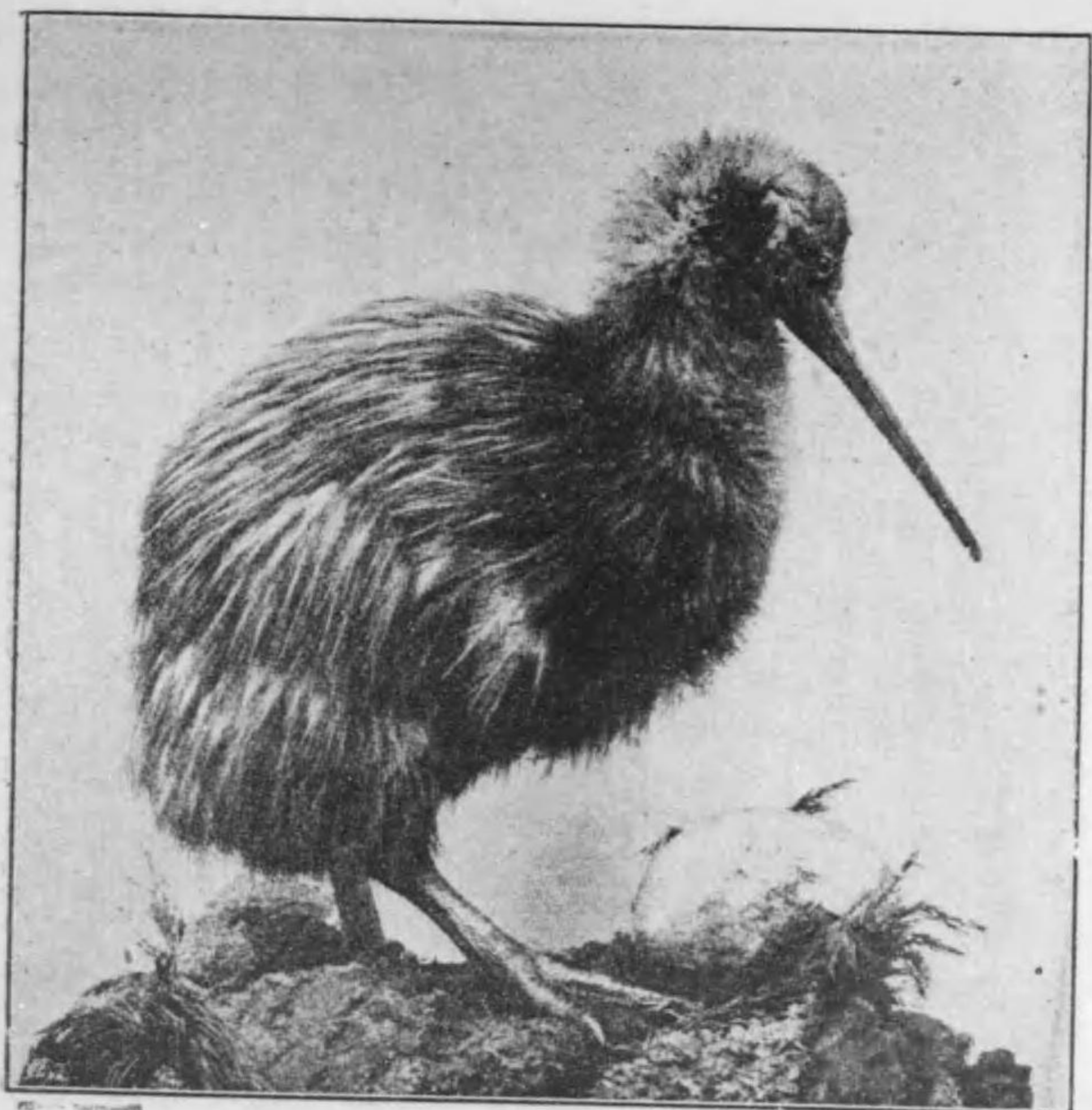
晝間は地中に穿ちたる穴中に潜伏し、夜間出で、徘徊し、この際、キ、イ、ウイと聞ゆる嘯き聲を發する。そこで土人は「キ、ウイ」(Kiwi)と呼んで居る。尤もこの鳴聲は、夜遅くは聞へずして、夜半には、最早鳴かないのである。この科のものは、ニウ、ジーランドに産し、四種ある。その肉は食用となり、羽毛は蓆を造るに用ひらるゝのである。

〔一〕 鸛駄鳥(丘博士命名) Apteryx australis, Shaw.

英名を「シャウス、キ、ウイ」(Shaw's Kiwi)といふ。本科中では、最大のものにして、體長は稀れに、二尺二寸六分に超ゆるものがある。羽毛は褐色にして、淡色の縦條を有するのである。

〔二〕 小形鸛駄鳥(假稱) Apteryx owenii.

英名を、オーエンス、キークワイ(Owen's Kiwi)といふ。本科中の最小なるものにして、ニュージーランドの南島に産する。羽色は横條ある灰色である。



第三百九十三圖 鳥駝鷓の卵(卵の體鳥に比して大なるを見よ)
(From Parker and Haswell)

第三綱 爬蟲類 (Reptilia)

爬蟲類の血液は、外界の影響に左右せられて、常に一定の温度を保有することが出来ない。若し向陽の場所に出れば直ちに体温は、太陽の光熱を受けて、高まり。また冷所に隠くれば、忽ちに体温が低下するのであつて、血液に一定の温度がない。されば哺乳類及び鳥類の有する血液の如く、常に血液固有の温度を有し、外界の影響に因りて、變化を受けざるものに對して、爬蟲類の如き血液をば、冷血といふのである。この類の多くは、卵生にして、生れて死する迄、肺臓に因りて、空氣を呼吸する動物である。

爬蟲類の體形は、一定せざれども、肢を有するものと、肢を有せざるものに、大別することが出来る。肢を有するものは、通例四肢あれども、時には一對のみを有するものがある。これには龜類の如く、箱狀の甲を有するものと、蜥蜴類の如く、略圓柱狀をなせるものがある。而して蛇類の大多數のもの及び蜥蜴類の中には、肢を缺くものがある。

爬蟲類には、脂肪腺及び汗腺なく、皮膚面には、殆んど腺を有せざるものである。表皮は角質に變じて鱗となり、真皮中にも、化骨して骨板を有するものがある。またカメレオンの如く、皮膚に色素細胞を有して、殊に著しく變色するものがある。

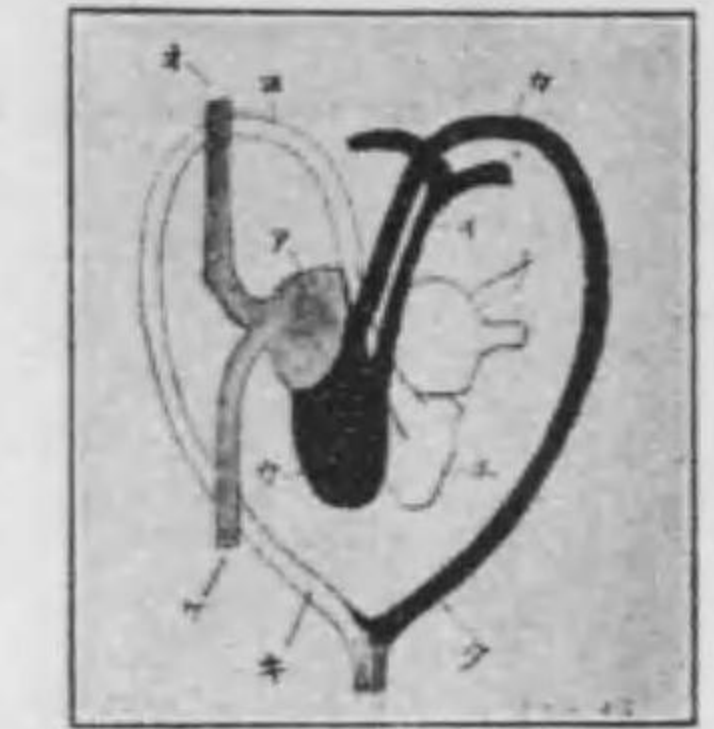
頭骨は、一個の髁状突起を以つて、脊柱と關節することは、鳥類と同一である。脊椎骨は、多くはその椎體の前部は凹み、後部は凸隆すれども、稀には前後共に凹めるものがある。肋骨は常によく發達し、時には蛇類の如く、體の全長に亘りて存在するものがある。下顎の頭蓋と關節するときは、必らず方骨と稱する一骨の媒介に因るものにして、蛇類及び蜥蜴類の方骨は、頭蓋と緩く關節して、互に動搖するが故に、口を廣く擴げることが出来るのである。

目は、蛇類及び守宮ヤモリの類にありては、角膜の前に、一の透明膜ありて、兩膜の間には、涙液を充たすのである。その他の諸類にては、この裝置を有せざれども、更らに上下眼瞼を具へて居る。蜥蜴類には、往々第三の眼を具へるものがある。これは極めて小さくして、顛頂部の正中線上に位するを以て、之を顛頂眼トピタマシといふ。人類等の松果腺に、相當するものである。

心臟の心耳は、全く二室に分れ、心室は不完全なる隔膜を存すと雖も、猶ほ一室に異ならずである。故に心室内にては、酸素に富める新鮮なる血液と、炭酸瓦斯に富める不潔なる血液とは、全く混淆するのであるが、特に鰐魚類にては、全く隔膜に因りて分離せる二心室を有するのである。蛇類、蜥蜴類及び龜類にては、肺動脈と大動脈幹とは、心

室の右方の部分に出づれども、鰐魚類にては、肺動脈は、右室より出て、大動脈は左室及び右室より出づるのである。而して大動脈は左右の二大幹に分れて居る。

腎臟は、腹腔の後方に位し、輸尿管は、極めて短小であつて、蜥蜴類及び龜類にては、排泄腔の前壁に於て、膀胱を有するのである。卵巢及び睪丸は、必らず二個ある。生殖輸管



第三百九十四圖 鰐魚の心臟の模式圖 (From Wiedersheim's Vertebrata) 耳心左(サ) 耳心右(ア) 大(ク) (キ) 脈動肺(イ) (エ) 室心右(ウ) 弓脈動 脈靜大上(オ) 室心左 脈靜大下(ケ)

は、長大且つ迂回して、輸尿管と共に、排泄腔に開口するのである。この類には、胎生するものあれども、多くは卵生である。卵は頗る卵黄に富み、卵白及び柔軟なる殻を有する。而して、雄は常に交接器を有するのである。

蛇類及び蜥蜴類の中には、地球の遙か北方に分布するものあれども、鰐魚類は熱帯及び暖帯に限りて産する。また龜類の中にも、熱帯地方に限りて、棲むものがある。而して寒帯及び温帯地方に棲息する爬蟲類にては、冬眠をなし、また熱帯産のものには、乾燥期に於て、夏眠をなすものがある。爬蟲類の大多數は、永い間、食物を攝取せずして、生存し得るのである。

爬蟲類を分ちて左の四目とする。

第一目 龜類 (Chelonia)

體は、甲に因りて被はれ、且つ函状をなすのである。

第二目 鱷魚類 (Crocodilia)

表皮が變じて鱗となるのみならず、真皮中には骨板を生じ、且つ覆瓦様に排列せる甲を有し、齒は顎骨中に嵌入する。

第三目 蜥蜴類 (Saurii)

表皮のみ變じて鱗となりて、真皮に關係を有することはない。齒は、靱帯に因りて、顎の上に附着するに過ぎずして、齒根を有することはない。

第四目 蛇類 (Ophidia)

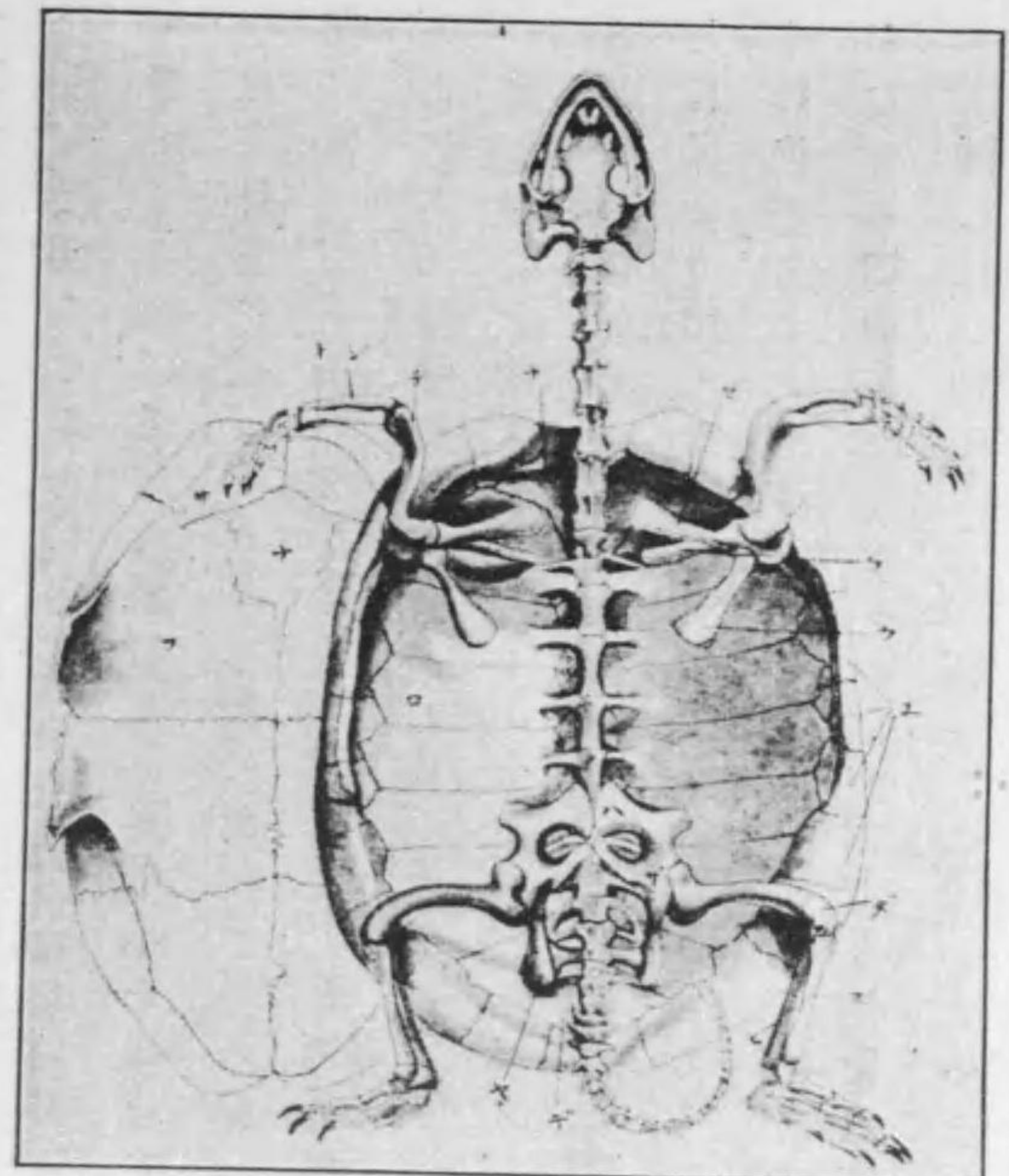
齒は靱帯に因りて、顎の上に固着するに過ぎざること、前目と同様である。多くは四肢を缺き、體は圓筒状である。

第一目 龜類 (Chelonia)

體は盤状をなし、函状の背甲と腹甲とを有し、その背面は隆起すれども、腹面は平坦である。而して是等の甲は、互に體側に於て癒着する。この部を橋といふ。而して甲の孔の中には、頭、尾、及び四肢を、出入せしめ得るのである。

背甲は、真皮中に生じたる骨質板と脊椎骨と肋骨等との癒合したものである。而して第二乃至第九脊椎骨の關節面が扁平となり、またその棘状突起も、扁平なる板状となりて、凸凹ある縫合に因りて、固く結合し、以て背の中央線に、縦列せる椎骨板となつて居る。この板の數は、八個なるが通例である。また是等の板の形狀は、四角、六角、八角等をなし、種屬に因りて、その形狀に異同がある。第一椎骨板の前方で、且つ第一脊椎の背部に當りて、一個の大なる骨板がある。之を頂骨板といふ。これは軟骨より化生したるものにして、椎骨板と同時に發育したものである。或る科即ち Chelydridae) には、肋骨の如き形狀をなすことあるが故に、或は肋骨となるべき部の變形せしものにあらざるか、この説がある。椎骨板の兩側には、八個宛の肋骨板がある。これは、第二脊椎乃至第九脊椎より出でたる、肋骨の扁平となりたるものにして、第一肋骨板は、常に最も幅廣く、最後のものは、最も小形である。次に第八椎骨板の後方正中線に於て、椎骨板と同列をなせる、髯骨板がある。これは膜質より化骨し來たるもので、その數は、普通三個なれども、時には二個若くは四個なることがある。また背甲の縁邊には、縁板がある。その數は、左右兩側共に十一個を常とすれども、時には十二個、若くは十個である。皆皮膚より化骨したものである。

腹甲は、主として骨板より成り、その数は九個より成り、その八個は左右相對すれども、一個は前端部の中央線に位するのである。而して是等の中で、その中央なるを、内腹

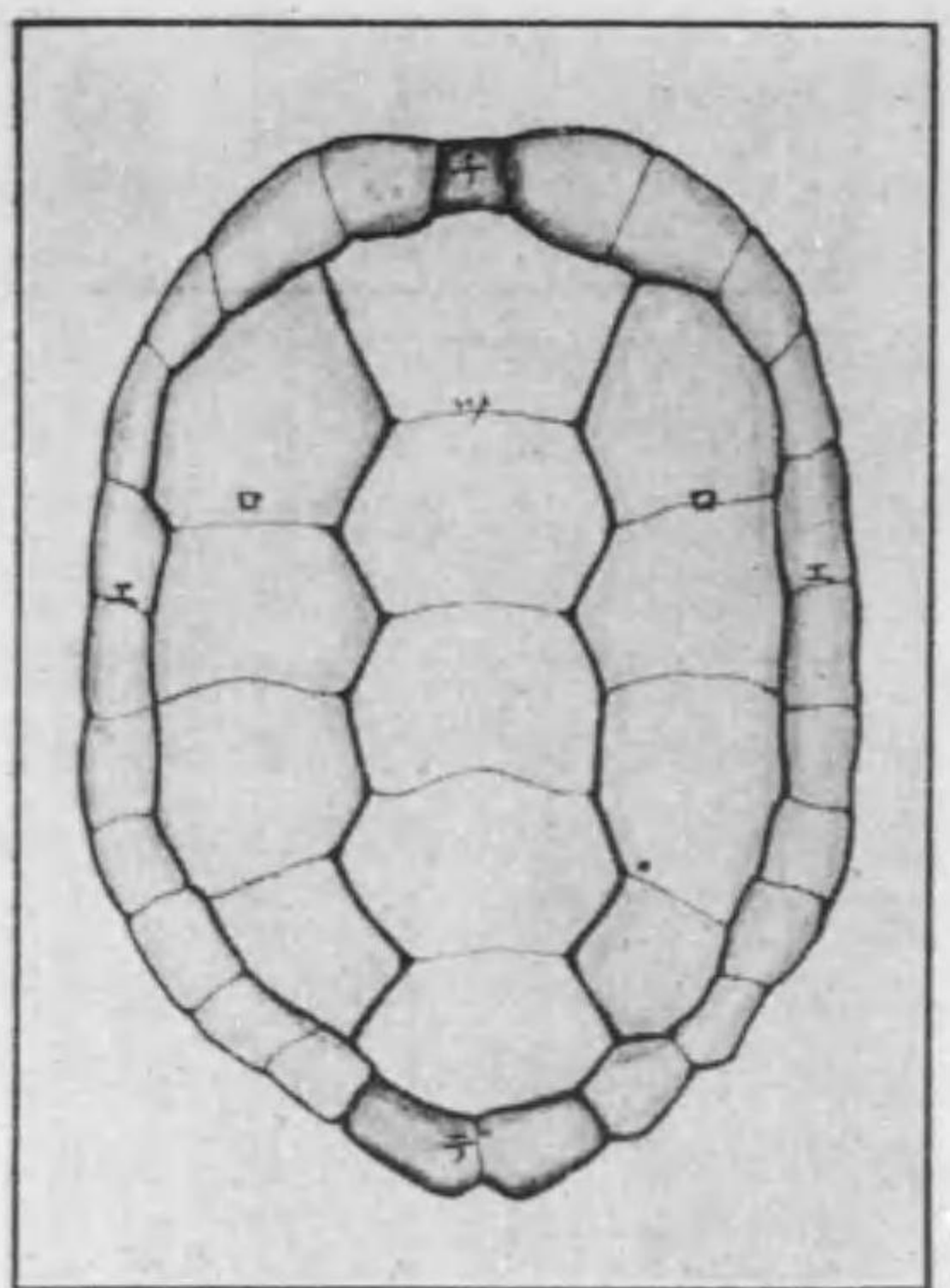


(After Claus) 骨格の種一類龜 圖五十九百三第
 膊上(ナ)骨尺(シ)骨腕(ト)板骨腹内(ナ)骨鎖(サ)甲腹(フ)
 板線(エ)骨喙鳥(ウ)骨脚肩(ケ)骨喙鳥前(セ)板骨頂(チ)骨
 骨臂(テ)骨坐(ザ)骨腓(ヒ)骨脛(ス)骨腿大(ダ)骨趾(ハ)
 板骨肋(ロ)板骨椎(ツ)骨胸(ヤ)板

甲板といふ、また對をなせるものを、前方より後方へ數へて、順次に上腹骨板、中腹骨板、下腹骨板、劍狀腹骨板といふのである。而して左右の上腹骨板は、他の動物に於ける鎖骨に相當し、中央なる内腹骨板は、鎖間骨に比敵すべきものである。而して腹面の内側には、

多くの筋肉が附着して居る。
 背腹兩甲共に、その全表面は、表皮より變質せる角質板を以つて、被覆せられて居る。

龜甲とは、この部分をいふのである。而してこの角質板は、皆數個の小片より成立するのである。背甲正中線にある、最前方なる一個を、頂骨板、又は頸甲といひ、後端にある一對のものを、臀甲板といひ、この頂骨板と、臀甲板との間の五板を、椎甲板、又脊椎甲、又中央板といふ。中央板の兩側にある四對のものを、肋甲板、又肋骨甲、又中央側板といふ。而して中央側板の外側に位する、小なる十一對のものを、縁甲板、又縁板といふのである。



甲背の龜水 圖六十九百三第
 板甲肋(ロ)板甲椎(ツ)板甲臀(テ)板骨頂(チ)
 板甲縁(エ)

は殊に屈撓性に富み、頸を甲函外へ出すことは、遅けれども、之れを内部に引き入れることは、極めて迅速である。而して頸椎は、八個の長き椎骨より成り、肋骨を具ふることはない。胸椎は十個にして、皆肋骨を有し、薦骨は二三個の骨片より成り、背甲の下面に突出し、尾椎はその數多く、且つよく動くのである。

頭は稍弓状をなし、頭骨は相互に緊と縫合して、以つて幅廣くなり、頭蓋の後端部の正中線には、長く後方に突出せる鋸状の突起を有し、顛頂骨は一対ありて、また大なる前頭骨を有する。方骨はその近傍なる骨の間に嵌入し居つて、頭骨の一部をなして、分離して居ないのである。顔面部は著しく短く、鼻骨を缺いて居る。顎骨は全く齒を缺き、堅き角質の鞘を以つて被はれ、鋭るごき嘴となつて居る。

皮膚の露出せる部分、即ち頭、尾及び四肢には、皆鱗を被る。四肢は種類に因りて、その構造及び作用を異にすれども、陸上に棲むものでは、よく匍匐し、また走るに用ひ、水棲のものにありては、趾に蹼を有し、之を用ひて、游泳するのである。而して海産のものにありては、四肢は、特に權状をなして居る。

眼は、閉ぢたる眼窩内に位し、眼瞼と瞬膜とを有する。卵はその數多く、皆石灰質の殻を被り、水邊の砂上に産み付けらるゝのである。

この類は、主として熱帯及び温帯に産し、主に植物質を食すれども、また軟體動物、甲殻類、及び魚類の如き動物質を食するものも多い。龜類を分ちて、次の二亞目とする。

第一亞目 龜類 (Athecae)

背腹兩甲には、角質板を有することなく、強韌なる鞣皮様の被覆物を有し、背甲

には、七個の骨質龍骨狀の板を有するのである。而して脊椎と肋骨とは皆遊離し居つて、背甲に附着することはない。頭には、唯暗色、且つ平滑なる皮膚を有するのみである。四肢は巨大にして、橈足狀をなじ、游泳に適するのである。

第二亞目 眞正龜類 (Thecophora)

脊椎と肋骨とは、共に癒合して背甲を形成するのである。前亞目を除く外、龜類の殆んど全部は、皆この類に屬するのである。

第一亞目 龜類 (Athecae)

(一) 龜科 (Sphargidae)

背甲を成せる各板片は、その縁邊を以つて、嵌工細工の如くに相接合し、腹甲は僅に八片より成り、且つ内腹甲板を缺いて居る。四肢は橈足狀をなし、之れには爪を有することはない。本科には次の一種を有するのみである。

(一) 龜 又やさば 又たからがめ Sphargis coriacea, L.

英名を「リーザリー、タートル」(Leathery Turtle) 又「ルース」(Luth) 又「トランク、タートル」(Trunk Turtle)

the Turtle)といふ。この種は、太平洋、大西洋、印度洋の熱帯及び亞熱帯の海に産し、本邦には紀伊、伊勢灣、丹後等にて捕獲せられて居る。而してフロリダ及びブラジルの海岸には夥しいのである。體軀は大きく、甲は四尺の長さには達し、吻端より尾端までの長さは六尺以上に達し、體重は百二十貫九百六十匁位に達する。尤も全長は八尺に達し、體量實に百九十三貫五百二十六匁に上つたものがあつた。前肢は頗る長くして、之を左右に擴張するとき、一端より一端まで、一丈に達するのである。甲は全部鞣皮質にして、色は暗褐色若くは漆黒色で、黒漆色の表皮は、恰も薄紙の如く薄いのである。背面上は、五條の縦線を有し、この線は稍々隆起し、兩線の中間には、少しく凹所を有する。また縦線は體の後部に於て、少しく棘狀の突起を有する。腹甲面は黒色にして、且つ不規則の白斑を有するのである。尾は極めて短小にして、後肢も亦極めて短いのである。

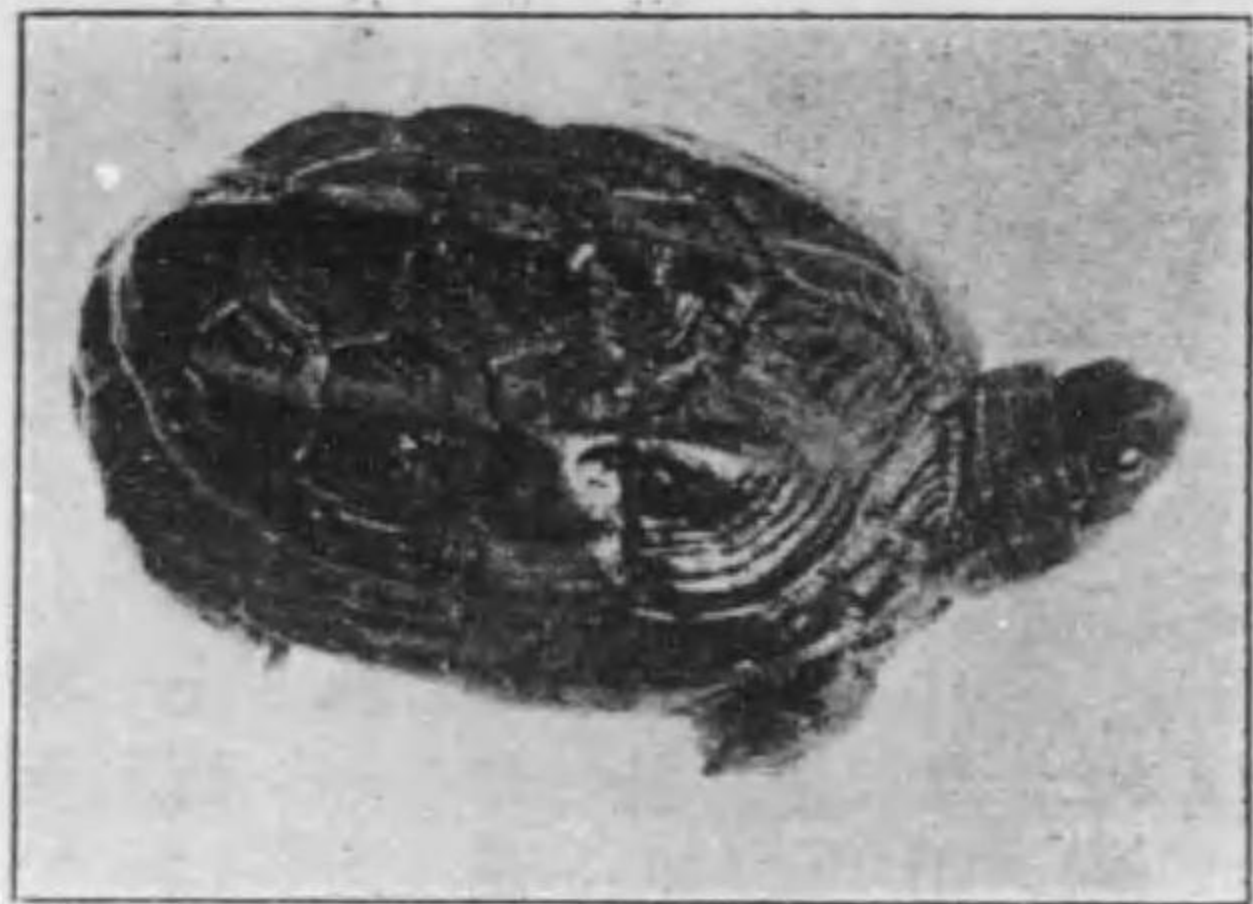
この龜は巨大なれども、水中の游泳は極めて巧妙にして、産卵期に際して、砂濱に上り來る外は、陸地に近くことはない。常に甲殼類、軟體動物及び魚類を食し、肉は食ふに堪へずといふ。

第二亞目 真正龜類 (Thecophora)

〔一〕 龜科 (Testudinidae)

本科のものは濠太利亞及びバブアシアを除き、全世界の温帯及び熱帯に分布し、甲表面には表皮の變化せる角質板を有し、大多數のものは、頸をば、全く甲内に收藏するところ出来る。而して頂骨板には、肋骨板の如き形狀をなせる、大なる突起を有するところなく、腹甲は九個の骨板より成る。水棲のものにありては、趾には幅廣き蹼を有し、沼地に徘徊するものにては、蹼は不完全に發育する。而して皆主として地上に棲息し、中には砂漠に産するものもある。

〔一〕 秦龜アサガミ又くアサガミがめ *Damonia reevesii*, Gray.



めがまや 圖七十九百三第 (After Ditmars)

英名を「リーベスタートル」(Reeve's Turtle)といふ。背甲は一様に褐色にして、長さは三寸四分位である。背甲は扁平にして、三縦隆起を有する。腹甲は黄色にして、各甲板には、大なる暗褐色を有するか、或は褐色にして、縫合線に於てのみ、黄色なるものがある。而して腹甲は扁平にして、その側縁には稜がある。頭は稍大きく、嘴は突出し、眼は銀白色にして、頸の各側に沿ふて、二三の黄色線を有し、喉と頸との下面には、黄色の斑

紋が存在する。趾には、爪根に至るまで蹠を具へて居る。本種は、本邦及び支那に産し、本州にては、中國邊に多いやうである。常に蠕蟲、魚類等を食ふのである。

〔一〕 水龜いしがめ又ぜにがめ (幼名) *Clemmys japonica*, Schleg.

本種は、本邦の特産である。背甲は扁平にして、一本の鈍き縦走隆起を有し、後縁は鋸齒状となり、甲の上面は暗褐色である。腹甲は大きく、黒色であるが、幼者にありては、最後に、狭き黄色の縁がある。角質板は橄欖褐色、又は黒色にして、四肢の外縁に沿ふて、淡褐色の線がある。また尾の上面に沿ふて、一條の廣き淡褐色をなせる部がある。前後肢共に、五趾を有し、後肢の第五趾には、爪なく、趾には、皆爪根に至る迄蹠を有するのである。常に池沼及び川流に棲息し、小魚、蛙、蠕蟲を食し、初夏、水邊の砂地に上りて、産卵するのである。卵及び肉は食用とする。

〔三〕 臺灣龜 *Ocadia sinensis*, Gray.

本種は、南支那、廣東及び臺灣に産し、背甲の長さは七八寸である。その色は橄欖褐色にして、各甲板の上に、一黄斑を有する。腹甲は黄色にして、各甲板には、一大暗褐色斑を有し、橋には、四個の圓るき黒斑を有する。四肢には、頭と頸と同様に、縦走せる、狭き淡色線を有し、線の縁邊は、黒色である。而して趾間には、廣い蹠を有するのである。

〔四〕 八重山龜又箱龜 *Cyclenys flavomarginata* (Gray)

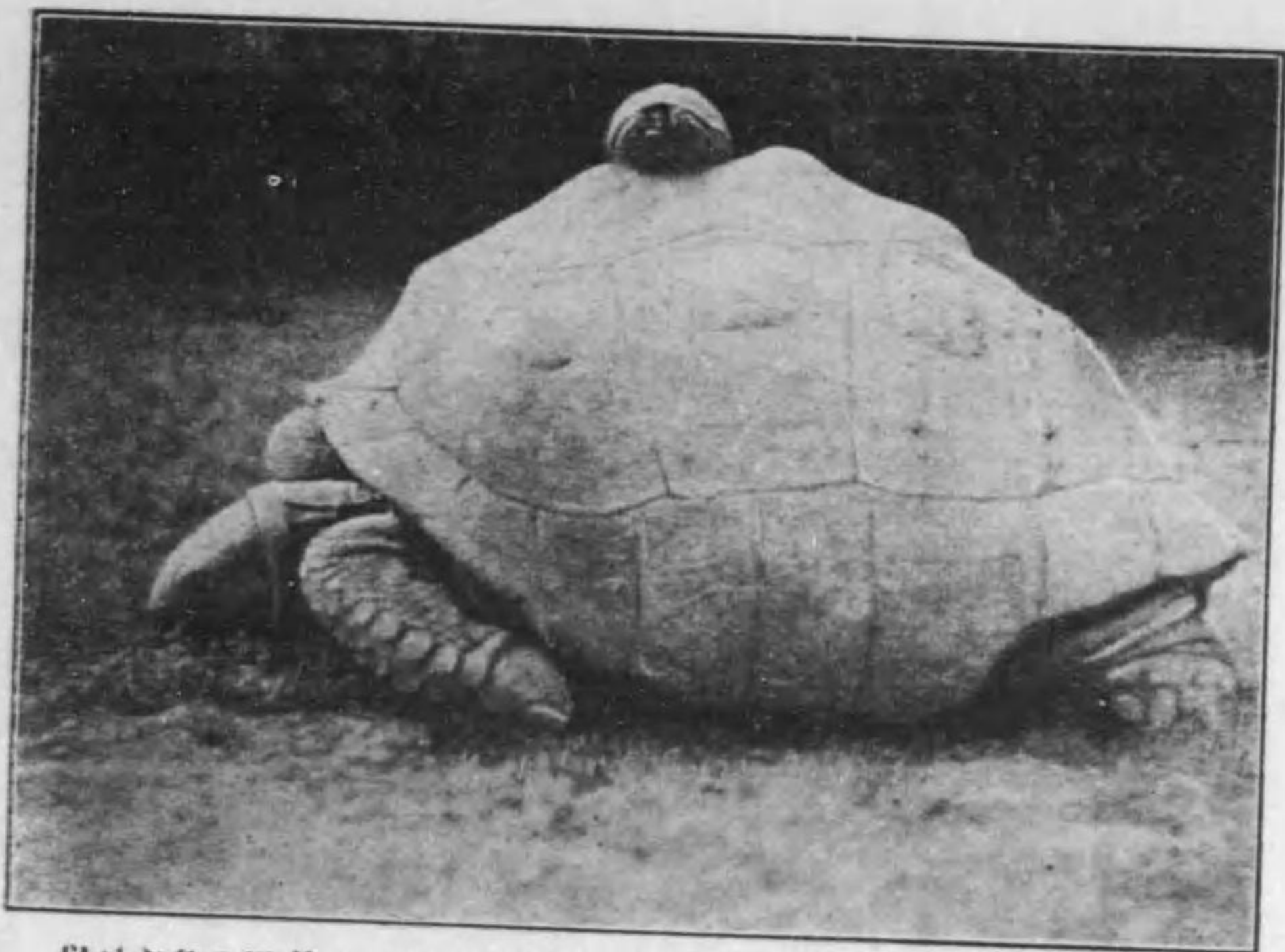
英に「ボックス、タートイス」(Box Tortoise)と稱する類である。八重山群島、及び臺灣に産する龜にして、背甲は著るしく高く、暗褐色にして、各甲板の中央は、淡褐色である。腹甲は、鞣帶を以つて、背甲と結合し、橋を缺いて居る。腹甲の色は暗褐色にして、不規則なる幅狭き黄色縁を有する。而して腹甲の胸部に位する部分は、その中央部に、一線ありて、之に沿ふて、動くを以つて、冬季蟄伏するに當りては、頸と肢をば、甲中に收容し、且つ腹甲を以て、封じ込めた如き觀を呈し、外部より、頭や四肢を認むることが、出來ないのである。

〔五〕 象龜 *Testudo elephantina*, Dum and Bill.

英名を「エレファント、タートイス」(Elephant Tortoise)といふ。印度洋に於けるアルダブラ群島に産する大龜である。頭は甚だ小さく、頸は長くして、殆んど蛇のやうである。而して背甲は著るしく凸隆する。四肢の構造は、象の足に似たる觀を呈するを以つて、象龜の名がある。大なるものは、體重實に二十八貫四百二十餘匁に達するものがある。

〔一〕 海龜科 (Cheloniidae)

本科には、二屬四種を有し、その中の三種は、分布廣くして、地球上到る處の熱帶及び



第三百九十八圖 象龜 (背にあはる歐州に産する普通の龜より)
(By W. S. Berridge) (つて其の大きさを比較するところから来たる)

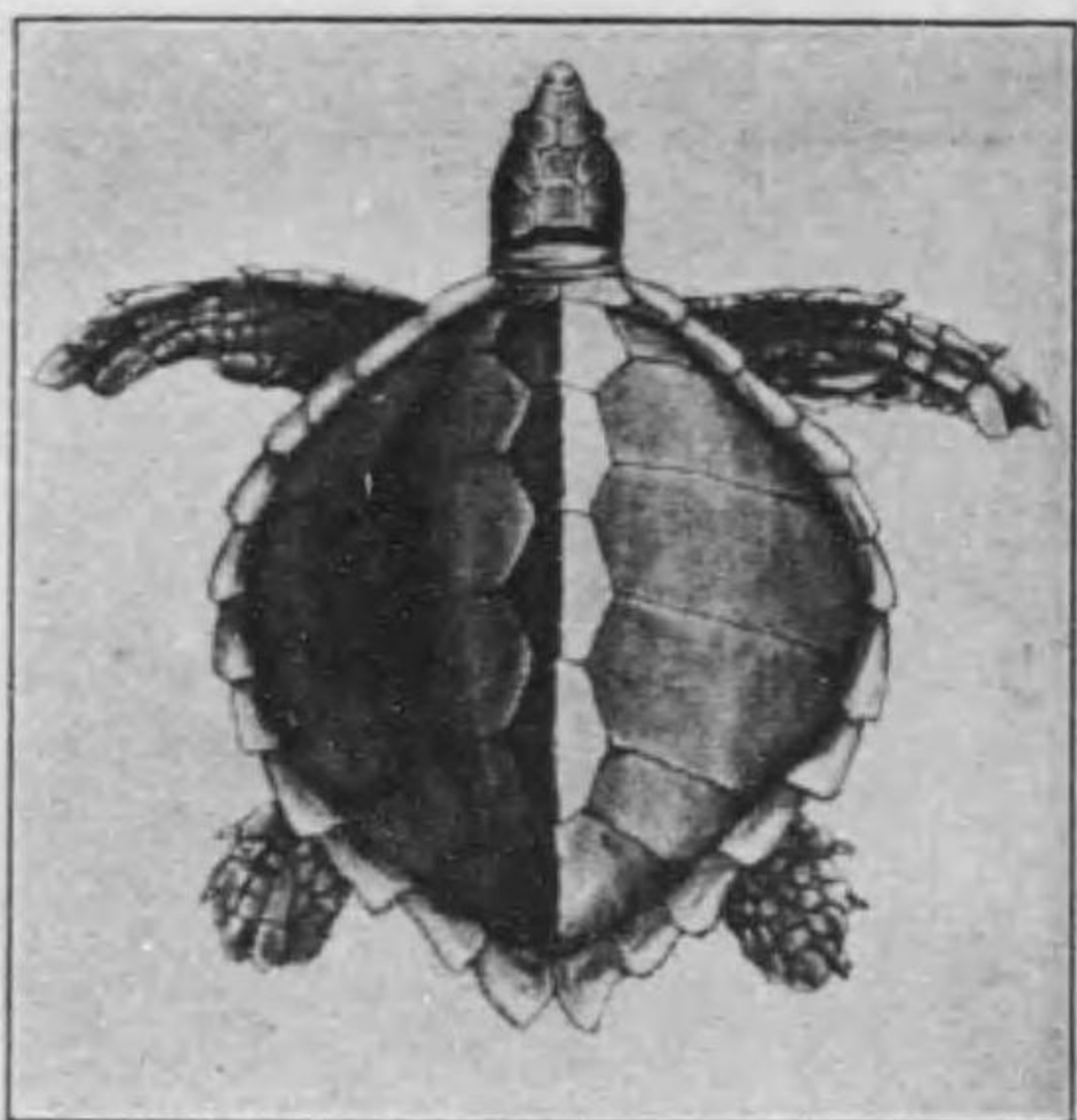
ある。背甲は厚く、且つ重くして、椎骨板と肋骨板との總数は、十五枚である。頭と四肢と

〔一〕 蠟龜 *Thalassochelys caretta*, Linn.

英名を「ロツガー、ヘッド、タート、ネ」(Logger-head Turtle)といふ。アラウミガメよりは、頭稍

大きく、幼者の前肢には、二爪を有するので

には、粗糙なる鞣皮様の甲板を有し、背甲は一樣に茶褐色なるが、時には不分明なる黄色の斑紋を有するものがある。大なるものには、甲の長さは四尺で、體重は六十六貫四百八十匁に達するものがあるが、甲の長さが三尺で、體重三十六貫二百八十匁許

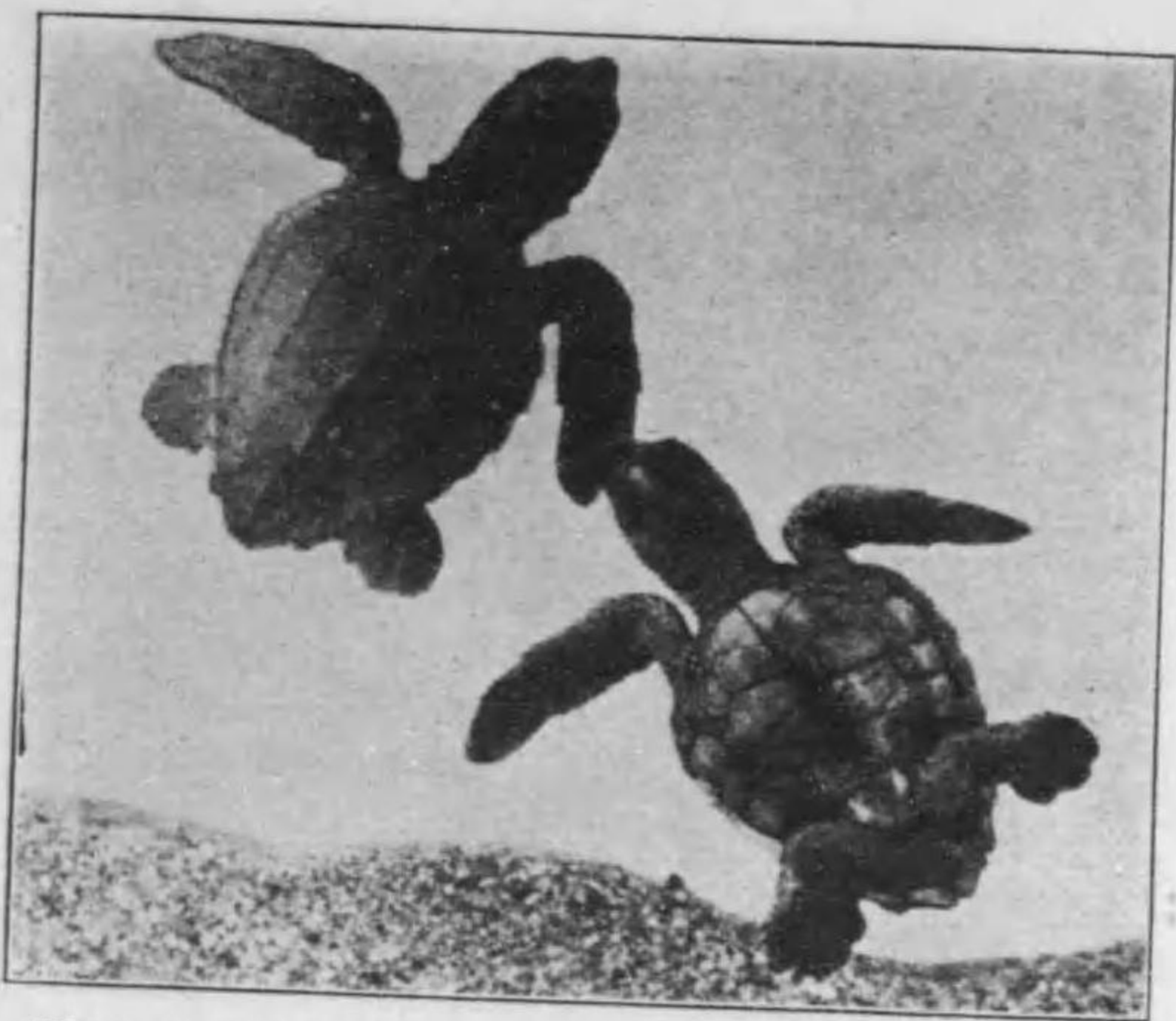


第三百九十九圖 甲カワミガメ
(From Clas)

に達する位のもは、稀れではないのである。常に熱帯、亞熱帯の海洋及び地中海等に棲息する。本邦にては、駿河、遠江、志摩等の海濱に來りて、産卵するのである。編者が數年前、三重縣志摩郡濱島に於て、小學校教員某氏の實驗談を聞きたる所に據れば、同郡甲賀村大字奥濱(國府村と境)にて發見したるものは、卵の總數二十六個であつた。また同郡志島村の越後濱にて、發見したるものは、その卵數は三十六個で、大きさは鶏卵大で、少しく、橢圓形をなし、且つ尖つて居ない。卵殼は寒天の如く、フハ〜であつたさうである。時は七月であつて、穴の跡は不明であつたさうである。該地方では、俗に、舊八月頃、母が子を連れに來るといふて居る。

フロリダ沿岸にありては、五月及び六月に、この種の大數が、海濱に來りて、産卵する。

その産付する卵数は、非常に多数にして、五十個より多きは千に達するものがあつて、産卵数は雌の大き及び年齢に因りて、變化するのである。而して雌は、通例、夜間に水を



(From Reptiles of the World) 子の龜海赤 圖百四第

出で、陸上に匍ひ上り、潮の去來する所の砂地に來りて、前肢にて砂を掻き集め、この中に這ひ込み、後肢で砂をば體の後方に掻き出して、穴を大くなし、そこに直ちに産卵したる後、砂をばこの上に被ぶせてから、忽ちにして、海に逃れ去るのである。而して海濱へ來往する、通路は實に不規則なるを以つて、その産卵の場所を、知るに困難である。卵は凡そ二ヶ月許にして、孵化する。幼者の背甲には、三本の縦隆起を有し、充分強健に成長する迄は、淺き入江にありて、外洋に出づることはない。如上述べたるが如く、雌の産卵数は多けれども、孵化せる幼兒は、大魚及び海鳥の爲めに、大に苦しめらるゝを以つて、實際親となるまで生存し得るものは、極めて少いのである。この種は魚肉を食ふを以つて、

肉には一種の臭氣ありて、食用にはならないのである。

〔一〕 綠蠟龜又正覺坊 *Chelone mydas*, Linn.

英名をグリーン・タートル (Green Turtle) といふ。この名は、その脂肉の綠色なるより、起つたものである。背甲は平滑にして、老成せるものによりては、光澤を有する。その色は橄欖色若くは褐色にして、黄色の斑紋を有する。肋甲板は四對、綠甲は二十五枚ありて、各甲板は互に密接して、覆瓦狀をなすことはいないのである。また肢には、唯一個の爪を有する。甲の長さは、三尺五寸に達し、體重は四十八貫三百八十四匁に達するのである。腹甲は扁平且つ柔軟である。これ産卵の際、海濱に上り來る外、體をば地に觸るゝことなきを以つて、腹甲が別段に、硬固なるべき必要がないのである。

本種は、好んで温暖なる海を徘徊し、大西洋沿岸に沿ふて、灣流に従ひて遊泳し、時には、歐洲の沿岸に來ることがある。我邦にては、小笠原島、琉球及び臺灣に於て、多く産し、常に海藻を食ふ。肉は赤色、稍牛肉に似たれども、味は佳くはない。歐羅巴にて、賞用するスープは、甲の内面なる皮下結締組織より、製するのである。脂肪より石鹼を製し、また油を採り、種々の用に供する。また甲は瑤瑁の代用となるのである。

〔二〕 瑤瑁 *Chelonia imbricata*, Linn.